

4D Chart

ユーザリファレンス
Windows[®] and Mac[™] OS



ACI

4D Chart ランゲージリファレンス Windows® and Mac™ OS

Copyright© 1994 - 2000 ACI SA

All rights reserved.

このマニュアルに記載されている事項は、将来予告なしに変更されることがあり、いかなる変更に関してもACI SAは一切の責任を負いかねます。このマニュアルで説明されるソフトウェアは、本製品に同梱のLicense Agreement（使用許諾契約書）のもとでのみ使用することができます。

ソフトウェアおよびマニュアルの一部または全部を、ライセンス保持者がこの契約条件を許諾した上での個人使用目的以外に、いかなる目的であれ、電子的、機械的、またどのような形であっても、無断で複製、配布することはできません。

4th Dimension、4D Server、4D、4Dロゴ、ACIロゴ、およびその他のACI製品の名称は、ACI SAの商標または登録商標です。

Microsoft とWindows はMicrosoft Corporation 社の登録商標です。

Apple, Macintosh, Mac, Power Macintosh, Laser Writer, Image Writer, ResEdit, QuickTimeはApple Computer Inc.の登録商標または商標です。

その他、記載されている会社名、製品名は、各社の登録商標または商標です。

注意

このソフトウェアの使用に際し、本製品に同梱のLicense Agreement（使用許諾契約書）に同意する必要があります。ソフトウェアを使用する前に、License Agreementを注意深くお読みください。

序章	9
第1章	ランゲージを使用する	1 1
	「メソッド」エディタにおけるコマンド	12
	ドキュメントへの参照	13
	エリアID番号とエリア変数	13
	デフォルトエリアを使用する	15
	オブジェクトへの参照	16
	オブジェクトの配置場所（座標）を指定する	17
	スコープへのコマンド指定	17
	4D Chartエラーの取り扱い	19
第2章	プログラムでグラフを作成する	2 1
	データベース内のレコードを使ってグラフを作成する	22
	フィールドで定義された系列を使って2次元グラフを作成する	22
	フィールドで定義された系列を使って3次元グラフを作成する	25
	レコードのデータによって定義された系列を使って2次元グラフを作成する	28
	レコードのデータによって定義された系列を使って3次元グラフを作成する	31
	配列を使ってグラフを作成する	34
	配列を使って2次元グラフを作成する	34
	配列を使って3次元グラフを作成する	38
第3章	エリア制御コマンド	4 3
	CT DO COMMAND	44
	CT MENU STATUS	45
	CT ON ERROR	46
	CT ON EVENT	47
	CT ON MENU	48
	CT Error	50
	CT EVENT FILTER	51
	CT EXPERT COMMAND	52
	CT EXPERT MODE	53
	CT Last event	54
	CT SET ENTERABLE	55

	CT Get display	56
	CT SET DISPLAY	57
	CT GET DOCUMENT SIZE	58
	CT SET DOCUMENT SIZE	59
	CT GET PROPERTIES	60
	CT SET PROPERTIES	62
第4章	オブジェクトコマンド	65
	CT Draw text	66
	CT Draw line	67
	CT Draw rectangle	68
	CT Draw oval	69
	CT Array to polygon	70
	CT Place picture	71
	CT Get ID	72
	CT Get object type	73
	CT Get refnum	74
	CT SET REFNUM	75
	CT GET BOUNDARY	76
	CT GET TEXT ATTRIBUTES	77
	CT SET TEXT ATTRIBUTES	78
	CT GET LINE ATTRIBUTES	80
	CT SET LINE ATTRIBUTES	81
	CT GET FILL ATTRIBUTES	82
	CT SET FILL ATTRIBUTES	83
	CT SELECT	84
	CT MOVE	85
	CT SIZE	86
	CT Count	87
	CT ALIGN	88
	CT GET HIGHLIGHT	90
	CT SET HIGHLIGHT	91
	CT INSERT FIELD	93
	CT INSERT EXPRESSION	95
第5章	エリアコマンド	97
	CT AREA TO AREA	98
	CT AREA TO FIELD	99
	CT FIELD TO AREA	100
	CT Area to picture	101
	CT PICTURE TO AREA	102

第6章

CT NEW DOCUMENT	103
CT OPEN DOCUMENT	104
CT SAVE DOCUMENT	105
CT New offscreen area	106
CT DELETE OFFSCREEN AREA	107
CT GET AREA BOUNDARY	108
チャートコマンド	109
プログラムでグラフを作成する	110
CT Chart arrays	111
CT Chart selection	114
CT Chart date	116
グラフ属性を変更する	118
CT GET CHART FILL ATTRIBUTES	118
CT SET CHART FILL ATTRIBUTES	119
CT GET CHART TEXT ATTRIBUTES	120
CT SET CHART TEXT ATTRIBUTES	121
CT GET CHART LINE ATTRIBUTES	123
CT SET CHART LINE ATTRIBUTES	124
CT SET FILL ATTRIBUTES	125
CT SET LINE ATTRIBUTES	127
CT GET VALUE ATTRIBUTES	128
CT SET VALUE ATTRIBUTES	129
CT SHOW GRID LINES	131
CT GET AXIS ATTRIBUTES	132
CT SET AXIS ATTRIBUTES	133
CT GET LABEL ATTRIBUTES	134
CT SET LABEL ATTRIBUTES	135
CT GET TITLE ATTRIBUTES	137
CT SET TITLE ATTRIBUTES	138
CT GET LEGEND ATTRIBUTES	139
CT SET LEGEND ATTRIBUTES	141
CT Get legend text	143
CT SET LEGEND TEXT	144
CT GET REAL SCALE	145
CT SET REAL SCALE	146
CT GET X REAL SCALE	147
CT SET X REAL SCALE	149
CT GET DATE SCALE	150
CT SET DATE SCALE	152
CT GET X DATE SCALE	154

	CT SET X DATE SCALE	155
	CT GET DEPTH.....	156
	CT SET DEPTH	158
	CT GET 3D VIEW	159
	CT SET 3D VIEW	160
	CT GET CHART PART.....	161
	CT GET CHART OPTIONS.....	162
	CT SET CHART OPTIONS.....	163
	CT Get chart type	164
	CT SET CHART TYPE	165
	CT UPDATE CHART	166
	CT Get chart picture	167
	CT SET CHART PICTURE.....	168
	CT EXPLODE PIE	169
	CT GET TIPS ATTRIBUTES	170
	CT SET TIPS ATTRIBUTES.....	172
	CT GET CHART COORDINATES.....	174
	CT SET CHART COORDINATES	175
第7章	ホットリンクコマンド.....	177
	CT PUBLISH.....	177
	CT ADD TO HOT LINK	178
	CT UNSUBSCRIBE	180
	CT Subscribe	181
	CT UNPUBLISH.....	182
第8章	印刷コマンド.....	183
	CT PRINT	183
	CT PRINT MERGE.....	184
第9章	ユーティリティコマンド.....	187
	4D Chartコマンドでカラーを指定する.....	187
	CT RGB to color.....	188
	CT COLOR TO RGB	189
	CT index to color.....	190
	CT Color to index	191
	CT Font name	192
	CT Font number	192
	CT Clipboard to picture.....	193
	CT PICTURE TO CLIPBOARD	194
付録A	グラフのキーボードショートカット.....	195

	多角形の描画	195
	テキストの入力	195
	選択オブジェクトの移動	195
	オブジェクトサイズの変更	196
	オブジェクトの選択	196
	メニューコマンドのショートカット	196
付録B	コマンドコード	197
付録C	エラーコード	201
付録D	引数コード	205
	引数<タイプ>と<特定部分>のコード	205
	パターンコード	207
	グラフタイプのオプションコード	207
	コマンド索引	209

本書は『4D Chart ランゲージリファレンス』マニュアルです。

4D Chartプラグインは、4th Dimensionバージョン6に統合されるようになりました。このプラグインが4D自体の一部になったので、『4D Chart ユーザリファレンス』マニュアルは『4th Dimension ユーザリファレンス』マニュアルに統合されました。

ACIのソフトウェアは主要な進化を実現しているので、このマニュアルに統合できなかった変更点もあります。以下のコマンドの名称が変更されていることに注意してください。

旧コマンド名	4D Chart V6でのコマンド名
CT_SET PREFERENCES	CT SET PROPERTIES
CT_GET PREFERENCES	CT GET PROPERTIES

これらの変更はユーザが作成するコードの実行には何ら影響を与えません。ユーザが作成したコードは、4Dバージョン6でオープンすると自動的に変換されます。

注：旧バージョンの4D Chartは、日本では発売されていません。

4D Chartは、4th Dimensionプログラム言語に100を超えるコマンドを追加します。4D Chartコマンドを使用すると、通常は手動で行っている作業を制御することができます。

例えば、ドキュメントを開く、保存する、グラフの作成や変更、4D Chartメニューコマンドの実行、または他の4th Dimensionモジュールとのホットリンクによる連動等ができます。

4D Chartコマンドには、すべて先頭に「CT」が付くので、標準の4th Dimensionコマンドや他のモジュールから追加されたコマンドと区別できます。

このマニュアルでは、4D Chartコマンドは**CT OPEN DOCUMENT**のように特殊フォントの大文字で表記します。4D Chart関数は**CT Get object type**のように最初の文字だけを大文字にして表記します。

このマニュアルの例の中には、スペースの関係でコードの行が2行目や3行目に継続するものもあります。ただし、これらの例を入力するときには、コードの行は1行で入力し、フローを分断するreturnキーは押さないでください。

「メソッド」エディタにおけるコマンド

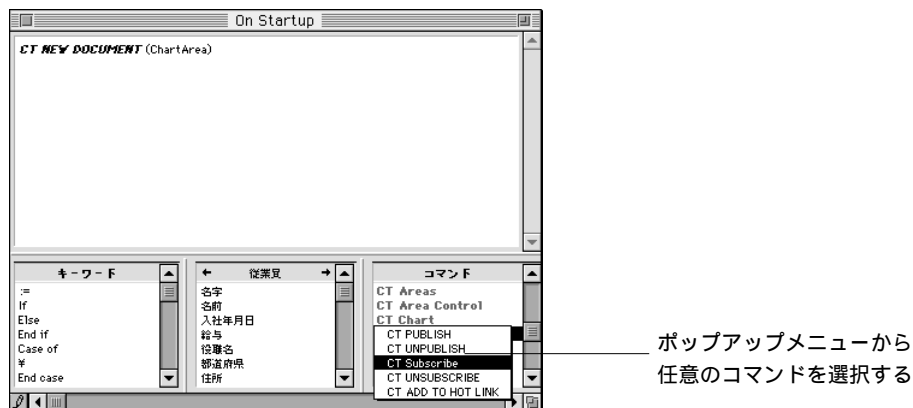
4D Chartコマンドは、「メソッド」エディタではテーマごとにグループ化され、「ルーチン」リストの最後に表示されます。



複数のモジュールをインストールしている場合には、リストに表示されるテーマの順序はモジュールがインストールされた順序と同じになります。

4D Chartコマンドは、4th Dimensionのコマンドがアルファベット順でも、テーマごとにグループ分けされていても、テーマごとにグループ分けされて表示されます。

4D Chartコマンドのメソッドへの配置は、4th Dimensionコマンドに対して行うのと同じように、メソッドの中に入力するか、コマンドを「ルーチン」リスト内のポップアップメニューから選択して行います。



4D Chartコマンドは、プロジェクト、トリガ、フォーム、オブジェクトメソッドといった任意の種類のメソッドで使用できます。コマンドは、4D Chartエリアと同じフォーム上にあるオブジェクトから起動されたオブジェクトメソッドで使用するると特に便利です。

ドキュメントへの参照

4D Chartドキュメントを制御する為にコマンドを使用する場合は、ドキュメントのエリアID番号でドキュメントを特定する必要があります。エリアID番号は4D Chart内部のものであり、通常は変数内に格納されています。

4D Chartドキュメントは、フォーム上のエリア、プラグインウインドウ、オフスクリーンエリアの3つの場所のいずれかに存在できます。ドキュメントの場所が確定すると、4D Chartはドキュメントを配置して、処理を行う為にドキュメントのエリアID番号が必要になります。

エリアID番号とエリア変数

4D Chartは、4D Chartエリア、外部ウインドウ、オフスクリーンエリアの場所を格納する為に変数を使用します。コマンドや関数の引数（パラメータ）としてエリアのID番号を含む変数を渡すことで、処理を実行するエリアを参照してください。

この概説の後に記載するコマンド説明では、ドキュメントエリアを特定する変数を<エリア>引数といいます。

<エリア>変数には、2つの種類があります：

プラグインエリアオブジェクト名

プラグインウインドウまたはオフスクリーンエリア用にユーザが作成した変数

これら2種類の変数については、次節以降で説明します。

外部オブジェクト名

フォーム内で4D Chartエリアを作成し、名前を付けると、4th Dimensionが自動的に4D Chartエリアの名前をそのエリアを参照する変数として認識します。例えば、引数<エリア>に「利益」を指定することによって、「利益」エリアを参照できます。

プラグインウィンドウとオフスクリーンエリア

Open external window関数または**CT New offscreen area**関数を使用してプラグインウィンドウやオフスクリーンエリアを作成すると、関数から返るエリアID番号が変数に格納されます。その後、この変数を他のコマンドや関数で使用すると、プラグインウィンドウやオフスクリーンエリアを参照できます。変数に値を格納するには、変数名と代入演算子(:=)をコード行で関数の右側に指定します。

次の例は、4D Chartプラグインウィンドウを作成し、エリアID番号を「MyArea」変数に格納します。

```
MyArea:=Open external window (30 ; 30 ; 450 ; 8 ; "利益" ; "_4D Chart")
```

デフォルトエリアを使用する

デフォルトエリアは、すべての新規4D Chartとプラグインウインドウのデフォルト属性を設定する為に使用できるRAM内のテンプレートです。4D Chartエリアに対して実行できるコマンドは、その<エリア>引数を-1に設定すると、デフォルトエリアで実行できます。メソッドを使用すると、他の任意のエリアで行う処理をデフォルトエリアで実行できます。

デフォルトエリアを使用すると4D Chartエリアに対する不要なコードの実行を軽減することができます。例えば、新規の4D Chartエリアとプラグインウインドウすべてをスクロールバーなしで表示させる場合は、エリアやプラグインウインドウで個別にスクロールバーをオフにする必要がありません。

ユーザは4D Chartエリアとプラグインウインドウの両方の属性を設定できます。フォーム上の新しい4D Chartエリアや新しいプラグインウインドウが開かれた場合には、デフォルトエリアはいつでもテンプレートとして自動的に使用されます。コードを実行する必要がまったくないので、デフォルトエリアはチャートエリアを高速にカスタマイズする方法を提供します。

デフォルトエリアをすべての新しい4D Chartエリアに適用したくない場合には、4D Chartエリア用のディスク上にテンプレートを作成するか、フォームのBeforeフェーズに適切なコードを配置することによってデフォルトエリアを上書きできます。ディスク上のテンプレートまたはフォームのOn loadイベントのコードは、デフォルトエリアよりも優先されます。

オブジェクトへの参照

4D Chartドキュメントのすべてのオブジェクトには、一意な番号が与えられています。この番号は、オブジェクトのIDであり、オブジェクトが作成されるときに割り当てられます。

これは、グラフの作成、「ツール」パレットでのオブジェクトの描画、クリップボードからのオブジェクトの貼り付け、複数のオブジェクトのグループ化、既存のオブジェクトの複製、ホットリンクの引用、フィールド参照の貼り付け等をするたびに、新しいIDが割り当てられることを意味します。オブジェクトIDは一意の為、IDはオブジェクトを参照する便利な方法です。オブジェクトIDがドキュメント内部で再使用されることはありません。たとえオブジェクトが削除されても、その番号はドキュメントがある間は「廃棄」されています。

オブジェクトIDは転送可能ではありません。ある4D ChartドキュメントのIDが5であるオブジェクトは、別のドキュメントに貼り付けられると必ずしも同じIDにはなりません。

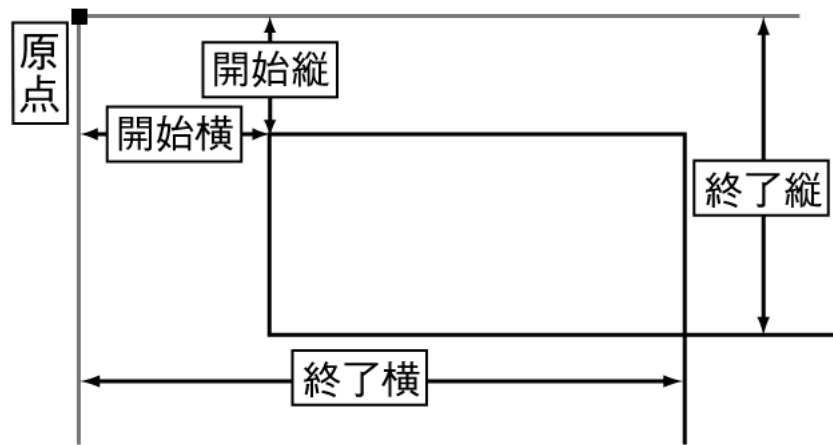
標準オブジェクト作成コマンドはすべて関数であり、結果のオブジェクトのIDを返します。パレットでユーザが作成したオブジェクトとは違い、コマンドで作成されたオブジェクトは自動的に選択されません。

CT Get ID関数を使用するとオブジェクトのIDを取得できます。

オブジェクトの配置場所（座標）を指定する

オブジェクトの位置とサイズをそのオブジェクトの「座標」といいます。座標の説明または指定を行うすべてのコマンドは、ポイント単位で行います。

位置の説明や指定を行うコマンドは、原点に対して行います。原点は横のルーラと縦のルーラのゼロ点の交差です。次の図は、座標システムを表しています。



スコープへのコマンド指定

多くの4D Chartコマンドには<スコープ>という引数があります。<スコープ>は4D Chartドキュメントのどのオブジェクトまたはテキスト文字がコマンドから影響を受けるのかを指定するものです。

次の表は、<スコープ>の一般的な規則を説明しています。<スコープ>が与えられたコマンドにどのように影響するかは、第3章から第9章までのコマンドごとの説明を参照してください。

スコープ	影響を受けるテキストまたはオブジェクト
>0	オブジェクトID
0	選択されたオブジェクト
-1	ドキュメントのすべてのオブジェクト
-2	デフォルト値
-3	テキストオブジェクトで選択された文字

次の表は、各項目、系列、数値のグラフ軸に割り当てることができるデータタイプの情報を示しています。

データタイプ	項目軸または 系列軸	数値軸	数値軸と互換性のある データタイプ
文字		×	...
テキスト		×	...
実数			整数、倍長整数
整数			実数、倍長整数
倍長整数			実数、整数
日付			...
時間		×	...
プール		×	...
ピクチャ	×	×	...
BLOB	×	×	...

注：グラフにはピクチャまたはBLOBフィールドを使用できません。

4D Chartエラーの取り扱い

4D Chartは、コードの実行中に発生するエラーを管理する複数の方法を提供します。次に示す方法を任意に組み合わせて使用してください。

CT Error関数を使用すると、処理を実行した後にエラーをチェックできます。**CT Error**関数は4D Chartが実行した最後の処理の状態を表すエラーコードを返します。**CT Error**関数に関する詳細は、第3章の「エリア制御コマンド」を参照してください。

CT ON ERRORコマンドを使用すると、4D Chartエラーを管理するプロシージャをインストールできます。プロシージャを**CT ON ERROR**コマンドでインストールした後、4D Chartは4D Chartのエラーが発生したときにそのプロシージャを呼び出します。**CT ON ERROR**コマンドに関する詳細は、第3章の「エリア制御コマンド」を参照してください。

引数に値を返す関数やコマンドを実行した後は、エラーのチェックができます。関数の実行中にエラーが発生した場合、関数は-32000を返します。引数に値を返すコマンドが特定の引数に対する値を取り出しているときにエラーを検出した場合は、その引数に-32000を返します。

この章は、4D Chartのコマンドと関数を使ったプログラムによるグラフの作成について、6つの実例を紹介します。

各セクションでは、以下を掲載します。

例に使用される状況の説明

サンプルデータベースの構造

サンプルデータを使用して、すべてメソッドで作成されたグラフ

サンプルグラフの作成に使用されたコード

4D Chartコマンドの完全な説明については、このマニュアルの第3章から第9章までを参照してください。

データベース内のレコードを使ってグラフを作成する

以下に示す4つの節は、CT Chart selection関数とCT Chart data関数を使用した2次元グラフと3次元グラフの作成例です。

フィールドで定義された系列を使って2次元グラフを作成する

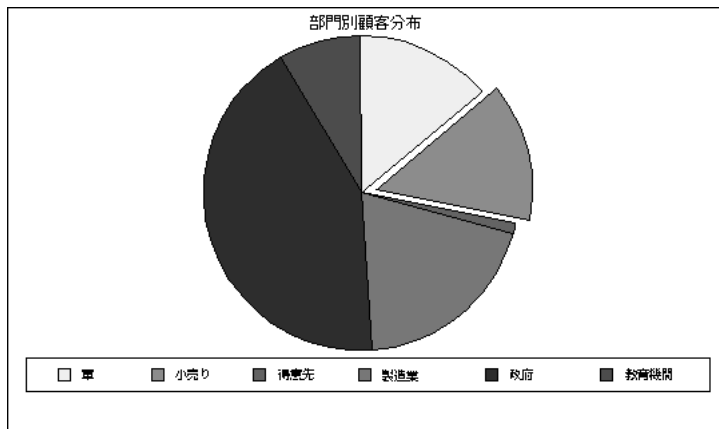
あなたがソフトウェア会社を経営し、政府、教育機関、小売りなど、多岐に渡る分野の顧客を抱えているとします。あなたのデータベースは顧客と営業の履歴を取っています。

将来の製品開発とマーケティング用に顧客全体の履歴記録を続行するために、それぞれの分野でソフトウェアが何単位売れたのかを知りたいと思っています。

以下のストラクチャファイルは、サンプル用に簡略化したものです。

ClientData	
顧客コード	A
顧客タイプ	A
顧客単位	2

4D Chartを使用して、以下のグラフを生成します。これは、各分野での全営業成績の割合を示したものです。



以下はサンプルグラフを作成するために使用された「顧客別利益」メソッドのコードです。

```
`メソッド：顧客別利益
`項目：顧客タイプ(グループ化)
`数値：購入された単位の数
C_LONGINT ($Left ; $Top ; $Right ; $Bottom)
C_LONGINT ($Left2 ; $Top2 ; $Right2 ; $Bottom2)
C_LONGINT ($Area ; $Chart ; $Title ; $Locate)

`チャート用のレコード選択を生成
ALL RECORDS ([ClientData])
`数値データを含むフィールドの配列
`この配列の要素数は系列の数と同じ
ARRAY LONGINT ($aFields ; 1)
$aFields{1}:=[Field (->[ClientData]CustID)
`インターフェース要素を隠す
CT SET DISPLAY (Area ; 1 ; 0) `メニューを隠す
CT SET DISPLAY (Area ; 2 ; 0) `チャートツールを隠す
CT SET DISPLAY (Area ; 3 ; 0) `オブジェクトツールを隠す
CT SET DISPLAY (Area ; 6 ; 0) `スクロールバーを隠す
CT SET DISPLAY (Area ; 9 ; 0) `ルーラーを隠す`2D 円グラフを作成する
$Chart:= CT Chart selection (Area ; 6 ; 1 ; 1 ; Table (->[Market Data]) ; 2 ; $aFields)
`10度パイウェッジを移動する#3
CT EXPLODE PIE (Area ; $Chart ; 2 ; 10)
`凡例を配置する場所を設定する (下, 水平方向)
CT SET LEGEND ATTRIBUTES (Area ; $Chart ; 1 ; 0 ; 0 ; 0 ; 8 ; 0 ; 0)
`左上隅にチャートタイトルを追加する
$Title:= CT Draw text (Area ; 1 ; 1 ; 210 ; 3 ; "部門別顧客分布")
`チャートタイトルをフォーマットする (Osaka, 14ポイント, 太字, 中央揃え, 黒)
$Color:=CT Index to color (16)
$Font:=CT Font number ("Osaka")
CT SET TEXT ATTRIBUTES (Area ; $Title ; $Font ; 14 ; 1 ; $Color ; 1)
`エリア内のオブジェクトを中央に揃えるためにエリア境界を取得する
CT GET AREA BOUNDARY (Area ; 1 ; $Left ; $Top ; $Right ; $Bottom)
`チャートをウインドウサイズから50ポイント小さく変更する
CT SIZE (Area ; $Chart ; $Right-50 ; $Bottom-50)
`チャートを中央揃えする
CT GET BOUNDARY (Area ; $Chart ; $Left2 ; $Top2 ; $Right2 ; $Bottom2)
$Locate:=((($Right-$Left)-($Right2-$Left2))/2)
CT MOVE (Area ; $Chart ; $Locate ; $Top2)
`タイトルを中央揃えする
CT GET BOUNDARY (Area ; $Title ; $Left2 ; $Top2 ; $Right2 ; $Bottom2)
```

$\$Locate:=((\$Right-\$Left)-(\$Right2-\$Left2))/2$

CT MOVE (Area ; \$Title ; \$Locate ; \$Top2)

`チャートを9ポイント分下げ、タイトルの下に表示されるようにする

CT GET BOUNDARY (Area ; \$Chart ; \$Left ; \$Top ; \$Right ; \$Bottom)

CT MOVE (Area ; \$Chart ; \$Left ; \$Top+9)

`すべてのオブジェクトの選択を解除する

CT SELECT (\$Area;-1;0)

フィールドで定義された系列を使って3次元グラフを作成する

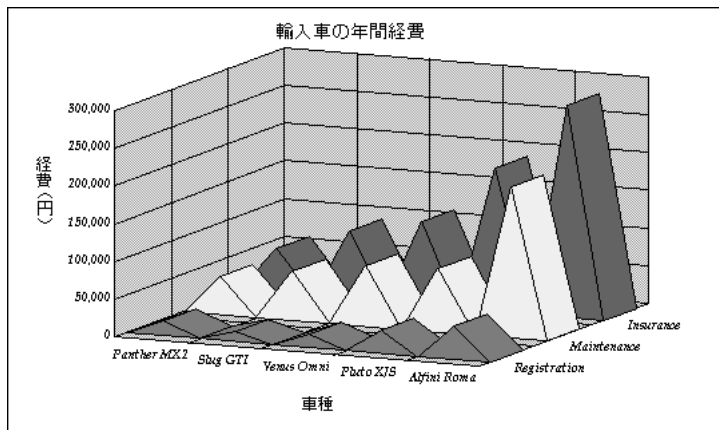
例えば、新車の市場におり、データベースを使用して手持ちの金で買える最高の車を決めようとしています。5台の車に選択を絞り込み、それぞれの車で年間の登録、保険、メンテナンスの経費がいくらかかるかを比べたいと思っています。

データベースのストラクチャは、以下の通りです。

Expenses	
車種	▲
価格	2
登録費用	2
保険費用	2
メンテナンス費用	2

収集した情報を解析するために、3次元グラフで情報をグラフ化することにしました。

4D Chartを使用して、以下のグラフを生成します。



「車種グラフ」プロジェクトメソッドは前述のグラフ作成に使われたものです。このメソッドは、**CT Chart selection**関数を使用します。**CT Chart selection**関数を使用するときには、この関数にフィールドの配列を渡します。フィールド名は系列名になり、フィールドの値が数値軸上でグラフ化されます。この例では、Registration（登録）、Insurance（保険）、Maintenance（メンテナンス）の各フィールドは、系列と数値のために使用されています。

以下は、「車種グラフ」プロジェクトメソッドのコードです。

メソッド：車種グラフ

項目：車種

系列：経費カテゴリー

数値：経費

```
C_LONGINT($Left ; $Top ; $Right ; $Bottom)
C_LONGINT(Area ; $Chart ; $Title ; $Locate ; $i)
C_LONGINT($Left2 ; $Top2 ; $Right2 ; $Bottom2)
`チャート用のレコードセクションを生成する
ALL RECORDS([Expenses])
ORDER BY([Expenses];[Expenses]Cost ; >)
`系列と数値のデータをフィールド配列に入れる
ARRAY LONGINT($aFields ; 3)
$aFields{1}:=[Field(->[Expenses]Registration)
$aFields{2}:=[Field(->[Expenses]Maintenance)
$aFields{3}:=[Field(->[Expenses]Insurance)
`インタフェース要素を隠す
CT SET DISPLAY (Area ; 1 ; 0) `メニューを隠す
CT SET DISPLAY (Area ; 2 ; 0) `チャートツールを隠す
CT SET DISPLAY (Area ; 3 ; 0) `オブジェクトツールを隠す
CT SET DISPLAY (Area ; 6 ; 0) `スクロールバーを隠す
CT SET DISPLAY (Area ; 9 ; 0) `ルーラを隠す
`3D 円グラフを作成する
$Chart:= CT Chart selection (Area ; 100 ; 2 ; 1 ; Table (->[Expenses]) ; 1 ; $aFields)
`スケールを設定する
CT SET REAL SCALE (Area ; $Chart ; 0 ; 0 ; 0 ; 0 ; 3000 ; 500 ; 100)
`凡例は表示しない
CT SET LEGEND ATTRIBUTES (Area ; $Chart ; 0 ; 0 ; -1 ; -1 ; 0 ; 0 ; 0)
`チャートタイトルを追加する
CT SET TITLE ATTRIBUTES (Area ; $Chart ; 0 ; 3 ; 0 ; "車種")
CT SET TITLE ATTRIBUTES (Area ; $Chart ; 1 ; 0 ; 0 ; "") `表示しない
CT SET TITLE ATTRIBUTES (Area ; $Chart ; 2 ; 2 ; 3 ; "経費")
`左上隅にタイトルを追加する
$Title:= CT Draw text (Area ; 1 ; 1 ; 300 ; 3 ; "輸入車の年間経費")
`タイトルをフォーマットする (Osaka , 14ポイント, 太字, 中央揃え, 黒)
```

```

$Color:= CT Index to color (16)
$Font:= CT Font number ("Osaka")
CT SET TEXT ATTRIBUTES (Area ; $Title ; $Font ; 14 ; 1 ; $Color ; 1)
`1番目の系列の色を緑に設定する
$Color:= CT Index to color (10)
CT SET CHART FILL ATTRIBUTES (Area ; $Chart ; 8 ; 100 ; 3 ; $Color)
`2番目の系列の色を黄に設定する
$Color:= CT Index to color (2)
CT SET CHART FILL ATTRIBUTES (Area ; $Chart ; 8 ; 200 ; 3 ; $Color)
`3番目の系列の色を赤に設定する
$Color:= CT Index to color (4)
CT SET CHART TEXT ATTRIBUTES(Area ; $Chart ; 8 ; 300 ; 3 ; $Color)
`すべてのプロット矩形用に塗りつぶし属性を設定する
$Color:= CT Index to color (8)
For ($ i ; 0 ; 2)
    CT SET CHART FILL ATTRIBUTES (Area ; $Chart ; 1 ; $i ; 5 ; $Color)
End for
`テキスト属性ラベルを設定する (Osaka , 9ポイント , 太字斜体)
$Font:= CT Font number ("Osaka")
For ($ i ; 0 ; 2)
    CT SET CHART FILL ATTRIBUTES (Area ; $Chart ; 4 ; $i ; $Font ; 9 ; 3 ; -1)
End for
`タイトル用のテキスト属性を設定する (Osaka , 12ポイント , 太字)
$Font:= CT Font number ("Osaka")
For ($ i ; 0 ; 2)
    CT SET CHART FILL ATTRIBUTES (Area ; $Chart ; 5 ; $i ; $Font ; 14 ; 1 ; -1)
End for
`中央揃え用のエリア寸法を取得する
CT GET AREA BOUNDARY (Area ; 1 ; $Left ; $Top ; $Right ; $Bottom)
`チャートをウインドウサイズから50ポイント小さく変更する
CT SIZE (Area ; $Chart ; $Right-50 ; $Bottom-50)
`チャートを中央揃えする
CT GET BOUNDARY (Area ; $Chart ; $Left2 ; $Top2 ; $Right2 ; $Bottom2)
$Locate:=((($Right-$Left)-($Right2-$Left2))/2)
CT MOVE (Area ; $Chart ; $Locate ; $Top2)
`タイトルを中央揃えする
CT GET BOUNDARY (Area ; $Title ; $Left2 ; $Top2 ; $Right2 ; $Bottom2)
$Locate:=((($Right-$Left)-($Right2-$Left2))/2)
CT MOVE (Area ; $Title ; $Locate ; $Top2)
`チャートを9ポイント下げる
CT GET BOUNDARY (Area ; $Chart ; $Left ; $Top ; $Right ; $Bottom)
CT MOVE (Area ; $Chart ; $Left ; $Top+9)
`すべてのオブジェクトの選択やめる
CT SELECT (Area ; -1 ; 0)
    
```

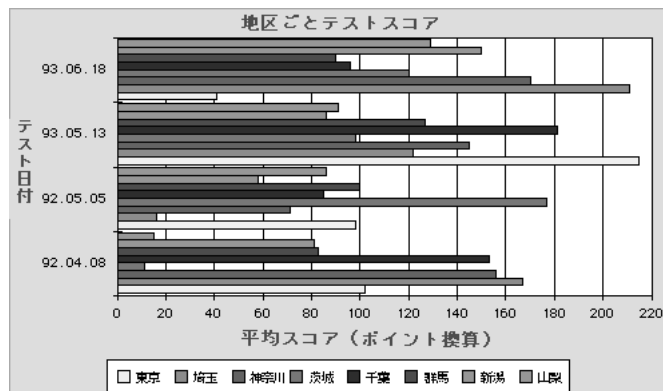
レコードのデータによって定義された系列を使って2次元グラフを作成する

例えば、教育プログラムの西日本地区担当者であり、該当地区の生徒達の標準テストスコアを別のテスト日付と比較したいと仮定します。

データベースには、テスト日付と出身地にタグが付いて、該当地区の生徒のスコアが保存されています。

Scores	
学生コード	23
テスト日付	7
スコア	26
地区	A

4D Chartを使用して、以下のグラフを作成します。



前述のグラフは、「スコアグラフ」プロジェクトメソッドによって作成されています。以下は、「スコアグラフ」メソッドのコードです。

メソッド：スコアグラフ

項目：テスト日付

系列：メンバーの県

数値：テストスコア

C_LONGINT (\$Left ; \$Top ; \$Right ; \$Bottom)

C_LONGINT (\$Left2 ; \$Top2 ; \$Right2 ; \$Bottom2)

C_LONGINT (Area ; \$Chart ; \$Title ; \$Locate ; \$Score ; \$Color ; \$Font ; \$Rect)

ALL RECORDS ([Scores])

ORDER BY ([Scores];[Scores]Test Date ; >)

`インタフェース要素を隠す

CT SET DISPLAY (Area ; 1 ; 0) `メニューを隠す

CT SET DISPLAY (Area ; 2 ; 0) `チャートツールを隠す

CT SET DISPLAY (Area ; 3 ; 0) `オブジェクトツールを隠す

CT SET DISPLAY (Area ; 9 ; 0) `ルーラを隠す

CT SET DISPLAY (Area ; 6 ; 0) `スクロールバーを隠す

`2D 棒グラフを作成する

\$Chart:= **CT Chart data** (Area ; 2 ; 1 ; 1 ; 1 ; **Table** (->[Scores]) ; 2 ; 4 ; 3)

`水平棒グラフをにする

ARRAY LONGINT (\$aOptions ; 4)

\$aOptions{1}:=1 `方向：水平

\$aOptions{2}:=0 `積み重ねなし

\$aOptions{3}:= 0 `重ねるなし

\$aOptions{4}:=50 `間隔 = 50%

CT SET CHART OPTIONS (Area ; \$Chart ; \$aOptions)

`軸タイトルを表示する

CT SET TITLE ATTRIBUTES (Area ; \$Chart ; 0 ; 2 ; 3 ; "テスト日付")

CT SET TITLE ATTRIBUTES (Area ; \$Chart ; 2 ; 3 ; 0 ; "平均スコア(ポイント換算)")

`項目軸タイトルをフォーマットする (Osaka , 緑 , 太字 , 12ポイント)

\$Color:= **CT Index to color** (9)

\$Font:= **CT Font number** ("Osaka")

CT SET CHART TEXT ATTRIBUTES (Area ; \$Chart ; 5 ; 0 ; \$Font ; 12 ; 1 ; \$Color)

`数値軸タイトルをフォーマットする (MゴシックBBB , 赤 , 太字斜体 , 12ポイント)

\$Color:= **CT Index to color** (4)

\$Font:= **CT Font number** ("MゴシックBBB")

CT SET CHART TEXT ATTRIBUTES (Area ; \$Chart ; 5 ; 2 ; \$Font ; 12 ; 3 ; \$Color)

```

`凡例位置を下部中央、横方向にする
CT SET LEGEND ATTRIBUTES (Area ; $Chart ; 1 ; 0 ; 0 ; 0 ; 8 ; 0 ; 0)
`チャートタイトルを左上隅に追加する
$Title:= CT Draw text (Area ; 1 ; 1 ; 350 ; 3 ; "地域ごとテストスコア")
`チャートタイトルをフォーマットする (MゴシックBBB , 14ポイント, 太字, 中央揃え, 青)
$Color:= CT Index to color (7)
$Font:= CT Font number ("MゴシックBBB")
CT SET TEXT ATTRIBUTES (Area ; $Title ; $Font ; 14 ; 1 ; $Color ; 1)
`中央揃え用を使用するウインドウ寸法を取得する
CT GET AREA BOUNDARY (Area ; 1 ; $Left ; $Top ; $Right ; $Bottom)
`チャートをウインドウサイズから50ポイント小さく変更する
CT SIZE (Area ; $Chart ; $Right-50 ; $Bottom-50)
`チャートを横方向に中央揃えする
CT GET BOUNDARY (Area ; $Chart ; $Left2 ; $Top2 ; $Right2 ; $Bottom2)
$Locate:=((($Right-$Left)-($Right2-$Left2))/2)
CT MOVE (Area ; $Chart ; $Locate ; $Top2)
`タイトルを横方向に中央揃えする
CT GET BOUNDARY (Area ; $Title ; $Left2 ; $Top2 ; $Right2 ; $Bottom2)
$Locate:=((($Right-$Left)-($Right2-$Left2))/2)
CT MOVE (Area ; $Title ; $Locate ; $Top2)
`チャートをタイトルから10ポイント分下げる
CT GET BOUNDARY (Area ; $Chart ; $Left ; $Top ; $Right ; $Bottom)
CT MOVE (Area ; $Chart ; $Left ; $Top+10)
`チャートとタイトルに灰色の矩形で枠組みをする
$Rect:= CT Draw rectangle (Area ; $Left-2 ; $Top2-2 ; $Right+2 ; $Bottom+2+10 ; 0)
CT SET FILL ATTRIBUTES (Area ; $Rect ; 3 ; CT Index to color (13))
CT SET LINE ATTRIBUTES (Area ; $Rect ; 3 ; CT Index to color (15) ; 1)
`すべてのオブジェクトを縦方向に中央揃えする
CT GET AREA BOUNDARY (Area ; 1 ; $Left ; $Top ; $Right ; $Bottom)
CT GET BOUNDARY (Area ; -1 ; $Left2 ; $Top2 ; $Right2 ; $Bottom2)
$Locate:=((($Bottom-$Top)-($Bottom2-$Top2))/2)
CT MOVE (Area ; -1 ; $Left2 ; $Locate)
`矩形を背面に送る
CT SELECT (Area ; -1 ; 0) `すべての選択を解除する
CT SELECT (Area ; $Rect ; 1) `矩形を選択する
CT DO COMMAND ($Area ; 24002) `背面に送る
CT SELECT (Area ; -1 ; 0) `すべての選択を解除する
CT SELECT (Area ; -1 ; 0) `すべてのオブジェクトの選択やめる

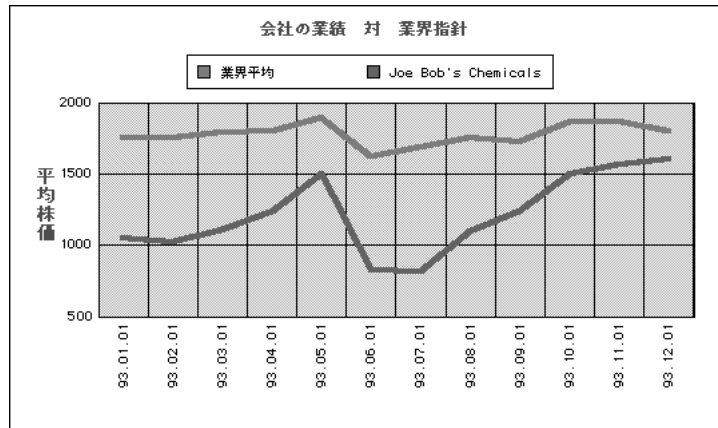
```

レコードのデータによって定義された系列を使って3次元グラフを作成する

自分の会社の株式が同業他社と比べてどのような動きをしているのかを知りたいと仮定します。各企業の株式の終値を4th Dimensionデータベースで記録する場合もあります。



以下のグラフは、ABC社の株価を業界の平均と比較しています。グラフ上のデータは何の操作もせずにデータベースから直接取られたものです。



「在庫チャート」プロジェクトメソッドは、データベースから直接取られたフィールド値を使用してグラフを生成します。データベースに格納された値は既に平均として計算されているので、追加の計算を行う必要はありません。代わりに日々の値を記録していた場合には、月ごとの平均値を計算し、それを配列に格納してから**CT Chart arrays**関数を使用してグラフを作成します。

月ごとの値を平均化する例として、この章で後述する「配列を使って2次元グラフを作成する」を参照してください。配列から3次元のグラフを作成する例は「配列を使って3次元グラフを作成する」を参照してください。

以下は、「在庫チャート」メソッドのコードです。

メソッド：ストックチャート

項目：月

系列：企業と業界のインデックス

数値：平均株価

C_LONGINT (\$Left ; \$Top ; \$Right ; \$Bottom)

C_LONGINT (\$Left2 ; \$Top2 ; \$Right2 ; \$Bottom2)

C_LONGINT (Area ; \$Chart ; \$Title ; \$Locate ; \$Font ; \$Color)

`チャート用のレコード選択を生成する

ALL RECORDS ([Stock Reports])

ORDER BY ([Stock Reports];[Stock Reports]Month;>)

`インターフェース要素を隠す

CT SET DISPLAY (Area ; 1 ; 0) `メニューを隠す

CT SET DISPLAY (Area ; 2 ; 0) `チャートツールを隠す

CT SET DISPLAY (Area ; 3 ; 0) `オブジェクトツールを隠す

CT SET DISPLAY (Area ; 6 ; 0) `スクロールバーを隠す

CT SET DISPLAY (Area ; 9 ; 0) `ルーラーを隠す

`3D線グラフを作成する

\$Chart:= CT Chart data (Area ; 101 ; 2 ; 1 ; 1 ; **Table** (->[Stock Reports]) ; 2 ; 1 ; 3)

`スケールのセットアップ

CT SET REAL SCALE (Area ; \$Chart ; 0 ; 0 ; 0 ; 0 ; 5 ; 20 ; 5 ; 1)

`チャートの回転と仰角をそれぞれ一度に設定する

CT SET 3D VIEW (Area ; \$Chart ; 1 ; 1)

`背景のカラーを設定する (グレー)

CT SET CHART FILL ATTRIBUTES (Area ; \$Chart ; 1 ; 1 ; 5 ; **CT Index to color** (15)

`系列のカラーを設定する (緑 ; 赤)

CT SET CHART FILL ATTRIBUTES (Area ; \$Chart ; 8 ; 100 ; 3 ; **CT Index to color** (10)

CT SET CHART FILL ATTRIBUTES (Area ; \$Chart ; 8 ; 200 ; 3 ; **CT Index to color** (4))

`系列の線のカラーを設定する (緑、赤、 4 ポイント)

CT SET CHART LINE ATTRIBUTES (Area ; \$Chart ; 8 ; 100 ; 3 ; **CT Index to color** (10);4)

CT SET CHART LINE ATTRIBUTES (Area ; \$Chart ; 8 ; 200 ; 3 ; **CT Index to color** (4);4)


```

`チャートテキストの属性を設定する(Osaka, 太字、イタリック文字, 12ポイント)
$Font:=CT Font number ("Osaka")
$Color:=CT Index to color (16) `黒
CT SET CHART TEXT ATTRIBUTES (Area ; $Chart ; 5 ; 0 ; $Font ; 12 ; 3 ; $Color)
$Color:=CT Index to color (10) `緑
CT SET CHART TEXT ATTRIBUTES (Area ; $Chart ; 5 ; 2 ; $Font ; 12 ; 3 ; $Color)
`グラフ軸ラベルを表示する
CT SET LABEL ATTRIBUTES (Area ; $Chart ; 2 ; 3 ; 0 ; "¥###,##0")
CT SET LABEL ATTRIBUTES (Area ; $Chart ; 1 ; 0 ; 0 ; "") `このラベルを隠す
CT SET LABEL ATTRIBUTES (Area ; $Chart ; 0 ; 3 ; 3 ; "###/###/###")
`項目軸と数値軸のタイトルを追加する
CT SET TITLE ATTRIBUTES (Area ; $Chart ; 2 ; 2 ; 3 ; "平均株価")
CT SET TITLE ATTRIBUTES (Area ; $Chart ; 0 ; 3 ; 0 ; "日付")
`凡例位置を上部中央、横方向に設定する
CT SET LEGEND ATTRIBUTES (Area ; $Chart ; 1 ; 0 ; 0 ; 0 ; 7 ; 0 ; 0)
`チャートタイトルを左上隅に追加する
$Title:= CT Draw text (Area ; 1 ; 1 ; 350 ; 3 ; "会社の業績 対 業界平均")
`チャートタイトルをフォーマットする(Osaka ; 14ポイント ; 太字 ; 中央揃え ; 青)
$Color:= CT Index to color (7)
$Font:= CT Font number ("Osaka")
CT SET TEXT ATTRIBUTES (Area ; $Title ; $Font ; 14 ; 1 ; $Color ; 1)
`エリアのオブジェクトを中央揃えするためにエリア境界を取得する
CT GET AREA BOUNDARY (Area ; 1 ; $Left ; $Top ; $Right ; $Bottom)
`チャートのウインドウサイズを50ポイント少なく再定義する
CT SIZE (Area ; $Chart ; $Right-50 ; $Bottom-50)
`チャートを中央揃えする
CT GET BOUNDARY (Area ; $Chart ; $Left2 ; $Top2 ; $Right2 ; $Bottom2)
$Locate:=((($Right-$Left)-($Right2-$Left2))/2)
CT MOVE (Area ; $Chart ; $Locate ; $Top2)
`チャートタイトルを中央揃えする
CT GET BOUNDARY (Area ; $Title ; $Left2 ; $Top2 ; $Right2 ; $Bottom2)
$Locate:=((($Right-$Left)-($Right2-$Left2))/2)
CT MOVE (Area ; $Title ; $Locate ; $Top2)
`チャートを10ポイント下げる
CT GET BOUNDARY (Area ; $Chart ; $Left ; $Top ; $Right ; $Bottom)
CT MOVE (Area ; $Chart ; $Left ; $Top+10)
`すべてのオブジェクトの選択を解除する
CT SELECT (Area;-1;0)

```

配列を使ってグラフを作成する

以下の2つの節では、CT Chart arrays関数を使用して、2次元グラフと3次元グラフを作成する例を示します。

配列を使って2次元グラフを作成する

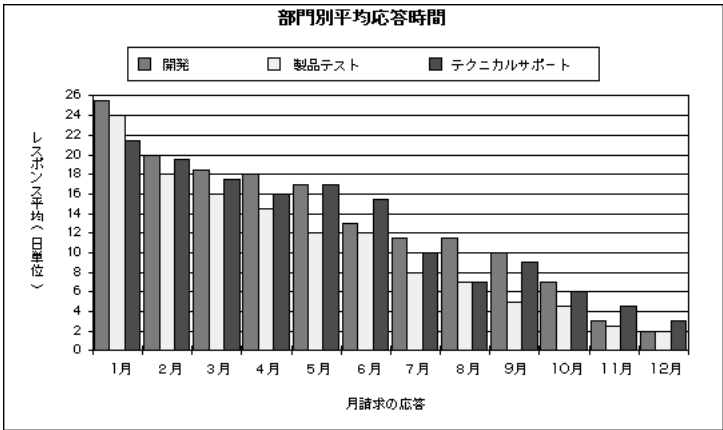
例えば、部品を製造する企業のエンジニアリング部門の新しいマネージャになったと仮定してください。あなたの新しい業務のひとつとして、ご自分が管理する部署が顧客からの支援要求に应答するときの時間を短縮することがあります。

よって、各部署の应答時間を追跡するためにデータベースを設計することにしました。データベースの構造は以下の通りです。

Request	
部署	★
請求日付	📅
完了日付	📅

収集した情報を解析するために、去年の各月について、各部署の平均应答時間（(完了日 - 要求日) / 要求数）をグラフ化することにしました。

4D Chartを使用して、以下のグラフを生成します。



前述のグラフが生成され、「応答グラフ」プロジェクトメソッドでフォーマットされました。このメソッドは配列にデータを入れ、その配列からグラフを生成してから、軸タイトルや系列のカラーなどのグラフの特定の外観をカスタマイズします。

メソッドの最初の部分は4th Dimensionコマンドと関数を使用して配列の作成とデータの指定を行っています。項目配列の内容はコードで指定され、系列配列の内容はデータベースから直接取り込まれ、数値配列はデータ操作の結果です。数値配列のサイズは系列配列のサイズを項目配列のサイズで乗算したものと同じです。

このメソッドは、レコードの選択を操作するためにセットを使用します。セットを作成した後は、必要とされるレコードの選択を検索によって変更し、何度でもレコードのオリジナルセットに戻すことができます。このプロシージャでは、セットはグラフ全体のレコードの選択に使用されます。各月の各部署のレコードの検索の結果行われる選択で値が決まるので、選択は数値配列へのデータの指定中に変更されます。

配列にデータが指定された後、4D Chartコマンドがグラフの作成とその機能の変更のために使用されます。

以下は、「応答グラフ」メソッドのコードです。

メソッド：応答グラフ

項目：月

系列：部門名

数値：作業期間の平均(日単位)

C_LONGINT (\$x ; \$y ; \$z ; \$Counter)

C_LONGINT (\$Left ; \$Top ; \$Right ; \$Bottom)

C_LONGINT (\$Left2 ; \$Top2 ; \$Right2 ; \$Bottom2)

C_LONGINT (Area ; \$Chart ; \$Title ; \$Locate ; \$Duration)

`項目配列を定義し、値を入れる

ARRAY STRING (3 ; \$aCategories ; 12)

\$aCategories{1}:="1月"

\$aCategories{2}:="2月"

\$aCategories{3}:="3月"

\$aCategories{4}:="4月"

\$aCategories{5}:="5月"

\$aCategories{6}:="6月"

\$aCategories{7}:="7月"

\$aCategories{8}:="8月"

\$aCategories{9}:="9月"

\$aCategories{10}:="10月"

\$aCategories{11}:="11月"

\$aCategories{12}:="12月"

```

`チャート用のレコード選択を生成する
QUERY BY FORMULA ([Request] ; Year of ([Request]Request Date)=1993)
`後で使用するためにレコードをセットに格納する
CREATE SET ([Request] ; "sChartData")
`系列配列を部門名で定義し、データを入れる
ARRAY STRING (20 ; $aSeries ; 0)
DISTINCT VALUES ([Request]Department ; $aSeries)
`数値の数でチャートを判断する
`(数値の数=項目の数*系列の数)
`数値配列を設定する
ARRAY REAL ($aValues ; 12*Size of array ($aSeries))
`数値配列にデータを入れる
`各部門で、月ごとの平均作業期間を検出する
$Counter:=0 `カウンタは数値の数を追跡する
For ($x ; 1 ; Size of array ($aSeries)) `部門の数だけループする
    For ($y ; 1 ; 12) `12ヵ月分ループする
        $Counter:=$Counter+1
        `各部門で、部門のレコードを検出する
        QUERY SELECTION ([Request];[Request]Department=$aSeries{$x})
        `この選択内で、月ごとのレコードを検出する
        QUERY SELECTION BY FORMULA ([Request] ; Month of ([Request]Request
        Date)=$y)
        If (Records in selection ([Request])>0)
            $Duration:=0 `間隔を受け取る
            `レコードをループして、応答時間を合計する
            For ($z; 1 ; Records in selection ([Request]))
                GOTO SELECTED RECORD ([Request] ; $z)
                $Duration:=$Duration+([Request]Completion Date-[Request]Request Date)
            End for
            `平均時間を取得し、それを$aValues配列に入れる
            $aValues{$Counter}:=$Duration / Records in selection ([Request])
        End if
        `レコードの元のセクションを復元する
        USE SET ("sChartData")
    End for
End for

```

``インターフェース要素を隠す

CT SET DISPLAY (Area;1;0) ``メニューを隠す

CT SET DISPLAY (Area;2;0) ``チャートツールを隠す

CT SET DISPLAY (Area;3;0) ``オブジェクトツールを隠す

CT SET DISPLAY (Area;6;0) ``スクロールバーを隠す

CT SET DISPLAY (Area;9;0) ``ルーラーを隠す`棒グラフを作成する

\$Chart:= **CT Chart arrays** (Area ; 2 ; 2 ; \$aCategories ; \$aSeries ; \$aValues)

``項目軸と数値軸のタイトルを追加する

CT SET TITLE ATTRIBUTES (Area ; \$Chart ; 2 ; 2 ; 3 ; "レスポンス平均 (日単位) ")

CT SET TITLE ATTRIBUTES (Area ; \$Chart ; 0 ; 3 ; 0 ; "月請求の応答")

``系列のカラーを設定する(緑、黄色、青)

CT SET CHART FILL ATTRIBUTES (Area ; \$Chart ; 8 ; 100 ; 3 ; **CT Index to color** (10))

CT SET CHART FILL ATTRIBUTES (Area ; \$Chart ; 8 ; 200 ; 3 ; **CT Index to color** (2))

CT SET CHART FILL ATTRIBUTES (Area ; \$Chart ; 8 ; 300 ; 3 ; **CT Index to color** (7))

``凡例位置を上部中央、横方向に設定する

CT SET LEGEND ATTRIBUTES (Area ; \$Chart ; 1 ; 0 ; 0 ; 0 ; 7 ; 0 ; 0)

``チャートタイトルを左上隅に追加する

\$Title:= **CT Draw text** (Area ; 1 ; 1 ; 275 ; 3 ; "部門別平均応答時間")

``チャートタイトルをフォーマットする (Osaka , 14ポイント , 太字 , 中央揃え , 黒)

CT SET TEXT ATTRIBUTES (Area ; \$Title ; **CT Font number** ("Osaka");

14 ; 1 ; **CT Index to color** (16) ; 1)

``ウインドウのオブジェクトを中央揃えするためにチャートエリアの寸法を検出する

CT GET AREA BOUNDARY (Area ; 1 ; \$Left ; \$Top ; \$Right ; \$Bottom)

``チャートのウインドウサイズを5 0ポイント小さく再定義する

CT SIZE (Area ; \$Chart ; \$Right-50 ; \$Bottom-50)

``チャートを中央揃えする

CT GET BOUNDARY (Area ; \$Chart ; \$Left2 ; \$Top2 ; \$Right2 ; \$Bottom2)

\$Locate:=(((\$Right-\$Left)-(\$Right2-\$Left2))/2

CT MOVE (Area ; \$Chart ; \$Locate ; \$Top2)

``チャートタイトルを中央揃えする

CT GET BOUNDARY (\$Area ; \$Title ; \$Left2 ; \$Top2 ; \$Right2 ; \$Bottom2)

\$Locate:=(((\$Right-\$Left)-(\$Right2-\$Left2))/2

CT MOVE (\$Area ; \$Title ; \$Locate ; \$Top2)

``チャートを10ポイント下げ、チャートタイトル用に空間を開ける

CT GET BOUNDARY (\$Area ; \$Chart ; \$Left ; \$Top ; \$Right ; \$Bottom)

CT MOVE (\$Area ; \$Chart ; \$Left ; \$Top+10)

``すべてのオブジェクトの選択を解除する

CT SELECT (Area ; -1 ; 0)

配列を使って3次元グラフを作成する

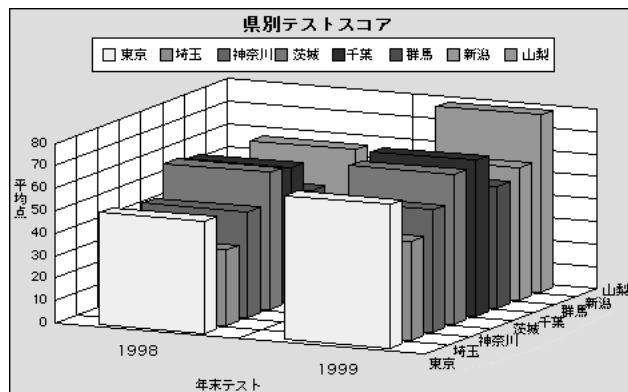
例えば、教育プログラムの西日本地区担当者であり、該当地区の生徒達のテストスコアが向上したかどうかを判断したいと仮定します。

データベースには、テスト日付と出身地にタグが付いて、該当地区の生徒のスコアが保存されています。

注：これはこの章で前述した「レコードのデータによって定義された系列を使って2次元グラフを作成する」で使用したのと同じサンプルデータベースです。

Scores	
学生コード	23
テスト日付	7
スコア	26
地区	A

毎年複数のテスト日があるので、データベースから直接データをグラフ化することはできません。その代わりに、データを配列に入れるプロシージャを作成し、各年を“項目”、各県を“系列”として使用することができます。



前述のグラフは「スコア3Dグラフ」プロジェクトメソッドを使用して生成されています。このメソッドは配列にデータを入れ、配列からグラフを生成した後、グラフの特定の外観をカスタマイズします。

項目配列の内容はコードに直接指定されます。系列配列の内容はデータベースから取られます。数値配列の内容は年ごとの各都道府県のテストスコアの平均です。数値配列のサイズは系列配列のサイズと項目配列のサイズを乗算したものと同じです。

4D Chartコマンドを使用すると、4D Chartメニューバー、スクロールバー、ルーラ、ツールパレットは隠されます。4D Chartエリアは「入力不可」に設定され、ユーザはそのエリアのオブジェクトを選択したり、それに対する変更をまったく行えなくなります。

以下は、「スコア3Dグラフ」メソッドのコードです。

メソッド：スコア3Dグラフ

項目：調査年

系列：メンバの県

数値：テストスコア

C_LONGINT (\$x ; \$y ; \$z ; \$Counter)

C_LONGINT (\$Left ; \$Top ; \$Right ; \$Bottom)

C_LONGINT (\$Left2 ; \$Top2 ; \$Right2 ; \$Bottom2)

C_LONGINT (Area ; \$Chart ; \$Title ; \$Locate ; \$Score ; \$Color ; \$Font ; \$Rect)

`項目配列を定義し、データを指定する

ARRAY STRING (4 ; \$aCategories ; 2)

\$aCategories{1}:="1992"

\$aCategories{2}:="1993"

`系列配列に州名を定義し、そのデータを指定する

ALL RECORDS ([Scores])

ARRAY STRING (2 ; \$aSeries ; 0)

DISTINCT VALUES ([Scores]State ; \$aSeries)

`数値配列を設定する (グラフへの数値の数=項目*系列)

ARRAY REAL (\$aValues ; 2*Size of array (\$aSeries))

`数値配列を判断し、データを指定する

`各県に対して、平均テストスコアを検出する

\$Counter:=0 `カウンタは数値を追跡する

For (\$x ; 1 ; Size of array (\$aSeries))

For (\$y ; 1 ; 2) `2年間だけループする

 \$Counter:=\$Counter+1

QUERY ([Scores];[Scores]State=\$aSeries{\$x}) `県の数だけループする

QUERY SELECTION BY FORMULA ([Scores];String (Year of ([Scores]Test Date))=\$aCategories{\$y}))

```

    If (Records in selection ([Scores])>0)
        $Score:=0 `スコアの合計を保持する
        `レコードをループし、スコアを合計する
        For ($z ; 1 ; Records in selection ([Scores]))
            GOTO SELECTED RECORD ([Scores] ; $z)
            $Score:=$Score+[Scores]Score
        End for
        `スコアの平均を出す
        $aValues{$Counter}:=$Score / Records in selection ([Scores])
    End if
End for
End for

`セクションしているものを戻す
ALL RECORDS ([Test Scores])
`インタフェース要素を隠す
CT SET DISPLAY (Area ; 1 ; 0) `4D Chartメニューバーを隠す
CT SET DISPLAY (Area ; 2 ; 0) `チャートツールを隠す
CT SET DISPLAY (Area ; 3 ; 0) `オブジェクトツールを隠す
CT SET DISPLAY (Area ; 6 ; 0) `スクロールバーを隠す
CT SET DISPLAY (Area ; 9 ; 0) `ルーラを隠す
`3D 棒グラフを作成する
$Chart:= CT Chart arrays (Area ; 100 ; 2 ; $aCategories ; $aSeries ; $aValues)
`別の軸タイトルを表示または隠す
CT SET TITLE ATTRIBUTES (Area ; $Chart ; 0 ; 3 ; 0 ; "年末テスト")
CT SET TITLE ATTRIBUTES (Area ; $Chart ; 1 ; 1 ; 0 ; "県") `タイトルを隠す
CT SET TITLE ATTRIBUTES (Area ; $Chart ; 2 ; 2 ; 3 ; "平均点")
`凡例位置を上部中央、横方向に設定する
CT SET LEGEND ATTRIBUTES (Area ; $Chart ; 1 ; 0 ; 0 ; 0 ; 7 ; 0 ; 0)
`チャートタイトルを左上隅に追加する
$Title:= CT Draw text (Area ; 1 ; 1 ; 350 ; 3 ; "県別テストスコア")
`チャートタイトルをフォーマットする (MゴシックBBB, 14ポイント, 太字, 中央揃え, 青)
$Color:= CT Index to color (7)
$Font:= CT Font number ("MゴシックBBB")
CT SET TEXT ATTRIBUTES (Area ; $Title ; $Font ; 14 ; 1 ; $Color ; 1)
`中央揃えのためにウインドウの寸法を取得する
CT GET AREA BOUNDARY (Area ; 1 ; $Left ; $Top ; $Right ; $Bottom)
`チャートをウインドウサイズから50ポイント小さく変更する
CT SIZE (Area ; $Chart ; $Right-50 ; $Bottom-50)

```



```

`チャートを横方向に中央揃えする
CT GET BOUNDARY (Area ; $Chart ; $Left2 ; $Top2 ; $Right2 ; $Bottom2)
$Locate:=((($Right-$Left)-($Right2-$Left2))/2)
CT MOVE (Area ; $Chart ; $Locate ; $Top2)
`タイトルを横方向に中央揃えする
CT GET BOUNDARY (Area ; $Title ; $Left2 ; $Top2 ; $Right2 ; $Bottom2)
$Locate:=((($Right-$Left)-($Right2-$Left2))/2)
CT MOVE (Area ; $Title ; $Locate ; $Top2)
`チャートをタイトルから10ポイント分下げる
CT GET BOUNDARY (Area ; $Chart ; $Left ; $Top ; $Right ; $Bottom)
CT MOVE (Area ; $Chart ; $Left ; $Top+10)
`チャートとタイトルに灰色の矩形で枠組みをする
$Rect:= CT Draw rectangle (Area ; $Left-2 ; $Top2-2 ; $Right+2 ; $Bottom+2+10 ; 0)
CT SET FILL ATTRIBUTES (Area ; $Rect ; 3 ; CT Index to color (13))
`すべてのオブジェクトを縦方向に中央揃えする
CT GET AREA BOUNDARY (Area ; 1 ; $Left ; $Top ; $Right ; $Bottom)
CT GET BOUNDARY (Area ; -1 ; $Left2 ; $Top2 ; $Right2 ; $Bottom2)
$Locate:=((($Bottom-$Top)-($Bottom2-$Top2))/2)
CT MOVE (Area ; -1 ; $Left2 ; $Locate)
`灰色の矩形を奥に下げる
CT SELECT (Area ; -1 ; 0) `すべての選択を解除する
CT SELECT (Area ; $Rect ; 1) `矩形を選択する
CT DO COMMAND ($Area ; 24002) `背面を送る
CT SELECT (Area ; -1 ; 0) `すべての選択を解除する
`すべてのオブジェクトの選択を解除する
CT SELECT (Area ; -1 ; 0)

```


以下のコマンドと関数は、「ルーチン」エリアの「Area Control」テーマ内にあります：

CT DO COMMAND	CT Last event
CT MENU STATUS	CT SET ENTERABLE
CT ON ERROR	CT Get display
CT ON EVENT	CT SET DISPLAY
CT ON MENU	CT GET DOCUMENT SIZE
CT Error	CT SET DOCUMENT SIZE
CT EVENT FILTER	CT GET PROPERTIES
CT EXPERT COMMAND	CT SET PROPERTIES
CT EXPERT MODE	

これらのコマンドと関数を使用すると、4D Chartエリアとそのエリアで実行されるアクションの現在のメニューステータスを追跡できます。さらに、4D Chartドキュメントに変更するユーザの機能も制御できます。また、メソッドによって4D Chartのメニューコマンドを実行することもできます。

CT DO COMMAND

CT DO COMMAND (エリア ; コマンド)

引数	タイプ	説明
エリア	倍長整数	4D Chartエリア
コマンド	倍長整数	コマンド番号

説明

CT DO COMMANDコマンドは、引数<コマンド>で指定されるメニューコマンドを実行します。メニューコマンドは、ユーザが4D Chartメニューから選択したのと同じように実行されます。このコマンドを使用すると、プログラムで同等のものが無いアクションでも実行できます。

<コマンド>に指定できる値は、付録Bにリストされています。4D Chartの将来のバージョンでメニューコマンドが変更されたり、位置が変わってもこれらの数値は変わりません。

例題

以下の例は、指定されたエリアのすべてのオブジェクトを選択し、複製します。

`「編集」メニューから「すべてを選択」を選択するのと同じ

CT DO COMMAND (Area ; 2009)

`「編集」メニューから「複製」を選択するのと同じ

CT DO COMMAND (Area ; 2007)

参照

なし

CT MENU STATUS

CT MENU STATUS (エリア ; コマンド ; チェック ; 使用可 ; 名前)

引数	タイプ	説明
エリア	倍長整数	4D Chartエリア
コマンド	倍長整数	コマンド番号
チェック	整数	メニューコマンドがチェックされているか？ 0=チェックなし、1=チェックあり
使用可	整数	メニューコマンドが使用可能かどうか？ 0=使用不可、1=使用可能
名前	文字列	メニューコマンドの名前

説明

CT MENU STATUSコマンドは、引数<コマンド>によって表される<エリア>内のメニューコマンドに関する情報を<チェック>、<使用可>、<名前>変数に返します。

<コマンド>に指定可能な値は、付録Bにリストされています。

<使用可>が0の場合は、そのメニューコマンドは使用不可です。<使用可>が1の場合は、そのメニューコマンドは使用可能です。

<チェック>が0の場合は、そのメニューコマンドはチェックされていません。<チェック>が1の場合はそのメニューコマンドはチェックされています。

<名前>は、メニューコマンドの名前です。

例題

以下の例は、エリアが「参照表示」モードまたは「値表示」モードかどうかを確認するためにメニューコマンドをチェックします。エリアが「参照表示」モードの場合は、「値表示」モードをオンにします。

```
CT MENU STATUS (Area ; 6006 ; $Checked ; $Available ; $Name)
If ($Name="参照表示")
    CT DO COMMAND (Area ; 6006)
End if
```

参照

CT DO COMMAND

CT ON ERROR

CT ON ERROR (メソッド)

引数	タイプ	説明
メソッド	文字列	実行するメソッド

説明

CT ON ERRORコマンドは、4D Chartエラーの管理用メソッドとして引数<メソッド>をインストールします。エラー処理メソッドをインストールすると、4D Chartは4D Chartエラーが発生したときに<メソッド>をコールします。

<メソッド> が空の文字列の場合は、メソッドはコールされず、エラー処理は4D Chartに返ります。

4D Chartは、<メソッド> を呼び出すときにエラー管理用に使用できる3つのパラメータ (\$1、\$2、\$3) を返します。

\$1	倍長整数	エラーが発生した4D Chartエリアを表す。エラーが特定の4D Chartエリアに対するものではない場合には、\$1は0になる。
\$2	倍長整数	エラー番号を保持する。 CT Error 関数へのコールと同じである。
\$3	テキスト	エラーのテキストが含まれる。 CT Error 関数へのコールと同じである。

データベースをコンパイルする予定がある場合は、以下のようにこれらのパラメータのタイプを宣言してください。

C_LONGINT (\$1 ; \$2)

C_TEXT (\$3)

例題

以下の例は、エラー処理メソッドのインストレーションを示しています。

CT ON ERROR ("ChartError")

以下のメソッドは、「ChartError」です。「ChartError」メソッドは、\$1をテストして、エラーが<エリア>内で発生したかどうかを判断し、以下にエラー番号とメッセージを含む警告ボックスを提示します。

C_LONGINT (\$1 ; \$2)

C_TEXT (\$3)

If (\$1 = Area)

ALERT ("4D Chartエリア内でエラーが発生しました。")

End if

ALERT ("エラーコード" + **String**(\$2) + **Char**(13) + \$3)

参照
CT Error

CT ON EVENT

CT ON EVENT (メソッド)

引数	タイプ	説明
メソッド	文字列	実行するメソッド

説明

CT ON EVENTコマンドは、事前に指定されたイベントが発生するといつでも引数<メソッド>を実行します。

<メソッド>を実行させるイベントは、**CT ON EVENT**コマンドで記述されます。<メソッド>が空の文字列の場合は、メソッドは実行されません。イベントが発生するエリアにオブジェクトメソッドとイベントメソッドの両方がある場合には、オブジェクトメソッドが後で実行されます。**CT ON EVENT**コマンドは、オブジェクトメソッドを持ってない外部ウインドウ内の4D Chartエリアで利用すると特に便利です。

4D Chartは、<メソッド>を呼び出すときにイベント管理のために使用できる4つのパラメータ（\$1、\$2、\$3、\$4）を返します。

\$1	倍長整数	イベントが発生した4D Chartエリアを表す。
\$2	倍長整数	イベント番号を保持する。 CT Last event 関数へのコールと同じである。
\$3	倍長整数	エリアが存在するフォームのテーブル番号。 \$3が-1の場合、そのエリアは外部ウインドウにある。
\$4	倍長整数	エリアが自動保存されているフィールドの番号。 \$4が0の場合、そのエリアは自動保存されていない。

データベースをコンパイルする予定がある場合は、以下のようにこれらのパラメータのタイプを宣言してください。

C_LONGINT (\$1 ; \$2 ; \$3 ; \$4)

例題

以下の例は、イベントメソッドのインストールを示しています。プラグインウインドウを開き、イベントとして「Ctrl (command)+クリック」を指定してから、イベントメソッド“EventProc”をインストールします。

`プラグインウィンドウを開く

vArea := **Open external window** (20 ; 50 ; 400 ; 350 ; 0 ; "チャート" ; "_4D Chart")

CT ON EVENT ("EventProc") `メソッド “ EventProc ” をインストールする

CT EVENT FILTER (vArea ; 64) `「 Ctrl (command)+クリック 」がメソッドを呼び出す

参照

CT EVENT FILTER、 CT LAST EVENT

CT ON MENU

CT ON MENU (エリア ; メソッド)

引数	タイプ	説明
エリア	倍長整数	4D Chartエリア
メソッド	文字列	実行するメソッド

説明

このコマンドは、「ユーザ」モードまたは「カスタム」モードのいずれかで、メニューコマンドが起動されるたびに引数<メソッド>を実行します。また、メニューコマンドは、<メソッド>内で呼び出される限り、**CT DO COMMAND**コマンドを使用して呼び出すこともできます。

コールされたメソッドは、以下の3つのパラメータを返します：

- \$1 4D ChartエリアのIDを含む倍長整数
- \$2 メニューコマンド番号を含む倍長整数
- \$3 モディファイアキーが押されたときの番号を含む倍長整数

\$3パラメータは、以下のモディファイアキーのいずれかひとつ（またはモディファイアキーの組み合わせ）に対応します。

- 0 なし
- 1 commandキー（Windows版では、Ctrl）
- 2 shiftキー
- 4 optionキー（Windows版では、Alt）
- 8 controlキー（Windows版には、対応するキーはありません。）

モディファイアキーの組み合わせが押されたときには、それらの値は加算されてパラメータとして渡されます。例えば、値10はメニューコマンドを選択しているときに「shiftキーとcontrolキー」の両方を押したことを示しています。

データベースをコンパイルする予定がある場合は、以下のようにこれらのパラメータのタイプを宣言してください。

C_LONGINT (\$1 ; \$2 ; \$3)

例題

以下の例は、「MenuProc」イベントメソッドを起動します。

CT ON MENU (Area ; "MenuProc")

「MenuProc」メソッドは、メニューコマンドへのユーザのアクセスを制御します。「テンプレートとして保存」または「プロパティ...」のいずれかのメニューコマンドが選択されると、ダイアログボックスが表示され、メニュー選択は無効になります。他のすべてのメニューコマンドは中断なく実行されます。

以下は、「MenuProc」メソッドのコードです。

C_LONGINT (\$1 ; \$2 ; \$3)

Case of

¥ (\$2=1006) `「テンプレートとして保存」メニューコマンド番号

ALERT ("テンプレートを保存できません。")

¥ (\$2=2011) `「プロパティ...」メニューコマンド番号

ALERT ("「プロパティ」ダイアログボックスにアクセスすることはできません。")

Else

CT DO COMMAND (vArea ; \$2)

End case

参照

なし

CT Error

CT Error (メッセージ) 整数

引数 メッセージ	タイプ 倍長整数	説明 エラーメッセージ
戻り値	整数	4D Chartによって実行される最後の オペレーションのステータス 0=エラーなく処理が終了 >0=エラーが発生

説明

CT Error関数は、4D Chartで実行された最後の処理のステータスを示す番号を返します。

CT Error関数が0を返した場合には、最後の処理はエラーの原因ではありません。**CT Error**関数が0以外の番号を返した場合は、最後の処理中にエラーが発生しています。ひとつのフォーム上で複数のエリアがアクティブである場合は、**CT Error**関数はエリアを区別せずに最後のエラーを返します。エラーコードのリストについては、付録Cを参照してください。

オプション引数の<メッセージ>が**CT Error**関数に渡された場合には、コール後のエラーのテキストを含むテキスト変数となります。

例題

以下の例は、以前のコマンドでエラーが発生したかどうかをチェックします。

```
If ( CT Error #0)  
`最後の処理がエラーの原因になった  
End if
```

参照

CT ON ERROR

CT EVENT FILTER

CT EVENT FILTER (エリア ; フィルタ)

引数	タイプ	説明
エリア	倍長整数	4D Chartエリア
フィルタ	倍長整数	使用するイベント

説明

CT EVENT FILTERコマンドは、引数<エリア>のオブジェクトメソッドを発生させるイベントまたは実行するイベントメソッドを指定します。

デフォルトでは、4D Chartエリアに付着したオブジェクトメソッドは、ユーザがエリア以外のオブジェクトを選択したときに実行されます。**CT EVENT FILTER**コマンドでは、オブジェクトメソッドを実行する他のイベントを指定できます。さらに、**CT ON EVENT**コマンドでインストールされたメソッドも実行できます。

引数<フィルタ>はイベントコードの加算値として使用するイベントを指定します。下記にイベントコードを示します：

値	イベント
-1	すべてのイベント
0	イベントなし
1	エリア作成
2	エリア削除
4	エリアのアクティブ化（クリックされた、または前面に押し出された）
8	エリア非アクティブ化（エリアは既にアクティブではない）
16	オブジェクト生成（作成、貼り付け、複製）
32	オブジェクト削除（削除、切り取り、消去）
64	command (Ctrl) +クリック（オブジェクトに対するものである必要はない）
128	オブジェクトが移動された（微調整、整列、移動等）
256	オブジェクトのサイズが変更された（矢印キー、ドラッグ等）
1024	選択済みオブジェクトでの変更
2048	ダブルクリック
4096	オブジェクトが作り直された

<エリア>に対して-1を指定した場合、イベントフィルタはフォーム上および外部ウインドウ内に新しく作成されるすべての4D Chartエリアに対するデフォルトフィルタになります。これによって、「ユーザ」モードの「プラグイン」メニューから作成されたエリアに対してトラップすることができます。また、すべてのエリアで一貫したイベント処理ができます。

例題

以下の例はチャートエリアのオブジェクトメソッドによってトラップされたデフォルトイベントのリストに対して「command+クリック」および「ダブルクリック」を追加します。

CT EVENT FILTER (Area ; 64+2048)

参照

CT Laet event、 CT ON EVENT

CT EXPERT COMMAND

CT EXPERT COMMAND (エリア ; コマンド ; ステータス)

引数	タイプ	説明
エリア	倍長整数	4D Chartエリア
コマンド	倍長整数	コマンド番号
ステータス	整数	エキスパートモードのメニューコマンドの状態 -1=カレント値を返す 0=使用可、1=使用不可

説明

CT EXPERT COMMANDコマンドは、4D Chartエキスパートモードに対するメニューコマンドの使用の可否を設定します。

引数<ステータス>が0の場合は、<コマンド>で指定されるメニューコマンドはエキスパートモードで使用可能になります。<ステータス>が0よりも大きな場合は、そのメニューコマンドは使用不可になります。<ステータス>が-1の変数である場合は、**CT EXPERT COMMAND**コマンドは、<ステータス>（0=使用可、1=使用不可）にメニューコマンドの現在のステータスを返します。

<コマンド>に指定できる値は、付録Bにあります。

メニューコマンドが**CT EXPERT COMMAND**コマンドで使用不可である場合でも、**CT DO COMMAND**コマンドで呼び出すことで実行できます。

例題

以下の例は、「データベース」メニューの「フィールド貼り付け...」メニューコマンドを使用不可にします。

CT EXPERT COMMAND (Area ; 6001 ; 1)

CT EXPERT MODE (Area ; 1)

参照

CT EXPERT MODE

CT EXPERT MODE

CT EXPERT MODE (エリア ; モード)

引数	タイプ	説明
エリア	倍長整数	4D Chartエリア
モード	整数	エキスパートモードを切り替える -1=カレント値を返す 0=オフ、1=オン

説明

CT EXPERT MODE コマンドは、エキスパートモードをオンまたはオフにします。4D Chartがエキスパートモードのときには、4D Chartメニュー上の特定の項目が使用できなくなっている可能性があります。エキスパートモードは、**CT EXPERT COMMAND** コマンドで設定されます。

引数 <モード> が1の場合は、エキスパートモードが起動されます。エキスパートモードが起動されると、以前に**CT EXPERT COMMAND** コマンドで指定されたメニューコマンドは使用不可になります。

<モード> が0の場合は、エキスパートモードはオフになります。

<モード> が-1の場合は、**CT EXPERT MODE** コマンドは<モード> にそのモード (0=オフ、1=オン) を返します。

例題

以下の例は、「ファイル」メニューの「フルウインドウ」メニューコマンドを使用不可にします。

CT EXPERT COMMAND (Area ; 1012 ; 1)

CT EXPERT MODE (Area ; 1)

参照

CT EXPERT COMMAND

CT Last event

CT Last event (エリア) 倍長整数

引数	タイプ	説明
エリア	倍長整数	4D Chartエリア
戻り値	倍長整数	エリアで実行した最後のイベントのコードのコード

説明

CT Last event関数は、引数<エリア>で発生した最後のイベントのコードを返します。

CT Last event関数は、4D Chartエリアのオブジェクトメソッド、または**CT ON EVENT**コマンドでインストールされたイベントプロシージャで使用できます。**CT Last event**関数はオブジェクトメソッドやメソッドを実行させたイベントを特定します。**CT EVENT FILTER**コマンドと共に使用した場合は、**CT Last event**関数でユーザのアクションに基づいたアクションを実行することができます。

下記にイベントコードを示します：

値	イベント
-1	すべてのイベント
0	イベントなし
1	エリア作成
2	エリア削除
4	エリアのアクティブ化（クリックされた、または前面に押し出された）
8	エリア非アクティブ化（エリアは既にアクティブではない）
16	オブジェクト生成（作成、貼り付け、複製）
32	オブジェクト削除（削除、切り取り、消去）
64	command (Ctrl) +クリック（オブジェクトに対するものである必要はない）
128	オブジェクトが移動された（微調整、整列、移動等）
256	オブジェクトのサイズが変更された（矢印キー、ドラッグ等）
1024	選択済みオブジェクトでの変更
2048	ダブルクリック
4096	オブジェクトが作り直された

例題

以下の例では、CT Last event関数はCT ON EVENTコマンドでインストールされたメソッドで使用され、ダブルクリックを特定します。ユーザがグラフをダブルクリックすると、カスタムダイアログボックスが表示されるためグラフに対して変更を行えます。

```
If (CT Last event (Area)=2048) `ダブルクリックの場合
  If (CT Get object type (Area ; 0)=5) `グラフの場合
    `カスタム「チャート変更」ダイアログボックスを開く
    CHANGE CHART (Area ; CT Get ID (Area ; 0 ; 1))
```

End if
End if

参照
CT EVENT FILTER、CT Laet event

CT SET ENTERABLE

CT SET ENTERABLE (エリア ; モード{; ボタンモード})

引数	タイプ	説明
エリア	倍長整数	4D Chartエリア
モード	整数	エキスパートモードを切り替える -1=カレント値を返す 0=オフ、1=オン
ボタンモード	整数	0=高さ150ポイント以下のエリアの ボタン 1=通常エリア

説明
CT SET ENTERABLEコマンドは、引数<エリア>内のドキュメントへのアクセスを制御します。

<モード>が1の場合は、<エリア>が使用可能になり、正常に作動します。<モード>が0の場合は、<エリア>は使用不可になります。

使用不可になったエリアに対しては、ユーザは変更はできませんが、言語で変更できます。エリアが使用不可になると、ユーザはそのエリアをスクロールして選択したオブジェクトをクリップボードにコピーできます。ユーザは選択したものを変更する、あるいは4D Chartメニューバーやツールパレットを使用することはできません。オプション引数<ボタンモード>はエリアをボタンにふさわしいように高さ150ポイントより小さくしないようにすることができます。

例題
以下の例は、<エリア>を入力不可にするフォームメソッドです。

If (Form event=On Load)
 CT SET ENTERABLE (Area ; 0) `エリアを入力不可にする
End if

参照
CT SET DISPLAY

CT Get display

CT Get display (エリア ; 項目) 整数

引数	タイプ	説明
エリア	倍長整数	4D Chartエリア
項目	整数	情報を取得する項目
戻り値	整数	0=定義した項目が表示されていない 1=項目が表示されている

説明

CT Get display関数を使用すると、4D Chartウィンドウの特定の機能が表示されるかどうかわかります。

CT Get display関数は、指定された項目が表示されないのであれば0、表示されるのであれば1を返します。

メニューバー、「チャートツール」パレット、「オブジェクトツール」パレット、スクロールバー、ルーラは**CT SET DISPLAY**コマンドを使用して「ユーザ」モードまたはメソッドによって隠す、または表示することができます。

下記は、引数<項目>のコードです：

コード	項目
1	メニューバー
2	チャートツール
3	オブジェクトツール
6	スクロールバー
9	ルーラ

例題

以下の例は、メニューバーが使用不可かどうかを確認し、使用不可になっていないのであれば、使用不可にします。

```
If (CT Get display (Area ; 1)=1)
  CT SET DISPLAY (Area ; 1 ; 0)
End if
```

参照

CT SET DISPLAY

CT SET DISPLAY

CT SET DISPLAY (エリア ; 項目 ; 表示コード)

引数	タイプ	説明
エリア	倍長整数	4D Chartエリア
項目	整数	表示 / 非表示を行う項目 (下記の表参照)
表示コード	整数	項目を表示する? 0=隠す、1=表示、2=切り替え

説明

CT SET DISPLAYコマンドは、指定した項目が4D Chartウインドウで表示されるのか隠されるのかを設定します。

メニューバー、「チャートツール」パレット、「オブジェクトツール」パレット、スクロールバー、ルーラは**CT SET DISPLAY**コマンドを使用して隠す、または表示することができます。

下記は、引数<項目>のコードです：

コード	項目
1	メニューバー
2	チャートツール
3	オブジェクトツール
6	スクロールバー
9	ルーラ

例題

以下の例は、4D Chartメニューバー、「チャートツール」パレット、「オブジェクトツール」パレット、ルーラを隠します。

CT SET DISPLAY (Area ; 1 ; 0)

CT SET DISPLAY (Area ; 2 ; 0)

CT SET DISPLAY (Area ; 3 ; 0)

CT SET DISPLAY (Area ; 9 ; 0)

参照

CT Get display

CT GET DOCUMENT SIZE

CT GET DOCUMENT SIZE (エリア ; 幅 ; 高さ)

引数	タイプ	説明
エリア	倍長整数	4D Chartエリア
幅	実数	ドキュメントの幅を受け取る (ポイント単位)
高さ	実数	ドキュメントの高さを受け取る (ポイント単位)

説明

CT GET DOCUMENT SIZE コマンドはドキュメントエリアのサイズを設定します。4D Chartドキュメントのデフォルトサイズは768×588ピクセルです。このサイズは4D Chartプラグインエリアやプラグインウインドウのサイズによって異なります。4D Chartドキュメントは最大3500×3500ポイントまでを測定できます。

引数<幅>は、ドキュメントエリアの幅のポイント数です。

引数<高さ>は、ドキュメントエリアの高さのポイント数です。

例題

以下の例は、**CT GET DOCUMENT SIZE** コマンドを使用して現在のドキュメントを変更する前にそのサイズを取得します。

CT GET DOCUMENT SIZE (Area ; \$Width ; \$Height)

If (\$Width<2208)

CT SET DOCUMENT SIZE (Area ; 2208 ; 730)

End if

参照

CT SET DOCUMENT SIZE

CT SET DOCUMENT SIZE

CT SET DOCUMENT SIZE (エリア ; 幅 ; 高さ)

引数	タイプ	説明
エリア	倍長整数	4D Chartエリア
幅	実数	ドキュメントの幅 (ポイント単位) -1=変更なし
高さ	実数	ドキュメントの高さ (ポイント単位) -1=変更なし

説明

CT SET DOCUMENT SIZE コマンドはドキュメントエリアのサイズを設定します。4D Chartドキュメントのデフォルトサイズは588×768ピクセルです。このサイズは4D Charプラグインエリアやプラグインウインドウのサイズによって異なります。4D Chartドキュメントは最大3500×3500ポイントまでを測定できます。

引数<幅>は、ドキュメントエリアの幅のポイント数です。

引数<高さ>は、ドキュメントエリアの高さのポイント数です。

例題

以下の例は、**On start up**データベースメソッドで設定されており、2208×1460ポイントのすべての新しいドキュメントにデフォルトのドキュメントサイズを設定します。

CT SET DOCUMENT SIZE (-1 ; 2208 ; 1460)

参照

CT GET DOCUMENT SIZE

CT GET PROPERTIES

CT GET PROPERTIES (エリア ; プリント順 ; 変更メッセージ ; ホットリンクタイプ ; 保存メッセージ)

引数	タイプ	説明
エリア	倍長整数	4D Chartエリア
プリント順	整数	プリント順を受け取る 0=行順、1=列順
変更メッセージ	整数	グラフタイプ変更メッセージを受け取る 0=メッセージなし、1=メッセージあり
ホットリンクタイプ	整数	ホットリンク用のデフォルトグラフタイプを受け取る
保存メッセージ	整数	保存メッセージを受け取る 0=メッセージなし、1=メッセージあり

説明

CT GET PREFERENCES コマンドは、指定された4D Chartエリアに設定されているプロパティ情報を取得します。

引数<プリント順>は、ドキュメントのどのページが印刷されるのかの順序です。プリント順は、ドキュメントが印刷される順序だけに影響し、ページの方向には影響しません。

引数<変更メッセージ>は、グラフのタイプを変更しようとしたときに「警告」ボックスが表示されるかどうかを指定します。ユーザは、キャンセルするか変更を続行するかオプションを選択できます。

引数<ホットリンクタイプ>は、ホットリンクに格納されたデータから生成されるグラフのデフォルトタイプです。この<ホットリンクタイプ>のコードを下記に示します：

コード	チャートタイプ
1	2D 面
2	2D 棒
3	2D ピクチャ
4	2D 線
5	2D 散布図
6	2D 円
7	2D ボーラー
8	XYチャート
100	3D 棒
101	3D 線
102	3D 面
103	3D 等高線
104	3D 三角形
105	3D ピン

引数<保存メッセージ>は、変更を保存していない4D Chartドキュメントをクローズするときに「警告」ボックスをユーザに表示するかどうかを指定します。

<保存メッセージ>が1の場合は、4D Chartは変更を保存していない4D Chartドキュメントをユーザがクローズすると通常の「警告」ボックスを表示します。「警告」ボックスには、変更を保存する、変更を保存しない、クローズせずにドキュメントに戻るというオプションがあります。

<保存メッセージ>が0の場合は、4D Chartは変更を保存しないか、またはユーザに「警告」ボックスを表示しません。変更を保存するかどうかは設定者の責任になります。例外は、ピクチャフィールドに保存される途中のフォーム上にある4D Chartエリアです。これらのエリアの内容はピクチャフィールドに自動的に保存されます。

例題

以下の例は、\$POrder、\$CAAlert、\$HType、\$SAAlertの変数にプリント順、グラフタイプ変更メッセージ、ホットリンクチャートタイプといったエリアのプロパティを返す例です。

CT GET PROPERTIES (Area ; \$POrder ; \$CAAlert ; \$HType ; \$SAAlert)

参照

CT SET PROPERTIES、CT SAVE DOCUMENT

CT SET PROPERTIES

CT SET PROPERTIES (エリア；プリント順；変更メッセージ；ホットリンクタイプ；保存メッセージ)

引数	タイプ	説明
エリア	倍長整数	4D Chartエリア
プリント順	整数	プリント順を受け取る 0=行順、1=列順
変更メッセージ	整数	グラフタイプ変更メッセージを受け取る 0=メッセージなし、1=メッセージあり
ホットリンクタイプ	整数	ホットリンク用のデフォルトグラフタイプを受け取る
保存メッセージ	整数	保存メッセージを受け取る 0=メッセージなし、1=メッセージあり

説明

CT SET PREFERENCES コマンドは、指定された4D Chartエリアに設定されているプロパティ情報を取得します。

引数<プリント順>は、ドキュメントのどのページが印刷されるのかの順序です。プリント順は、ドキュメントが印刷される順序だけに影響し、ページの方向には影響しません。引数<変更メッセージ>は、グラフのタイプを変更しようとしたときに「警告」ボックスが表示されるかどうかを指定します。ユーザは、キャンセルするか変更を続行するかのオプションを選択できます。

引数<ホットリンクタイプ>は、ホットリンクに格納されたデータから生成されるグラフのデフォルトタイプです。この<ホットリンクタイプ>のコードについては、前述の**CT GET PROPERTIES**コマンドの説明を参照してください。

引数<保存メッセージ>は、変更を保存していない4D Chartドキュメントをクローズするときに「警告」ボックスをユーザに表示するかどうかを指定します。

<保存メッセージ>が1の場合は、4D Chartは変更を保存していない4D Chartドキュメントをユーザがクローズすると通常の「警告」ボックスを表示します。「警告」ボックスには、変更を保存する、変更を保存しない、クローズせずにドキュメントに戻るというオプションがあります。

<保存メッセージ>が0の場合は、4D Chartは変更を保存しないか、またはユーザに「警告」ボックスを表示しません。変更を保存するかどうかは設定者の責任になります。例外は、ピクチャフィールドに保存される途中のフォーム上にある4D Chartエリアです。これらのエリアの内容はピクチャフィールドに自動的に保存されます。

例題

以下の例は、他のプロパティは変更せずに、デフォルトホットリンクチャートタイプを3D等高線グラフに設定します。

CT SET PROPERTIES (Area ; -1 ; -1 ; 103 ; -1)

参照

CT GET PROPERTIES、CT SAVE DOCUMENT

以下のコマンドと関数は、「ルーチン」エリアの「Objects」テーマ内にあります：

CT Draw text	CT GET LINE ATTRIBUTES
CT Draw line	CT SET LINE ATTRIBUTES
CT Draw rectangle	CT GET FILL ATTRIBUTES
CT Draw oval	CT SET FILL ATTRIBUTES
CT Array to polygon	CT SELECT
CT Place picture	CT MOVE
CT Get ID	CT SIZE
CT Get object type	CT Count
CT Get refnum	CT ALIGN
CT SET REFNUM	CT GET HIGHLIGHT
CT GET BOUNDARY	CT SET HIGHLIGHT
CT GET TEXT ATTRIBUTES	CT INSERT FIELD
CT SET TEXT ATTRIBUTES	CT INSERT EXPRESSION

このテーマにあるコマンドと関数を使用すると、線、矩形、テキストなどのオブジェクトの描画および変更を実行することができます。

CT Draw text

CT Draw text (エリア ; 左 ; 上 ; 右 ; 下 ; テキスト) 倍長整数

引数	タイプ	説明
エリア	倍長整数	4D Chartエリア
左	実数	開始点の横方向の位置 (ポイント単位)
上	実数	開始点の縦方向の位置 (ポイント単位)
右	実数	終了点の横方向の位置 (ポイント単位)
下	実数	終了点の縦方向の位置 (ポイント単位)
テキスト	実数	新しいテキストオブジェクトのテキスト
戻り値	倍長整数	新しいテキストオブジェクトの オブジェクトID

説明

CT Draw text関数は、引数<エリア>に新しいテキストオブジェクトを作成し、新しいオブジェクトのオブジェクトIDを返します。オブジェクトは、<左>、<上>、<右>、<下>の座標に従って配置されます。

例題

以下のメソッドは、チャートエリアの左上隅に「Hello World」というテキストを描画します。

\$Text:= **CT Draw text** (Area ; 0 ; 0 ; 300 ; 10 ; "Hello World")

参照

なし

CT Draw line

CT Draw line (エリア ; 左 ; 上 ; 右 ; 下 ; 矢印形態) 倍長整数

引数	タイプ	説明
エリア	倍長整数	4D Chartエリア
左	実数	開始点の横方向の位置 (ポイント単位)
上	実数	開始点の縦方向の位置 (ポイント単位)
右	実数	終了点の横方向の位置 (ポイント単位)
下	実数	終了点の縦方向の位置 (ポイント単位)
矢印形態	実数	矢印形態コード (下記の表参照)
戻り値	倍長整数	新しいオブジェクトのオブジェクトID

説明

CT Draw line関数は、引数<エリア>に新しい線オブジェクトを作成し、新しいオブジェクトのオブジェクトIDを返します。オブジェクトは、<左>、<上>、<右>、<下>の座標に従って配置されます。

下記は、引数<矢印形態>用のコードです。

コード	矢印形態
-1	デフォルト値
0	なし
1	始点
2	終点
3	両端

例題

以下のメソッドは、チャートエリアに矢印付きの線を描画します。

\$Line:= CT Draw line (Area ; 10 ; 10 ; 50 ; 50 ; 3)

参照

なし

CT Draw rectangle

CT Draw rectangle (エリア ; 左 ; 上 ; 右 ; 下 ; 角の丸み) 倍長整数

引数	タイプ	説明
エリア	倍長整数	4D Chartエリア
左	実数	開始点の横方向の位置 (ポイント単位)
上	実数	開始点の縦方向の位置 (ポイント単位)
右	実数	終了点の横方向の位置 (ポイント単位)
下	実数	終了点の縦方向の位置 (ポイント単位)
矢印形態	実数	角の丸みの度合い (ポイント単位)
戻り値	倍長整数	新しいオブジェクトのオブジェクトID

説明

CT Draw rectangle関数は、引数<エリア>に新しい矩形オブジェクトを作成し、新しいオブジェクトのオブジェクトIDを返します。オブジェクトは、<左>、<上>、<右>、<下>の座標に従って配置されます。

引数<角の丸み>は、新しい矩形の角の丸みの度合いを調整します。<角の丸み>が0ならば、角は丸くなりません。

例題

以下のメソッドは、丸みのある矩形をチャートエリアに描画します。

```
$Rect:= CT Draw rectangle (Area ; 5 ; 5 ; 200 ; 200 ; 5)
```

参照

なし

CT Draw oval

CT Draw oval (エリア ; 左 ; 上 ; 右 ; 下) 倍長整数

引数	タイプ	説明
エリア	倍長整数	4D Chartエリア
左	実数	開始点の横方向の位置 (ポイント単位)
上	実数	開始点の縦方向の位置 (ポイント単位)
右	実数	終了点の横方向の位置 (ポイント単位)
下	実数	終了点の縦方向の位置 (ポイント単位)

戻り値 倍長整数 新しいオブジェクトのオブジェクトID

説明

CT Draw oval関数は、引数<エリア>に新しい楕円オブジェクトを作成し、その新しいオブジェクトのオブジェクトIDを返します。オブジェクトは、<左>、<上>、<右>、<下>の座標に従って配置されます。

例題

以下のメソッドは、チャートエリアに円を描画します。

```
$Oval:= CT Draw oval (Area ; 5 ; 5 ; 100 ; 100)
```

参照

なし

CT Array to polygon

CT Array to polygon (エリア ; 水平配列 ; 垂直配列) 倍長整数

引数	タイプ	説明
エリア	倍長整数	4D Chartエリア
水平配列	実数配列	頂点の横方向の値の配列
垂直配列	実数配列	頂点の縦方向の値の配列
戻り値	倍長整数	新しいオブジェクトのオブジェクトID

説明

CT Array to polygon関数は、引数<水平配列>と<垂直配列>の配列を基にした新しい多角形を<エリア>に作成し、その新しいオブジェクトのIDを返します。

<水平配列>と<垂直配列>は、多角形の各頂点の位置を記述しています。この2つの配列にはポイント単位で実数、倍長整数、整数のいずれかのデータタイプを指定できます。多角形が正常に作成されるようにそれぞれの配列には少なくとも3つの要素が必要です。配列の要素が同じ数ではない場合には、大きい方の配列の余分の要素は無視されます。閉じた多角形を作成するには、各配列の最後の値と最初の値を一致させる必要があります。

例題

以下の例は、2つの配列に値を入れ、そこから多角形を作成します。次にその多角形を移動し、サイズを変更します。

```
$Vertices:=Num (Request ("頂点の数を入力してください。"))
If (OK=1)
  `配列を宣言する
  ARRAY REAL(aVerticeH ; $Vertices)
  ARRAY REAL(aVerticeV ; $Vertices)
  `配列に値を入れる
  For ($i ; 1 ; $Vertices)
    aVerticeH{$i}:=Sin($i)
    aVerticeV{$i}:=Cos($i)
  End for
  `多角形を描く
  $Poly:= CT Array to polygon (Area ; aVerticeH ; aVerticeV)
  `多角形を座標 (10,10) に移動する
  CT MOVE (Area ; $Poly ; 10 ; 10)
  `多角形のサイズを200×200に変更する
  CT SIZE (Area ; $Poly ; 200 ; 200)
End if
```

参照
なし

CT Place picture

CT Place picture (エリア ; ピクチャ ; 左 ; 上) 倍長整数

引数	タイプ	説明
エリア	倍長整数	4D Chartエリア
ピクチャ	ピクチャ	配置する4Dのピクチャ
左	実数	左端からポイント単位で表した左座標
上	実数	上端からポイント単位で表した上座標
戻り値	倍長整数	新しいオブジェクトのオブジェクトID

説明
CT Place picture関数は、引数<左>と<上>によって決定される点で<エリア>に<ピクチャ>を貼り付けてから、そのピクチャのオブジェクトIDを返します。
引数<ピクチャ>は、正しい14th Dimensionピクチャ式である必要があります。

例題
以下の例は、指定された企業の<エリア>にピクチャフィールド[Logo]Logoの内容を貼り付けます。

```
MyRequest:=Request ("どの会社のロゴがほしいですか？")
If (OK=1)
  QUERY ([Logo];[Logo]Company=MyRequest)
  If (Records in selection ([Logo]>0)
    $NewPict:= CT Place Picture (Area ; [Logo]Logo ; 10 ; 10)
  Else
    ALERT ("この会社は存在しません。")
  End if
End if
```

参照
なし

CT Get ID

CT Get ID (エリア ; スコープ ; インデックス) 倍長整数

引数	タイプ	説明
エリア	倍長整数	4D Chartエリア
スコープ	倍長整数	関数のスコープ -1=すべて、0=選択されたオブジェクト >0=オブジェクトID
インデックス	倍長整数	<スコープ>でのオブジェクトの数値
戻り値	倍長整数	オブジェクトのユニークのオブジェクトID

説明

CT Get ID関数は、引数<スコープ>と<インデックス>で記述された<エリア>のオブジェクトに対する一意なIDを返します。この数値は他の多くの4D Chartコマンドで使用され、オブジェクトのIDになります。

オブジェクトのIDを取得するには、まず最初に対象のオブジェクトセットを指定し、次にそのセット内のオブジェクトの順序を指定します。オブジェクトは後ろのものから前のものへ順になっています。一番後ろのオブジェクトにはインデックス1がついています。

<スコープ> が-1の場合には、<インデックス> はドキュメント全体のオブジェクトの順序を指します。

<スコープ> が0の場合には、<インデックス> は現在選択されているオブジェクト内のオブジェクトの順序を指します。

<スコープ> が0よりも大きな場合には、それがグループに対するIDである必要があり、<インデックス> はそのグループ内部のオブジェクトの順序を指します。この最後の構文ではグループを解体せずにグループ内のオブジェクトを扱うことができます。

例題

以下の例は、選択したオブジェクトのIDを取り出す方法を示しています。

`vID := CT Get ID (Area ; 0 ; 1)` `最初に選択したオブジェクトのIDを取得する

参照

なし

CT Get object type

CT Get object type (エリア ; スコープ) 倍長整数

引数	タイプ	説明
エリア	倍長整数	4D Chartエリア
スコープ	倍長整数	関数のスコープ -1=すべて、0=選択されたオブジェクト >0=オブジェクトID
戻り値	倍長整数	エリア内のオブジェクトの オブジェクトタイプ

説明

CT Get object type関数は、引数<スコープ>で記述された<エリア>内のオブジェクトのオブジェクトタイプを返します。

オブジェクトのタイプは整数コードによって記述され、一度オブジェクトが作成されると変更はできません。

<スコープ> が-1の場合には、**CT Get object type**関数はドキュメント内のすべてのオブジェクトのオブジェクトタイプを返します。オブジェクトのタイプがすべて同じではないときには、**CT Get object type**関数は-32000を返します。

<スコープ> が0の場合には、**CT Get object type**関数は選択されたオブジェクトのオブジェクトタイプを返します。オブジェクトのタイプがすべて同じではないときには、**CT Get object type**関数は-32000を返します。

<スコープ> が0よりも大きな場合には、それが特定オブジェクトのIDと同じである必要があり、そのオブジェクトのタイプが返されます。オブジェクトが存在しない場合には、**CT Get object type**関数は-32000を返します。

以下の表は、すべてのオブジェクトコードです。

コード	オブジェクトタイプ
1	テキスト
2	ホットリンク
3	ピクチャ
4	使用せず
5	チャート
6	矩形
7	多角形
8	楕円
9	使用せず
10	線
11	グループ

例題

以下のコマンドは、選択されたオブジェクトのIDを\$ID変数に返します。

\$ID:= **CT Get object type** (Area ; 0)

参照

CT Get ID

CT Get refnum

CT Get refnum (エリア ; スコープ) 倍長整数

引数	タイプ	説明
エリア	倍長整数	4D Chartエリア
スコープ	倍長整数	関数のスコープ -2=デフォルト、-1=すべて、 0=選択されたオブジェクト、 >0=オブジェクトID
戻り値	倍長整数	エリア内のオブジェクトの リファレンス番号

説明

CT Get refnum関数は、引数<スコープ>で記述された<エリア>にオブジェクトの参照番号を返します。

参照番号はオブジェクトに対応する倍長整数であり、一意である必要性はありません。参照番号はプロシージャだけに従って操作されます。参照番号は、ユーザがオブジェクトに割り当てるものです。これに対して、オブジェクトIDは4D Chartによって割り当てられるものです。

<スコープ> が-2の場合には、**CT Get refnum**関数はデフォルトの参照番号を返します。

<スコープ> が-1の場合には、**CT Get refnum**関数はドキュメント内の全オブジェクトに対する参照番号を返します。オブジェクトの参照番号がすべて同じではないときには、**CT Get refnum**関数は、-32000を返します。

<スコープ> が0の場合には、**CT Get refnum**関数は選択されたオブジェクトの参照番号を返します。オブジェクトの参照番号がすべて同じではないときには、**CT Get refnum**関数は、-32000を返します。

<スコープ> が0よりも大きな場合には、それが特定オブジェクトのIDと同じである必要があり、そのオブジェクトの参照番号が返されます。オブジェクトが存在しない場合には、**CT Get refnum**関数は-32000を返します。

例題

以下の例は、<エリア>を含むフォーム上のボタン用オブジェクトメソッドです。オブジェクトメソッドは、実行されるとひとつのオブジェクトだけが選択されているかどうかをチェックし、対応するレコードを[Parts]Tableで検索し、その記述を表示します。

```
QUERY ([Parts];[Parts]RefNo = CT Get refnum (Area ; 0))
ALERT ("このオブジェクトは" + [Parts]Explanation+ "です。")
```

参照

CT Get ID、CT SET REFNUM

CT SET REFNUM

CT SET REFNUM (エリア ; スコープ ; 参照番号)

引数	タイプ	説明
エリア	倍長整数	4D Chartエリア
スコープ	倍長整数	コマンドのスコープ -2=デフォルト、-1=すべて、 0=選択されたオブジェクト、 >0=オブジェクトID
参照番号	倍長整数	参照番号

説明

CT SET REFNUMコマンドは、引数<参照番号>を<スコープ>で記述された<エリア>にあるオブジェクト用の参照番号にします。参照番号は、それがオブジェクトを識別する方法であり、一意ではないという点でオブジェクト名と似ています。参照番号はオブジェクトID番号ではありません。オブジェクトID番号はドキュメント内の各オブジェクトに対して4D Chartで割り当てられた一意の番号です。

<スコープ> が-2の場合は、**CT SET REFNUM**コマンドがデフォルトの参照番号を設定します。これは、任意の新しいオブジェクトに使用される参照番号です。

<スコープ> が-1の場合は、**CT SET REFNUM**コマンドはドキュメント内の全オブジェクトに対する参照番号を設定します。

<スコープ> が0の場合は、**CT SET REFNUM**コマンドは選択されたオブジェクトに対する参照番号を設定します。

<スコープ> が0よりも大きな場合は、それが特定オブジェクトのIDと同じである必要があります。オブジェクトが存在しない場合は、**CT SET REFNUM**コマンドは何も行いません。

参照番号は、オブジェクトに対応する一意ではない倍長整数です。参照番号はメソッドだけに従って操作できます。参照番号のデフォルト値は、0です。

例題

以下の例は、選択したオブジェクトの参照番号をvNumber変数に含まれる値に変更します。

CT SET REFNUM (Area ; 0 ; vNumber)

参照

CT Get ID、CT Get refnum

CT GET BOUNDARY

CT GET BOUNDARY (エリア ; スコープ ; 左 ; 上 ; 右 ; 下)

引数	タイプ	説明
エリア	倍長整数	4D Chartエリア
スコープ	倍長整数	コマンドのスコープ -1=すべて、0=選択されたオブジェクト >0=オブジェクトID
左	実数	開始点の横方向の位置を受け取る (ポイント単位)
上	実数	開始点の縦方向の位置を受け取る (ポイント単位)
右	実数	終了点の横方向の位置を受け取る (ポイント単位)
下	実数	終了点の縦方向の位置を受け取る (ポイント単位)

説明

CT GET BOUNDARYコマンドは、引数<スコープ>で記述された<エリア>にあるオブジェクトの境界を<左>、<上>、<右>、<下>変数に返します。

境界とは、オブジェクトを含む最も小さな矩形領域の座標です。

<スコープ>が-1の場合には、**CT GET BOUNDARY**コマンドはドキュメント内のすべてのオブジェクトに対する境界を返します。

<スコープ>が0の場合には、**CT GET BOUNDARY**コマンドは選択されたオブジェクトの境界を返します。

<スコープ>が0よりも大きな場合には、それは特定オブジェクトのIDと同じである必要があり、そのオブジェクトの境界が返されます。オブジェクトが存在しない場合には、**CT GET BOUNDARY**コマンドは各座標に対して-32000を返します。

例題

以下の線は、選択したオブジェクトの境界を\$left、\$top、\$right、\$bottom変数に返します。

CT GET BOUNDARY (Area ; 0 ; \$left ; \$top ; \$right ; \$bottom)

参照
CT GET AREA BOUNDARY

CT GET TEXT ATTRIBUTES

CT GET TEXT ATTRIBUTES (エリア; スコープ; フォントID ; フォントサイズ ; スタイル ; カラー ; 位置揃え)

引数	タイプ	説明
エリア	倍長整数	4D Chartエリア
スコープ	倍長整数	コマンドのスコープ -3=選択されたテキスト、-2=デフォルト、 -1=すべて、0=選択されたオブジェクト、 >0=オブジェクトID
フォントID	整数	フォントIDを受け取る
フォントサイズ	整数	フォントサイズを受け取る
スタイル	整数	フォントスタイルを受け取る
カラー	倍長整数	カラーの値を受け取る
位置揃え	整数	テキストの位置揃えを受け取る 0=左、1=中央、2=右

説明
CT GET TEXT ATTRIBUTESコマンドは、引数<エリア>、<スコープ>で指定されたテキストの属性を引数<フォントID>、<フォントサイズ>、<カラー>、<位置揃え>に返します。

引数<フォントID>は、システム内にあるフォントのIDです。フォントのID番号はCT Font number関数を使用することによって取得できます。これらの関数の詳細については、第9章の「ユーティリティコマンド」を参照してください。

引数<フォントサイズ>は、反転表示されたテキストやテキストオブジェクトのポイント単位のサイズです。

引数<スタイル>は、複数のスタイル番号の加算の結果を混合した番号です。以下の表はスタイル番号を示しています：

値	スタイル
1	標準
2	太字（ボールド）
3	斜体（イタリック）
4	下線（アンダーライン）
8	アウトライン
16	シャドウ

引数<カラー>は、オブジェクトの色を指定する倍長整数です。**CT Index to color**関数や**CT RGB to color**関数を使用することで<カラー>の値を指定できます。これらの関数の詳細については、第9章の「ユーティリティコマンド」を参照してください。

引数<位置揃え>は、テキストの位置揃えです。

例題

以下の例は、選択したテキストオブジェクトの属性を\$Font、\$Size、\$Style、\$Color、\$Justify変数に返します。

CT GET TEXT ATTRIBUTES (Area ; 0 ; \$Font ; \$Size ; \$Style ; \$Color ; \$Justify)

参照

CT SET TEXT ATTRIBUTES、CT GET CHART TEXT ATTRIBUTES

注：このコマンドは「テキスト」ツールや**CT Draw text**関数を使用してドキュメントに追加されたテキストの属性を取得するために使用してください。軸ラベルなどのチャートテキストの属性を取得するには、第6章の「チャートコマンド」で説明するコマンドを使用してください。

CT SET TEXT ATTRIBUTES

CT SET TEXT ATTRIBUTES (エリア; スコープ; フォントID ; フォントサイズ ; スタイル; カラー ; 位置揃え)

引数	タイプ	説明
エリア	倍長整数	4D Chartエリア
スコープ	倍長整数	コマンドのスコープ -3=選択されたテキスト、-2=デフォルト -1=すべて、0=選択されたオブジェクト >0=オブジェクトID
フォントID	整数	フォントIDを受け取る
フォントサイズ	整数	フォントサイズを受け取る
スタイル	整数	フォントスタイルを受け取る
カラー	倍長整数	カラーの値を受け取る
位置揃え	整数	テキストの位置揃えを受け取る 0=左、1=中央、2=右

説明

CT GET TEXT ATTRIBUTESコマンドは、引数<エリア>、<スコープ>で指定されたテキストにフォント、フォントサイズ、フォントスタイル、カラー、位置揃えを設定します。

引数<フォントID>は、システム内にあるフォントのIDです。フォントのID番号は**CT Font number**関数を使用することによって取得できます。これらの関数の詳細については、第9章の「ユーティリティコマンド」を参照してください。

引数<フォントサイズ>は、反転表示されたテキストやテキストオブジェクトのポイント単位のサイズです。

引数<スタイル>は、複数のスタイル番号の加算の結果を混合した番号です。以下の表はスタイル番号を示しています：

値	スタイル
1	標準
2	太字（ボールド）
3	斜体（イタリック）
4	下線（アンダーライン）
8	アウトライン
16	シャドウ

引数<カラー>は、オブジェクトの色を指定する倍長整数です。**CT Index to color**関数や**CT RGB to color**関数を使用することで<カラー>の値を指定できます。これらの関数の詳細については、第9章の「ユーティリティコマンド」を参照してください。

引数<位置揃え>は、テキストの位置揃えです。

例題

以下の例は、選択したテキストをOsaka、14ポイント、太字、斜体、緑、中央揃えに設定します。

CT SET TEXT ATTRIBUTES (Area ; 0 ; **CT Font number** ("Osaka") ; 14 ; 3 ; **CT Index to color** (10) ; 1)

参照

CT GET TEXT ATTRIBUTES、CT SET CHART TEXT ATTRIBUTES

注：このコマンドは「テキスト」ツールや**CT Draw text**関数を使用してドキュメントに追加されたテキストの属性を取得するために使用してください。軸ラベルなどのチャートテキストの属性を取得するには、第6章の「チャートコマンド」で説明するコマンドを使用してください。

CT GET LINE ATTRIBUTES

CT GET LINE ATTRIBUTES (エリア; スコープ; パターン; カラー; 線幅)

引数	タイプ	説明
エリア	倍長整数	4D Chartエリア
スコープ	倍長整数	コマンドのスコープ -2=デフォルト、-1=すべて 0=選択されたオブジェクト >0=オブジェクトID
パターン	整数	パターンインデックスを受け取る
カラー	倍長整数	カラーの値 (0以上) を受け取る
線幅	実数	ポイント単位で線の太さを受け取る (0以上)

説明

CT GET LINE ATTRIBUTES コマンドは、引数<スコープ>で記述された<エリア>内のオブジェクトに対する線属性を変数に返します。線以外のオブジェクトには、線属性がそのオブジェクトの境界線に適用されます。

引数<パターン>は、パターンパレット上で利用可能なパターンのひとつを指定する1から36までの整数です。<パターン>のコードについては、付録Dを参照してください。

引数<カラー>は、オブジェクトの色を指定する倍長整数です。**CT Index to color**関数や**CT RGB to color**関数を使用することで<カラー>の値を指定できます。これらの関数の詳細については、第9章の「ユーティリティコマンド」を参照してください。

引数<線幅>は、ポイント単位で計測される線の太さです。

例題

以下の例は、選択したオブジェクトの線属性を\$Pattern、\$Color、\$Width変数に返します。

CT GET LINE ATTRIBUTES (Area ; 0 ; \$Pattern ; \$Color ; \$Width)

参照

CT SET LINE ATTRIBUTES、CT GET CHART LINE ATTRIBUTES

注：このコマンドは「線」ツールや**CT Draw line**関数を使用してドキュメントに追加された線の属性を取得するために使用してください。グリッド線などのチャート線属性を取得するには、第6章の「チャートコマンド」で説明するコマンドを使用してください。

CT SET LINE ATTRIBUTES

CT SET LINE ATTRIBUTES (エリア; スコープ; パターン; カラー; 線幅)

引数	タイプ	説明
エリア	倍長整数	4D Chartエリア
スコープ	倍長整数	コマンドのスコープ -2=デフォルト、-1=すべて 0=選択されたオブジェクト >0=オブジェクトID
パターン	整数	パターン (0から36まで) -1=変更なし
カラー	倍長整数	カラーの値 (0以上) -1=変更なし
線幅	実数	線の幅 (ポイント単位) -1=変更なし

説明

CT SET LINE ATTRIBUTESコマンドは、引数<スコープ>で記述された<エリア>内のオブジェクトに対する線属性を変更します。線以外のオブジェクトには、線属性がそのオブジェクトの境界線に適用されます。

引数<パターン>は、パターンパレット上で利用可能なパターンのひとつを指定する1から36までの整数です。<パターン>のコードについては、付録Dを参照してください。

引数<カラー>は、オブジェクトの色を指定する倍長整数です。CT Index to color関数やCT RGB to color関数を使用することで<カラー>の値を指定できます。これらの関数の詳細については、第9章の「ユーティリティコマンド」を参照してください。

引数<線幅>は、ポイント単位で計測される線の太さです。

例題

以下の例は、選択されたオブジェクトの線属性を実線、青、3ポイントに設定します。

CT SET LINE ATTRIBUTES (Area ; 0 ; 3 ; CT Index to color (6) ; 3)

参照

CT GET LINE ATTRIBUTES、CT SET CHART LINE ATTRIBUTES

注：このコマンドは「線」ツールやCT Draw line関数を使用してドキュメントに追加された線の属性を取得するために使用してください。グリッド線などのチャート線属性を取得するには、第6章の「チャートコマンド」で説明するコマンドを使用してください。

CT GET FILL ATTRIBUTES

CT GET FILL ATTRIBUTES (エリア; スコープ; パターン; カラー)

引数	タイプ	説明
エリア	倍長整数	4D Chartエリア
スコープ	倍長整数	コマンドのスコープ -2=デフォルト、-1=すべて 0=選択されたオブジェクト >0=オブジェクトID
パターン	整数	パターン番号（1から36）を受け取る
カラー	倍長整数	カラーの値を受け取る

説明

CT GET FILL ATTRIBUTESコマンドは、引数<スコープ>で記述される<エリア>内のオブジェクトに対する塗りつぶし属性を変数に返します。塗りつぶし属性はオブジェクトの内部によって決定されます。

引数<パターン>は、パターンパレット上で利用可能なパターンの1つを指定する1から36までの整数です。<パターン>のコードについては、付録Dを参照してください。

引数<カラー>は、オブジェクトの色を指定する倍長整数です。**CT Index to color**関数や**CT RGB to color**関数を使用することで<カラー>の値を指定できます。これらの関数の詳細については、第9章の「ユーティリティコマンド」を参照してください。

例題

以下の例は、選択されたオブジェクトの塗りつぶし属性を\$Pattern変数と\$Color変数に返します。

CT GET FILL ATTRIBUTES (Area ; 0 ; \$Pattern ; \$Color)

参照

CT SET FILL ATTRIBUTES、CT GET CHART FILL ATTRIBUTES

注：このコマンドは、この章にある描画ツールや描画関数を使用してドキュメントに追加されたオブジェクトの属性を取得するために使用してください。系列カラムなどのチャートオブジェクト属性を取得するには、第6章の「チャートコマンド」で説明するコマンドを使用してください。

CT SET FILL ATTRIBUTES

CT SET FILL ATTRIBUTES (エリア; スコープ; パターン; カラー)

引数	タイプ	説明
エリア	倍長整数	4D Chartエリア
スコープ	倍長整数	コマンドのスコープ -2=デフォルト、-1=すべて 0=選択されたオブジェクト >0=オブジェクトID
パターン	整数	パターン番号 (1から36) を受け取る
カラー	倍長整数	カラーの値を受け取る

説明

CT SET FILL ATTRIBUTESコマンドは、引数<スコープ>で記述される<エリア>内のオブジェクトに対する塗りつぶし属性を変更します。塗りつぶし属性はオブジェクトの内部によって決定されます。

引数<パターン>は、パターンパレット上で利用可能なパターンのひとつを指定する1から36までの整数です。<パターン>のコードについては、付録Dを参照してください。

引数<カラー>は、オブジェクトの色を指定する倍長整数です。**CT Index to color**関数や**CT RGB to color**関数を使用することで<カラー>の値を指定できます。これらの関数の詳細については、第9章の「ユーティリティコマンド」を参照してください。

例題

以下の例は、選択されたオブジェクトの塗りつぶし属性を黄色の塗りつぶしに設定します。

CT SET FILL ATTRIBUTES (Area ; 0 ; 3 ; **CT Index to color** (2))

参照

CT GET FILL ATTRIBUTES、CT SET CHART FILL ATTRIBUTES

注：このコマンドは、この章にある描画ツールや描画関数を使用してドキュメントに追加されたオブジェクトの属性を設定するために使用してください。系列カラムなどのチャートオブジェクト属性を設定するには、第6章の「チャートコマンド」で説明するコマンドを使用してください。

CT SELECT

CT SELECT(エリア; スコープ ; 動作)

引数	タイプ	説明
エリア	倍長整数	4D Chartエリア
スコープ	倍長整数	コマンドのスコープ -2=デフォルト、-1=すべて 0=選択されたオブジェクト >0=オブジェクトID
動作	整数	オブジェクトを選択するか 選択解除するか？ 0=選択解除、1=選択、2=切り替え

説明

CT SELECTコマンドは、引数<スコープ>で記述された<エリア>にあるオブジェクトの選択または選択解除を行います。

<スコープ> が-1の場合には、**CT SELECT**コマンドはドキュメント内の全オブジェクトを対象にします。

<スコープ> が 0の場合には、**CT SELECT**コマンドは選択されたオブジェクトを対象にします。

<スコープ> が0よりも大きな場合には、それが特定オブジェクトのIDと同じである必要があり、そのオブジェクトが対象になります。オブジェクトが存在しない場合には、**CT SELECT**コマンドは何も行いません。

<スコープ>で記述されたオブジェクトは、引数<動作>に従って選択または選択解除されます。<動作>が0の場合には、<スコープ>で記述されたオブジェクトの選択は解除されます。<動作>が1の場合には、<スコープ>で記述されたオブジェクトが選択されます。<動作>が2の場合には、オブジェクトの現在の状態が切り替わります。つまり、選択されたものは選択が解除され、選択解除されているものは選択されます。

<スコープ>以外のオブジェクトは、**CT SELECT**コマンドの対象にはなりません。つまり、<エリア>で既に選択されており、<スコープ>で指定されないオブジェクトは、選択されたままになります。

例題

以下の例は、ドキュメントの全オブジェクトの選択を解除してから、ID番号が1であるオブジェクトを選択します。

CT SELECT (Area ; -1 ; 0)

CT SELECT (Area ; 1 ; 1)

参照
CT Get ID

CT MOVE

CT MOVE(エリア; スコープ; 左; 上)

引数	タイプ	説明
エリア	倍長整数	4D Chartエリア
スコープ	倍長整数	コマンドのスコープ --1=すべて、0=選択されたオブジェクト >0=オブジェクトID
左	実数	新しい左端の座標
上	実数	新しい上端の座標

説明
CT MOVEコマンドは、引数<スコープ>で記述された<エリア>にあるオブジェクトの位置を変更します。

<スコープ> が-1の場合には、CT MOVEコマンドはドキュメント内の全オブジェクトの位置を変更します。

<スコープ> が0の場合には、CT MOVEコマンドは選択されたオブジェクトの位置を変更します。

<スコープ> が0よりも大きな場合には、それが特定オブジェクトのIDと同じである必要があり、そのオブジェクトの位置を変更します。

<スコープ> で記述されたオブジェクトは、現在の原点からのオフセットとして指定される引数<左>と<上>に従って移動されます。

例題
以下の例は、選択されたオブジェクトをチャートエリアの左上隅に移動します。

CT MOVE (Area ; 0 ; 0 ; 0)

参照
CT Get ID、CT SIZE

CT SIZE

CT SIZE(エリア; スコープ; 幅; 高さ)

引数	タイプ	説明
エリア	倍長整数	4D Chartエリア
スコープ	倍長整数	コマンドのスコープ --1=すべて、0=選択されたオブジェクト >0=オブジェクトID
幅	実数	新しい幅 (ポイント単位) -1=変更なし
高さ	実数	新しい高さ (ポイント単位) -1=変更なし

説明

CT SIZE コマンドは、引数<スコープ>で<エリア>に記述されたオブジェクトのサイズを変更します。オブジェクトのサイズを変更するときに、オブジェクトの左上隅は固定されています。

<スコープ> が-1の場合には、**CT SIZE** コマンドはドキュメント内の全オブジェクトのサイズを変更します。

<スコープ> が0の場合には、**CT SIZE** コマンドは選択されたオブジェクトのサイズを変更します。

<スコープ> が0よりも大きな場合には、それは特定オブジェクトのIDである必要があり、そのオブジェクトのサイズが変更されます。

<スコープ> で記述されたオブジェクトは、ポイント単位で指定される引数<幅>と<高さ>に従ってサイズが変更されます。

例題

以下の例は、IDが5であるオブジェクトのサイズを変更します。

CT SIZE (Area ; 5 ; 10 ; 10)

参照

CT Get ID、CT MOVE

CT Count

CT Count(エリア; スコープ) 整数

引数	タイプ	説明
エリア	倍長整数	4D Chartエリア
スコープ	倍長整数	コマンドのスコープ --1=すべて、0=選択されたオブジェクト >0=グループID

戻り値 整数 エリア内のオブジェクトの数

説明

CT Count関数は、引数<スコープ>で指定された<エリア>にオブジェクトの数を返します。

<スコープ>が-1の場合には、**CT Count**関数はグループ内にはないドキュメント中のオブジェクトの数を返します。グループは単一のオブジェクトになります。

<スコープ>が0の場合には、**CT Count**関数はグループ内にはない現在選択されているオブジェクトの数を返します。グループは単一のオブジェクトになります。

<スコープ>が0よりも大きな場合には、それはグループ用のIDである必要があり、**CT Count**関数はそのグループ内部のオブジェクト数を返します。この構文で、グループを解体せずにグループ内のオブジェクトについての情報を取得できます。ネストしているグループは、再度**CT Count**関数をコールして調査できます。

例題

以下の例は、現在選択されているオブジェクトの数を表示する警告ボックスを開きます。

```
$Count := CT Count (Area ; 0)
```

```
ALERT (String ($Count) + "個のオブジェクトが選択されました。")
```

参照

CT Get ID

CT ALIGN

CT ALIGN(エリア; スコープ; 水平; 垂直)

引数	タイプ	説明
エリア	倍長整数	4D Chartエリア
スコープ	倍長整数	コマンドのスコープ --1=すべて、0=選択されたオブジェクト
水平	整数	0=なし、1=左、2=中、3=右
垂直	整数	0=なし、1=上、2=中、3=下

説明





CT ALIGNコマンドは、引数<スコープ>で記述された<エリア>にオブジェクトを整列させます。

スコープ> が-1の場合には、**CT ALIGN**コマンドはドキュメント内の全オブジェクトを整列させます。




<スコープ> が0の場合には、**CT ALIGN**コマンドは選択されたオブジェクトを整列させます。

<スコープ> で記述されたオブジェクトは、引数<水平> と<垂直> に従って配列されます。

以下は、引数<水平>用の値、その効果の内容、「オブジェクト整列」ダイアログボックスでの対応するアイコンを示しています。

値	整列	アイコン
0	なし	
1	左揃え	
2	中揃え	
3	右揃え	

以下は、引数<垂直>用の値、その効果の内容、「オブジェクト整列」ダイアログボックスでの対応するアイコンを示しています。

値	整列	アイコン
0	なし	
1	上揃え	
2	中揃え	
3	下揃え	

例題

以下の例は、選択したオブジェクトを縦横両方の中央に整列させます。

CT ALIGN (Area ; 0 ; 2 ; 2)

参照

CT Get ID

CT GET HIGHLIGHT

CT GET HIGHLIGHT (エリア; 先頭; 最終)

引数	タイプ	説明
エリア	倍長整数	4D Chartエリア
先頭	整数	先頭の文字の位置から1を引いたものを 受け取る
最終	整数	最終の文字の位置を受け取る

説明

CT GET HIGHLIGHTコマンドは、引数<エリア>内で反転表示されているテキストの文字位置を<先頭>変数と<最終>変数に返します。

引数<先頭>は反転表示された先頭の文字の位置から1を引いたものであり、<最終>は反転表示された最終の文字です。<先頭>と<最終>が同じ場合には、反転表示されている文字はないので、挿入点は<先頭>と<先頭>+1の間になります。

反転表示されるテキストを持つのは一度に1つのオブジェクトだけなので、引数<スコープ>は必要ありません。<エリア>に反転表示されているテキストが存在しない場合には、**CT GET HIGHLIGHT**コマンドは、<先頭>と<最終>に-32000を返します。

例題

以下の例は、反転表示されたテキストの位置を返し、テキストが選択されていない場合にはユーザに警告を表示します。

```
CT GET HIGHLIGHT (Area ; $First ; $Last)
```

```
If (CT Error=46)
```

```
    ALERT ("反転表示されているテキストがありません。")
```

```
End if
```

参照

CT SET HIGHLIGHT

CT SET HIGHLIGHT

CT SET HIGHLIGHT (エリア; スコープ; 先頭; 最終)

引数	タイプ	説明
エリア	倍長整数	4D Chartエリア
スコープ	倍長整数	-1=ドキュメント内の先頭のオブジェクト 0=セクション内の先頭のオブジェクト >0=オブジェクトID
先頭	整数	先頭の文字の位置から1を引いたもの
最終	整数	最終の文字の位置

説明

CT SET HIGHLIGHTコマンドは、引数<スコープ>で記述された<エリア>にあるテキストオブジェクト内の文字を反転表示します。

<スコープ>が-1の場合には、**CT SET HIGHLIGHT**コマンドはドキュメントの最初のオブジェクトにある文字を反転表示します。

<スコープ>が0の場合には、**CT SET HIGHLIGHT**コマンドは最初に選択されたオブジェクトの文字を反転表示します。

<スコープ>が0よりも大きな場合は、それが特定テキストオブジェクトのIDと同じである必要があります、そのテキストオブジェクト内部の文字が反転表示されます。オブジェクトが存在しない場合は、**CT SET HIGHLIGHT**コマンドは何も行いません。

CT SET HIGHLIGHTコマンドでは、<スコープ>で記述されたオブジェクトが<エリア>で選択される唯一のオブジェクトです。

<スコープ>で記述されたオブジェクトがテキストオブジェクトではない場合には、**CT SET HIGHLIGHT**コマンドは何も行いません。

引数<先頭>と<最終>は、どの文字を反転表示するのかを決定します。<先頭>は反転表示される先頭の文字位置から1を引いたものです。<最終>は反転表示される最終の文字の位置です。<先頭>と<最終>が同じ場合には、選択されている文字はないので、挿入点は<先頭>と<先頭>+1の間になります。Lastがテキストオブジェクトの文字数よりも大きい場合には、**CT SET HIGHLIGHT**コマンドはテキストオブジェクトの最終まで文字を反転表示します。

CT SET HIGHLIGHTコマンドは参照の一部だけの反転表示は行いません。参照の任意の部分が反転表示されると、**CT SET HIGHLIGHT**コマンドは参照全体を含めるように反転表示を調整します。

例題

以下の例は、選択されたテキストオブジェクトのテキストを取得し、「4th Dimension」という名前を検索します。「4th Dimension」が見つかった場合には、反転表示されて太字（ボールド）になります。

```
$Find := Position ("4th Dimension" ; $Text)
```

```
If ($Find # 0)
```

```
    CT SET HIGHLIGHT (Area ; 0 ; $Find -1 ; $Find + 12)
```

```
    CT SET TEXT ATTRIBUTES (Area ; -3 ; -1 ; -1 ; 1 ; -1 ; -1)
```

```
End if
```

参照

CT GET HIGHLIGHT

CT INSERT FIELD

CT INSERT FIELD (エリア; スコープ; 先頭; 最終; テーブル; フィールド; {フォーマット})

引数	タイプ	説明
エリア	倍長整数	4D Chartエリア
スコープ	倍長整数	-1=ドキュメント内の先頭のオブジェクト 0=セレクション内の先頭のオブジェクト >0=オブジェクトID
先頭	整数	先頭の文字の位置から1を引いたもの
最終	整数	最終の文字の位置
テーブル	整数	参照のテーブル番号
フィールド	整数	参照のフィールド番号
フォーマット	文字列	参照のフォーマット

説明

CT INSERT FIELDコマンドは、引数<スコープ>で記述された<エリア>にあるテキストオブジェクトにフィールド参照を挿入します。

<スコープ>が-1の場合には、**CT INSERT FIELD**コマンドはドキュメントの最初のオブジェクトに参照を挿入します。

<スコープ>が0の場合には、**CT INSERT FIELD**コマンドは最初に選択されたオブジェクトに参照を挿入します。

<スコープ>が0よりも大きな場合には、それが特定テキストオブジェクトのIDと同じである必要があり、参照はそのテキストオブジェクト内部に挿入されます。オブジェクトが存在しない場合には、**CT INSERT FIELD**コマンドは何も行いません。

<スコープ>で記述されたオブジェクトがテキストオブジェクトではない場合には、**CT INSERT FIELD**コマンドは何も行いません。

引数<先頭>と<最終>は、参照が挿入される場所を決定します。<先頭>は置き換えられる先頭の文字の位置から1少ないものであり、<最終>は置き換えられる最終の文字位置です。<先頭>がLastと同じ場合には、文字は置き換えられず、参照は<先頭>と<先頭>+1の間に挿入されます。<最終>がテキストオブジェクトにある文字の数よりも大きい場合には、**CT INSERT FIELD**コマンドはテキストオブジェクトの<先頭>から最終の文字まで文字を置き換えます。

<先頭>と<最終>は参照されるフィールドを決定します。<テーブル>はテーブルの番号であり、<フィールド>はフィールドの番号です。テーブルとフィールドは作成された順に番号付けされています。

オプション引数の<フォーマット>は、参照用の表示フォーマットです。このオプションは、「フォーマット」ダイアログボックスからフォーマットを選択するのと同じです。フォーマットはその番号またはその名前から参照されます。フォーマットは、「フォーマット」ダイアログボックスのリストに表示される順に番号付けされています。

<フォーマット>が1桁か2桁の文字列の場合には、<フィールド>に適用されたフォーマットはリストからのものです。<フォーマット>が1桁か2桁の文字列ではない場合には、リスト内の各フォーマットのテキスト値と比較されます。リスト内の値のどれかと一致した場合には、そのフォーマットが適用されます。つまり、最初の日付フォーマットは「19」または「Short」のどちらかで参照できるということです。

<フォーマット>がフォーマットのリストにない場合は、カスタム数値フォーマットとして解釈されます。<フォーマット>が参照の結果の値としては不適切である場合には、無効になります。例えば、数値に対して日付フォーマットを使用した場合には、その数値はフォーマットされずに表示されます。

例題

以下の例は、IDが1であるテキストオブジェクトに最初のテーブルの最初のフィールドへの参照を挿入し、オブジェクトにある任意のテキストを置き換えてから、リストの11番目のフォーマットに従ってフォーマットを行います。

CT INSERT FIELD (Area ; 1 ; 0 ; 32000 ; 1 ; 1 ; "11")

4th Dimensionの**Field**関数と**Table**関数を使用すると、フィールドやテーブルの番号を判断できます。これによって、コードは読みやすくなります。例えば、前述の例で使用されたフィールドが[Customer]Nameである場合、コードは以下ようになります。

CT INSERT FIELD (Area ; 1 ; 0 ; 32000 ; **Table** (->[Custmer]) ; **Field** (->Name) ; "11")

参照

CT INSERT EXPRESSION

CT INSERT EXPRESSION

CT INSERT EXPRESSION (エリア; スコープ; 先頭; 最終; 式; {フォーマット})

引数	タイプ	説明
エリア	倍長整数	4D Chartエリア
スコープ	倍長整数	-1=ドキュメント内の先頭のオブジェクト 0=セレクション内の先頭のオブジェクト >0=オブジェクトID
先頭	整数	先頭の文字の位置から1を引いたもの
最終	整数	最終の文字の位置
式	文字列	式
フォーマット	文字列	式のフォーマット

CT INSERT EXPRESSIONコマンドは、引数<スコープ>で記述された<エリア>にある<式>への参照を挿入します。

<スコープ>が-1の場合には、**CT INSERT EXPRESSION**コマンドはドキュメントの最初のオブジェクトに参照を挿入します。

<スコープ>が0の場合には、**CT INSERT EXPRESSION**コマンドは最初に選択されたオブジェクトに参照を挿入します。

<スコープ>が0よりも大きな場合には、それが特定テキストオブジェクトのIDと同じである必要があり、参照はそのテキストオブジェクト内部に挿入されます。オブジェクトが存在しない場合には、**CT INSERT EXPRESSION**コマンドは何も行いません。

<スコープ>で記述されたオブジェクトがテキストオブジェクトではない場合には、**CT INSERT EXPRESSION**コマンドは何も行いません。

引数<先頭>と<最終>は、参照が挿入される場所を決定します。<先頭>は置き換えられる先頭の文字の位置から1少ないものであり、<最終>は置き換えられる最終の文字位置です。<先頭>が<最終>と同じ場合には、文字は置き換えられず、参照は<先頭>と<先頭>+1の間に挿入されます。<最終>がテキストオブジェクトにある文字の数よりも大きい場合には、**CT INSERT EXPRESSION**コマンドはテキストオブジェクトの<先頭>から最終の文字まで文字を置き換えます。

引数<式>は値を返す正しい4th Dimension式であるテキストです。<式>は、フィールド、変数、4th Dimension関数、ユーザ定義関数（プロジェクトメソッド）、プラグイン、ステートメントのいずれかへの参照になります。

以下の表は、それぞれの式タイプの例を示しています。

例	式のタイプ
[描画]オブジェクト	フィールド
vCriteria	変数
Current date	4th Dimension関数
GetNum	ユーザ定義関数（プロジェクトメソッド）
CT Count	4D Chart 関数
3 * "こんにちは"	ステートメント

オプション引数の<フォーマット>は、参照用の表示フォーマットです。このオプションは、「フォーマット」ダイアログボックスからフォーマットを選択するのと同じです。フォーマットはその番号またはその名前から参照されます。フォーマットは、「フォーマット」ダイアログボックスのリストに表示される順に番号付けされています。

<フォーマット>が1桁か2桁の文字列の場合には、<フィールド>に適用されたフォーマットはリストからのものです。<フォーマット>が1桁か2桁の文字列ではない場合には、リスト内の各フォーマットのテキスト値と比較されます。リスト内の値のどれかと一致した場合には、そのフォーマットが適用されます。つまり、最初の日付フォーマットは「19」または「Short」のどちらかで参照できるということです。

<フォーマット>がフォーマットのリストにない場合は、カスタム数値フォーマットとして解釈されます。<フォーマット>が参照の結果の値としては不適切である場合には、無効になります。例えば、数値に対して日付フォーマットを使用した場合には、その数値はフォーマットされずに表示されます。

例題

以下の例は、新しいテキストオブジェクトを作成し、それに4th Dimension関数の**Current date**への参照を入れ、Long日付フォーマットを使用してフォーマットします。

```
$ID := CT Draw text (Area ; 0.5 ; 0.5 ; 3.5 ; 1 ; "今日は : ")  
CT INSERT EXPRESSION (Area ; $ID ; 32000 ; 32000 ; "Current date" ; "Long")
```

参照

CT INSERT FIELD

次のコマンドと関数は、「ルーチン」エリアの「Area」テーマ内にあります：

CT AREA TO AREA	CT OPEN DOCUMENT
CT AREA TO FIELD	CT SAVE DOCUMENT
CT FIELD TO AREA	CT New offscreen area
CT Area to picture	CT DELETE OFFSCREEN AREA
CT PICTURE TO AREA	CT GET AREA BOUNDARY
CT NEW DOCUMENT	

このテーマ内のコマンドと関数によって、フォーム、オフスクリーンエリア、ピクチャフィールド上の4D Chartエリア間で情報の転送ができます。

また、上記の「エリア」コマンドで変更や新しいエリアの作成もできます。作業が完了したときには忘れずにオフスクリーンエリアを削除してください。

CT AREA TO AREA

CT AREA TO AREA (ソース ; コピー先 ; コピーコード)

引数	タイプ	説明
ソース	倍長整数	コピー元となる4D Chartエリア
コピー先	倍長整数	コピーの受け取り先となる4D Chartエリア
コピーコード	整数	コピー内容を表すコード 1=設定内容、2=オブジェクト、3=両方

説明

CT AREA TO AREAコマンドは、4D Chartエリアの引数<ソース>の内容を4D Chartエリアの引数<コピー先>の中にコピーします。

転送する内容は、引数<コピーコード>を基にしています。

<コピーコード>が1の場合は、表示オプション等のドキュメント設定が転送されます。

<コピーコード>が2の場合は、<ソース>内のすべてのオブジェクトが<コピー先>に転送されます。

<コピーコード>が3の場合は、オブジェクトとドキュメント設定の両方が<コピー先>に転送されます。

ドキュメント設定は転送されると、<コピー先>のドキュメント設定を置き換えます。オブジェクトが転送されるときには、<コピー先>内のオブジェクトに付加されます。**CT AREA TO AREA**コマンドは、特にオフスクリーンエリアを操作するときに便利です。

例題

以下の例は、4D Chartエリア「SalesChart」の内容を新規オフスクリーンエリアにコピーします。

vOffscreen:= **CT New offscreen area**

CT AREA TO AREA (SalesChart ; vOffscreen ; 3)

参照

CT New offscreen area、CT DELETE OFFSCREEN AREA

CT AREA TO FIELD

CT AREA TO FIELD (エリア ; スコープ ; テーブル ; フィールド ; {保存方法})

引数	タイプ	説明
エリア	倍長整数	4D Chartエリア
スコープ	倍長整数	コマンドのスコープ -2=ドキュメント、-1=すべて 0=選択されたオブジェクト >0=オブジェクトiD
テーブル	整数	テーブル番号
フィールド	整数	フィールド番号
保存方法	整数	引数<エリア>の内容を保存する方法 1=ピクチャのみ、2=データのみ 3=ピクチャとデータ、-1=変更なし

説明

CT AREA TO FIELDコマンドは、引数<エリア>の内容を<テーブル>と<フィールド>で指定されたピクチャフィールドの中にコピーします。<フィールド>はピクチャフィールドにはできません。

CT AREA TO FIELDコマンドは、リレートしているテーブルのフィールドにオブジェクトを格納したいときや特定のオブジェクトだけを格納したいときに便利です。**CT AREA TO FIELD**コマンドは、単にオブジェクトを<フィールド>に割り当てるだけです。<テーブル>のレコードは保存されたままである必要があります。

引数<スコープ>は、コピー内容を制御します。

オプション引数の<保存方法>は、4D Chartエリア内のドキュメントの保存方法を決定します。

<保存方法>が1の場合は、ピクチャ (PICT) だけが保存されます。この設定をすると、オブジェクトを個別に操作することはできなくなります。

<保存方法>が2の場合は、4D Chartエリアのオブジェクトに関連するデータだけが保存されます。イメージは保存されたデータの情報を使用して後で再構築されます。この保存オプションは最速の方法であり、メモリの使用量が最も少ないものです。選択した保存方法に対するメモリが十分ないときには、別の方法を選択できるダイアログボックスが表示されます。

<保存方法>が3の場合は、イメージの再構築に使用されたピクチャと内部データの両方が保存されます。これは、ドキュメントを保存する際の通常の方法です。

例題

以下の例は、<エリア>にオブジェクト用のリレートレコードを作成します。

CREATE RECORD ([Object]) `レコードを作成してオブジェクトを格納する
[Object]Key:=[Chart]Name `リレート値を割り当てる

\$Temp:= **CT Get ID** (Area ; -1 ; 3) `オブジェクトのIDを取得する
CT AREA TO FIELD (Area ; \$Temp ; 3 ; 2 ; 1) `オブジェクトをレコードにコピーする
SAVE RECORD ([Object]) `レコードを保存する

参照

CT FIELD TO AREA

CT FIELD TO AREA

CT FIELD TO AREA (エリア ; テーブル ; フィールド)

引数	タイプ	説明
エリア	倍長整数	4D Chartエリア
テーブル	整数	テーブル番号
フィールド	整数	フィールド番号

説明

CT FIELD TO AREAコマンドは、引数<テーブル>と<フィールド>で指定されたピクチャフィールドに含まれるドキュメントを<エリア>に配置します。

ピクチャ値は、<テーブル>のカレントレコードから取得されます。

<フィールド>はピクチャタイプである必要があります。<フィールド>には以前に保存された4D Chartドキュメントやピクチャが含まれていることもあります。<フィールド>の内容は<エリア>の内容を置き換えます。<フィールド>が空の場合には、このコマンドは何も行いません。

例題

以下の入力フォームのオブジェクトメソッドは、2番目のテーブルの5番目のフィールドに含まれる4D Chartドキュメントを開きます。

If (Form event = On Load)

CT FIELD TO AREA (Area ; 2 ; 5)

End If

参照

CT AREA TO FIELD

CT Area to picture

CT Area to picture (エリア ; スコープ) ピクチャ

引数	タイプ	説明
エリア	倍長整数	4D Chartエリア
スコープ	整数	コマンドのスコープ -2=ドキュメント、-1=すべて、 0=選択されたオブジェクト >0=オブジェクトID
戻り値	ピクチャ	エリア内のオブジェクトの 4th Dimensionピクチャ

説明

CT Area to picture関数は、引数<エリア>にあるオブジェクトの4th Dimensionピクチャを返します。

ピクチャに含まれるオブジェクトは、引数<スコープ>によって制御されます。

<スコープ> が-2の場合は、ドキュメント全体がコピーされます。これには表示オプション等のドキュメント設定も含まれます。

<スコープ> が-1の場合は、ドキュメント設定を除く<エリア>内のすべてのオブジェクトがコピーされます。

<スコープ> が0の場合は、選択されたオブジェクトだけがコピーされます。

<スコープ> が0よりも大きい場合は、それが特定オブジェクトIDと同じである必要があり、そのオブジェクトだけがコピーされます。

例題

以下の例は、新しいオフスクリーンエリアを開いて既存の配列から棒グラフを作成し、グラフをピクチャ変数に格納してから最後にオフスクリーンエリアを削除します。

エリア:= **CT New offscreen area**

vChart:= **CT Chart arrays** (Area ; 2 ; 2 ; aCategory ; aSeries ; aValues)

vPict:= **CT Area to picture** (Area ; vChart)

CT DELETE OFFSCREEN AREA (Area)

参照

CT Get ID、CT PICTURE TO CLIPBOARD、CT Place picture

CT PICTURE TO AREA

CT PICTURE TO AREA (エリア ; ピクチャ)

引数	タイプ	説明
エリア	倍長整数	4D Chartエリア
ピクチャ	ピクチャ	ピクチャ

説明

CT PICTURE TO AREAコマンドは、引数<ピクチャ>に含まれるドキュメントを<エリア>に配置します。

<ピクチャ>は正しい14th Dimensionピクチャ式である必要があります。<エリア>の内容は<ピクチャ>で置き換えられます。<ピクチャ>が空の場合には、このコマンドは何も行いません。

例題

以下のオブジェクトメソッドは、ピクチャフィールドから4D Chartエリアにグラフをコピーできます。

```
$Name:=Request ("ロードするチャート名を入力してください。")
```

```
If (OK=1)
```

```
    QUERY([Chart];[Chart]Lavel:=$Name)
```

```
    If (Records in selection(Chart])>0)
```

```
        CT PICTURE TO AREA (Area ; [Chart]MyChart)
```

```
    End if
```

```
End if
```

参照

CT Area to picture

CT NEW DOCUMENT

CT NEW DOCUMENT (エリア)

引数	タイプ	説明
エリア	倍長整数	4D Chartエリア

説明

CT NEW DOCUMENT コマンドは、引数<エリア>内のドキュメントの内容をクリアします。**CT NEW DOCUMENT** コマンドは確認ダイアログボックスが提示されない以外は、「ファイル」メニューから「新規...」メニューコマンドを選択することと同じです。**CT NEW DOCUMENT** コマンドはすべてのオブジェクトと、ドキュメントサイズやルーラの見盛り指定等のすべてのドキュメント設定をクリアします。

例題

以下の例は、<エリア>内のドキュメントをクリアします。

CT NEW DOCUMENT (Area)

警告：このコマンドを使用すると、<エリア>内の現在のドキュメントは保存されません。現在のドキュメントを保存する場合には、**CT NEW DOCUMENT** コマンドを実行する前に**CT SAVE DOCUMENT** コマンドを実行する必要があります。

参照

CT SAVE DOCUMENT

CT OPEN DOCUMENT

CT OPEN DOCUMENT (エリア ; ドキュメント ; {モード})

引数	タイプ	説明
エリア	倍長整数	4D Chartエリア
ドキュメント	文字列	ドキュメントの名前(パスは最大255バイト)
モード	整数	ドキュメント置き換え、 またはドキュメント追加 0=置き換え、1=ドキュメントに追加する

説明

CT OPEN DOCUMENT コマンドは、引数<ドキュメント>を開き、その内容を<エリア>に配置します。

<ドキュメント>が空の文字列の場合には、**CT OPEN DOCUMENT** コマンドは、ユーザがドキュメントの選択をできる標準「ファイルを開く」ダイアログボックスを表示します。<ドキュメント>に文字列が入っている場合には、指定されたドキュメントを開きます。<ドキュメント>が存在しない場合には、<エリア>の内容は変更されず、**CT Error**関数がシステムエラーコードを返します。

4D Chartはデータベースストラクチャを持つフォルダに<ドキュメント>があることを想定しています。データベースフォルダ以外のドキュメントを開く場合には、完全なパス名を指定してください。パス名に関する詳細は、『4th Dimension ランゲージリファレンス』を参照してください。<ドキュメント>が既に開かれていている場合には、**CT Error**関数がシステムエラーコードを返します。

オプション引数の<モード>は、ドキュメントの開き方を制御します。<モード>は、<ドキュメント>が空の文字列ではなく、かつ4D Chartドキュメントではないときにだけ使用されます。<モード>が0の場合、または指定されていない場合は、<ドキュメント>は<エリア>の内容を置き換えます。<モード>が1の場合には、<ドキュメント>は<エリア>の現在の内容に組み入れられます。

例題

以下の例は、「形態」フィールドの値に基づいて、異なるドキュメントを開きます。

Case of

¥ ([Customer]Type="販売店") `形態が “ 販売店 ” の場合

CT OPEN DOCUMENT (Area ; "販売店") ` “ 販売店 ” ドキュメントを開く

¥ ([Customer]Type="建設業者") `形態が “ 建設 ” の場合

CT OPEN DOCUMENT (Area ; "建設") ` “ 建設 ” ドキュメントを開く

¥ ([Customer]Type="エンドユーザ") `形態が “ エンドユーザ ” の場合

CT OPEN DOCUMENT (Area ; "エンドユーザ") ` “ エンドユーザ ” ドキュメントを開く

End case

参照

CT SAVE DOCUMENT

CT SAVE DOCUMENT

CT SAVE DOCUMENT (エリア ; ドキュメント ; タイプ ; {スコープ})

引数	タイプ	説明
エリア	倍長整数	4D Chartエリア
ドキュメント	テキスト	ドキュメントの名前 (パスを持った)
タイプ	文字列	ドキュメントタイプ
スコープ	倍長整数	コマンドのスコープ 0=全オブジェクト、選択されたオブジェクト

説明

CT SAVE DOCUMENT コマンドは、引数 <エリア> の内容を <ドキュメント> に保存します。

<ドキュメント> が空の文字列の場合は、**CT SAVE DOCUMENT** コマンドは、ドキュメント名、タイプ、スコープをユーザが指定できる標準「ファイル保存」ダイアログボックスを表示します。 <ドキュメント> が空の文字列ではない場合は、**CT SAVE DOCUMENT** コマンドは <タイプ> で <ドキュメント> を保存します。

<ドキュメント> が存在しない場合は、**CT SAVE DOCUMENT** コマンドがそのドキュメントを作成します。 <ドキュメント> が存在する場合には **CT SAVE DOCUMENT** コマンドはそのドキュメントを上書きします。

<タイプ> が空の文字列の場合は、標準の4D Chartドキュメントが作成されます。 PICTとしてドキュメントを保存するには、 <タイプ> が「PICT」である必要があります。

オプション引数の <スコープ> は、 <ドキュメント> に保存するものを制御します。 <ドキュメント> が空文字列ではなく、かつドキュメントをPICTとして保存するときにだけ <スコープ> を使用してください。

デフォルトでは、 <ドキュメント> はデータベース構造を含むフォルダに保存されます。データベースフォルダ以外にドキュメントを保存する場合には、完全なパス名を指定します。パス名に関する詳細は、『4th Dimension ランゲージリファレンス』を参照してください。

例題

以下の例は、4D Chartドキュメントを会社名と年度を名前とするドキュメントとして保存します。

```
$Year := Request ("何年?") `年度を要求する  
If (OK=1) `要求が正当である場合  
    $SaveName := [Company]Company Name+" " + $Year `ドキュメント名を連結する  
    CT SAVE DOCUMENT (Area ; $SaveName ; "") `ドキュメントを保存する  
End if
```

参照

CT OPEN DOCUMENT

CT New offscreen area

CT New offscreen area 倍長整数

引数	タイプ	説明
この関数には、引数はありません。		

戻り値	倍長整数	4D ChartのオフスクリーンエリアのID
-----	------	------------------------

説明

CT NEW offscreen area関数は4D Chartオフスクリーンエリアを作成し、そのエリアのIDを返します。**CT NEW offscreen area**関数から返される値は、4D Chartエリアを必要とする任意の4D Chartコマンドで使用できます。

例題

以下の例は、レコードを検索し、オフスクリーンエリアを作成し、レコードからエリアにドキュメントをコピーしてから、そのエリアを印刷します。

```
QUERY ([Chart];[Chart]Lavel = "サンプル") `レコードを検索する  
$Offscreen := CT New offscreen area `新しいオフスクリーンエリアを作成する  
CT FIELD TO AREA ($Offscreen ; 3 ; 2) `フィールドに格納されたドキュメントをコピーする  
CT PRINT ($Offscreen ; 0) `エリアを印刷する  
CT DELETE OFFSCREEN AREA ($Offscreen) `オフスクリーンエリアの使用をやめる
```

参照

CT DELETE OFFSCREEN AREA、CT AREA TO AREA

CT DELETE OFFSCREEN AREA

CT DELETE OFFSCREEN AREA (エリア)

引数	タイプ	説明
エリア	倍長整数	4D Chartエリア

説明

CT DELETE OFFSCREEN AREAコマンドは、**CT New offscreen area**関数で作成された4D Chartオフスクリーンエリアを廃棄し、使用されたメモリを解放します。

引数<エリア>はフォーム上やウインドウ内のエリアではなくオフスクリーンエリアである必要があります。オフスクリーンエリアの使用を完了したときには常に**CT DELETE OFFSCREEN AREA**コマンドを実行してください。

例題

以下の例は、**CT New offscreen area**の実行と対応する**CT DELETE OFFSCREEN AREA**の実行をペアにする方法を示しています。

```
$NewArea := CT New offscreen area `新しいオフスクリーンエリアを作成する
`ここで何らかの処理を行う
CT DELETE OFFSCREEN AREA ($NewArea) `オフスクリーンエリアを消去する
```

参照

CT AREA TO AREA、CT New offscreen area

CT GET AREA BOUNDARY

CT GET AREA BOUNDARY (エリア ; 境界コード ; 左 ; 上 ; 右 ; 下)

引数	タイプ	説明
エリア	倍長整数	4D Chartエリア
境界コード	整数	境界コード 0=ドキュメント全体の境界、 1=切り取られた境界
左	実数	エリアの左の境界を受け取る
上	実数	エリアの上の境界を受け取る
右	実数	エリアの右の境界を受け取る
下	実数	エリアの下の境界を受け取る

説明

CT GET AREA BOUNDARYコマンドは、引数<左>、<上>、<右>、<下>の各変数に<エリア>矩形の座標を返します。

<境界コード>が0の場合、**CT GET AREA BOUNDARY**コマンドはドキュメント全体の境界を返します。

<境界コード>が1の場合は、**CT GET AREA BOUNDARY**コマンドはフォーム上の4D Chartエリアまたは4D Chartプラグインウインドウの現在のサイズの境界を返します。

例題

以下の例は、既存のチャートエリアで複数の線を組み合わせたジオメトリックオブジェクトを作成し、エリアの境界座標を取得してエリア内のオブジェクトを中央に配置します。

For (\$i ; 0 ; 360 ; 5)

 vLine:= **CT Draw line** (Area ; 50***Cos**(\$i) ; 50***Sin**(\$i) ; 0 ; 0 ; 0)

End for

CT GET AREA BOUNDARY (Area ; 1 ; \$left ; \$top ; \$right ; \$bottom)

CT MOVE (Area ; -1 ; ((\$right-\$left)/2)-50 ; ((\$bottom-\$top)/2)-50)

参照

なし

以下のコマンドと関数は、「ルーチン」エリアの「CHART」テーマ内にあります：

CT Chart arrays	CT Get legend text
CT Chart selection	CT SET LEGEND TEXT
CT Chart data	CT GET REAL SCALE
CT GET CHART FILL ATTRIBUTES	CT SET REAL SCALE
CT SET CHART FILL ATTRIBUTES	CT GET DATE SCALE
CT GET CHART TEXT ATTRIBUTES	CT SET DATE SCALE
CT SET CHART TEXT ATTRIBUTES	CT GET DEPTH
CT GET CHART LINE ATTRIBUTES	CT SET DEPTH
CT SET CHART LINE ATTRIBUTES	CT GET 3D VIEW
CT SHOW GRID LINES	CT SET 3D VIEW
CT GET AXIS ATTRIBUTES	CT GET CHART PART
CT SET AXIS ATTRIBUTES	CT GET CHART OPTIONS
CT GET LABEL ATTRIBUTES	CT SET CHART OPTIONS
CT SET LABEL ATTRIBUTES	CT Get chart type
CT GET TITLE ATTRIBUTES	CT SET CHART TYPE
CT SET TITLE ATTRIBUTES	CT UPDATE CHART
CT GET LEGEND ATTRIBUTES	CT Get chart picture
CT SET LEGEND ATTRIBUTES	CT SET CHART PICTURE
CT EXPLODE PIE	

このテーマのコマンドと関数によって、4D Chartドキュメントにグラフを作成し、そのグラフを操作することができます。

この章で最初に説明する3つの関数を使用すると、データベース内のフィールドに格納されたデータ、または配列に格納されたデータのいずれかから2次元グラフと3次元のグラフを作成できます。

このテーマにあるコマンドに関する詳細例については、第2章の「プログラムでグラフを作成する」を参照してください。

プログラムでグラフを作成する

この節の3つの関数を使用すると、プログラムでグラフを作成することができます。

注：ホットリンクからもグラフをプログラムで作成できます。詳細については第7章の「ホットリンクコマンド」の**CT Subscribe**関数の説明を参照してください。

以下の表は、項目、系列、数値が各関数に渡されると、どのようにデータがグラフ化されるのかを説明しています。

	CT Chart arrays	CT Chart selection	CT Chart data
項目	項目名の配列	指定されたフィールドのレコード	指定されたフィールドのレコード
系列	系列名の配列	指定されたフィールドの名前	指定されたフィールドの名前
数値	数値の配列	指定されたフィールドのレコード	指定されたフィールドのレコード

CT Chart selection関数と**CT Chart data**関数では、系列が指定される方法が違います。

CT Chart selection関数では、系列はフィールド名です。それらのフィールドのデータは、数値軸にプロットされます。

CT Chart data関数では、系列軸用にひとつのフィールドを指定します。系列名はフィールドに格納されたデータから取得されます。次にプロットされる値を含む別のフィールドを指定します。

CT Chart selection関数と**CT Chart data**関数の使用例は、第2章の「データベース内のレコードを使ってグラフを作成する」の節を参照してください。

付録Eには、各軸上にグラフ化できるフィールドタイプのリストがあります。

ユーザは、各関数の引数<タイプ>に指定するグラフタイプによってグラフを2次元にするのか、3次元にするのかを指定します。

CT Chart arrays

CT Chart arrays (エリア；タイプ；サイズ；項目配列；系列配列；数値配列)
数値

引数	タイプ	説明
エリア	倍長整数	4D Chartエリア
タイプ	整数	グラフタイプ（下記の表参照）
サイズ	整数	グラフの初期サイズオプション 1=可変、2=自動-ウインドウ、 3=自動-ドキュメント
項目配列	配列	項目配列
系列配列	配列	系列配列
数値配列	配列	数値配列
戻り値	数値	オブジェクトID数

説明

CT Chart arrays関数は、指定された配列に基づいてグラフを作成し、そのグラフのオブジェクトIDを返します。このコマンドは2次元グラフまたは3次元グラフのどちらを作成するときにも使用できます。

以下の表は、引数<タイプ>のコードを示しています：

コード	チャートタイプ
1	2D 面
2	2D 棒
3	2D ピクチャ
4	2D 線
5	2D 散布図
6	2D 円
7	2D ポーラー
8	2D XY
100	3D 棒
101	3D 線
102	3D 面
103	3D 等高線
104	3D 三角形
105	3D ピン

引数<サイズ>は、グラフが生成されたときにそのグラフがどの程度のスペースを取るのか、ウインドウのサイズ変更をしたときにグラフのサイズはどのように変更するのかを決定します。

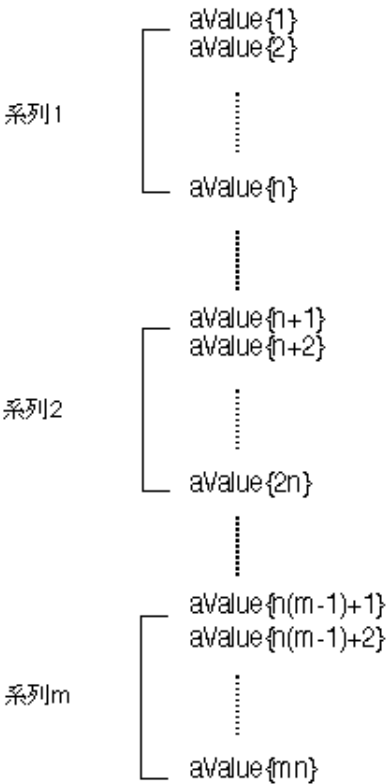
- ・ 1を通した場合（サイズの値） グラフは4D Chartエリアかまたはウインドウいっぱいになります。ハンドルを使って修正するまでこのサイズは保たれます。
- ・ 2を通した場合（ウインドウと連動したサイズ） グラフは4D Chartエリアかまたはブラグインウインドウいっぱいになります。ウインドウサイズを変更した後は、グラフは自動的に変えられます。しかしながら、一度ハンドルを使ってグラフサイズを変更すると、この変更はそれ以上実行されません。
- ・ 3を通した場合（文章と関連したサイズ） グラフは「ページセットアップ」ダイアログボックスで選択したページの次元に合わせて変えられます。ハンドルを使ってグラフサイズを修正するまでこのサイズは保たれます。

<項目配列>には、X軸項目があります。

<系列配列>には、系列が含まれます。2次元グラフでは、系列は項目軸上に表示されません。3次元グラフでは、系列は数値軸上に表示されます。

<数値配列>は、数値軸上でグラフ化されるすべての値を含む1次元の配列です。<項目配列>と<系列配列>の各要素の値が存在するように<数値配列>には値が入っている必要があります。つまり、n項目とm系列がある場合には、<数値配列>にはn*m個の要素があることになります。

以下の図は、＜数値配列＞に入れられるものの順序を示しています。nは項目の合計数を表します。mは系列の合計数を表します。
例えば、以下のデータを参照してください。



学校名 (項目)	年度 (系列)	生徒数 (数値)
千代田中学	1993	1000
千代田中学	1995	1250
千代田中学	1997	800
東京第1中学	1993	600
東京第1中学	1995	975
東京第1中学	1997	1100

aValues

aValues{1}:=1000
aValues{2}:=600
aValues{3}:=1250
aValues{4}:=975
aValues{5}:=800
aValues{6}:=1100

参照
CT Chart selection、CT Chart data

CT Chart selection

CT Chart selection (エリア；タイプ；サイズ；グループ項目；テーブル番号；項目フィールド；系列／数値フィールド) 倍長整数

引数	タイプ	説明
エリア	倍長整数	4D Chartエリア
タイプ	整数	グラフタイプ（下記の表参照）
サイズ	整数	グラフの初期サイズオプション 1=可変、2=自動-ウインドウ 3=自動-ドキュメント
グループ項目	整数	項目データをグループ化する？ 0=なし、1=グループ化
テーブル番号	整数	グラフのテーブル番号
項目フィールド	整数	項目軸上にプロットするフィールドの番号
系列／ 数値フィールド	整数配列	フィールド番号の配列
戻り値	倍長整数	チャートのオブジェクトID

説明

CT Chart selection関数は、引数<テーブル番号>のカレントセクションのグラフを作成します。この関数は、チャートのオブジェクトIDを返します。

以下の表は、引数<タイプ>のコードを示しています：

コード	チャートタイプ
1	2D 面
2	2D 棒
3	2D ピクチャ
4	2D 線
5	2D 散布図
6	2D 円
7	2D ボーラー
8	2D XY
100	3D 棒
101	3D 線
102	3D 面
103	3D 等高線
104	3D 三角形
105	3D ピン

引数<サイズ>は、グラフが生成されたときにそのグラフがどの程度のスペースを取るのか、ウインドウのサイズ変更をしたときにグラフのサイズはどのように変更するのかを決定します。

- ・ 1を通した場合（サイズの値） グラフは4D Chartエリアかまたはウインドウいっぱいになります。ハンドルを使って修正するまでこのサイズは保たれます。
- ・ 2を通した場合（ウインドウと連動したサイズ） グラフは4D Chartエリアかまたはブラグインウインドウいっぱいになります。ウインドウサイズを変更した後は、グラフは自動的に変えられます。しかしながら、一度ハンドルを使ってグラフサイズを変更すると、この変更はそれ以上実行されません。
- ・ 3を通した場合（文章と関連したサイズ） グラフは「ページセットアップ」ダイアログボックスで選択したページの次元に合わせて変えられます。ハンドルを使ってグラフサイズを修正するまでこのサイズは保たれます。

引数<グループ項目>は、項目軸のデータがグループ化されるのかどうかを指定します。<グループ項目>が1の場合には、各項目は一意になり、重複した項目の値があればまとめられます。<グループ項目>が0の場合には、各項目の値は別々にグラフ化されます。

注：系列をグループ化する必要はありません。これは、系列はフィールド名のため一意だからです。

引数<テーブル番号>は、データをグラフ化するテーブルの番号です。テーブルへのポインタをTable関数の引数として渡すことによって、テーブルの番号を検索することができます。

<項目フィールド>は、グラフ化する項目軸上のフィールドの番号です。フィールドへのポインタをField関数の引数として渡すことによってフィールドの番号を検索することができます。

<系列 / 数値フィールド>は系列と数値としてグラフ化するフィールドのフィールド番号配列です。フィールド名は系列になります。フィールドに格納された値は数値軸上でグラフ化されます。

2次元グラフでは、系列は項目軸上に表示されます。3次元グラフでは、系列は数値軸上に表示されます。

参照

CT Chart arrays、CT Chart data

CT Chart data

CT Chart data (エリア ; タイプ ; サイズ ; グループ項目 ; グループ系列 ; テーブル番号 ; 項目フィールド ; 系列フィールド ; 数値フィールド) 倍長整数

引数	タイプ	説明
エリア	倍長整数	4D Chartエリア
タイプ	整数	グラフタイプ (下記の表参照)
サイズ	整数	グラフの初期サイズオプション 1=可変、2=自動-ウインドウ 3=自動-ドキュメント
グループ項目	整数	項目データをグループ化する? 0=なし、1=グループ化
グループ系列	整数	系列データをグループ化する? 0=なし、1=グループ化
テーブル番号	整数	データをグラフ化するテーブルの番号
項目フィールド	整数	項目軸上にプロットするフィールドの番号
系列フィールド	整数	系列としてプロットするフィールドの番号
数値フィールド	整数	数値軸上にプロットするフィールドの番号
戻り値	倍長整数	チャートのオブジェクトID

説明

CT Chart data関数は、引数<テーブル番号>のカレントセレクションのグラフを作成します。この関数はチャートのオブジェクトIDを返します。

以下の表は、引数<タイプ>のコードを示しています：

コード	チャートタイプ
1	2D 面
2	2D 棒
3	2D ピクチャ
4	2D 線
5	2D 散布図
6	2D 円
7	2D ポーラー
8	2D XY
100	3D 棒
101	3D 線
102	3D 面
103	3D 等高線
104	3D 三角形
105	3D ピン

引数<サイズ>は、グラフが生成されたときにそのグラフがどの程度のスペースを取るのか、ウインドウのサイズ変更をしたときにグラフのサイズはどのように変更するのかを決定します。

- ・ 1を通した場合（サイズの値）、グラフは4D Chartエリアかまたはウインドウいっぱいになります。ハンドルを使って修正するまでこのサイズは保たれます。
- ・ 2を通した場合（ウインドウと連動したサイズ）、グラフは4D Chartエリアかまたはブラグインウインドウいっぱいになります。ウインドウサイズを変更した後は、グラフは自動的に変えられます。しかしながら、一度ハンドルを使ってグラフサイズを変更すると、この変更はそれ以上行われません。
- ・ 3を通した場合（文章と関連したサイズ）、グラフは「ページセットアップ」ダイアログボックスで選択したページの次元に合わせて変えられます。ハンドルを使ってグラフサイズを修正するまでこのサイズは保たれます。

引数<グループ項目>は、項目軸のデータがグループ化されるのかどうかを指定します。<グループ項目>が1の場合には、各項目は一意になり、重複した項目の値があればまとめられます。<グループ項目>が0の場合には、各項目の値は別々にグラフ化されます。

引数<グループ系列>は、系列軸上のデータをグループ化するかどうかを指定します。<グループ系列>が1の場合には、各シリーズは一意になり、重複したシリーズの値があればまとめられます。<グループ系列>が0の場合には、各シリーズの値は別々にグラフ化されます。

引数<テーブル番号>は、データをグラフ化するテーブルの番号です。テーブルへのポインタを**Table**関数の引数として渡すことによって、テーブルの番号を検索することができます。

引数<系列フィールド>は、グラフ化する系列軸上のフィールド番号です。2次元グラフでは、系列は項目軸上に表示されます。3次元グラフでは、系列は系列軸上に表示されます。

引数<数値フィールド>は、グラフ化する数値軸上のフィールド番号です。

フィールドへのポインタを**Field**関数の引数として渡すと、フィールドの番号を検索することができます。

参照

CT Chart arrays、CT Chart selection

グラフ属性を変更する

この章の後半で説明するコマンドと関数は、既に作成されたグラフを変更するときに使用します。

これらのコマンドと関数の<オブジェクト>引数には、この章の前半で説明したチャート作成関数から戻される倍長整数が必要です。

CT GET CHART FILL ATTRIBUTES

CT GET CHART FILL ATTRIBUTES (エリア；オブジェクト；タイプ；特定部分；パターン；カラー)

引数	タイプ	説明
エリア	倍長整数	4D Chartエリア
オブジェクト	倍長整数	オブジェクトID
タイプ	整数	属性を取得するオブジェクトのタイプ
特定部分	倍長整数	属性を取得するオブジェクトの特定の部分
パターン	整数	パターン番号（1から36）を受け取る -1=変更なし
カラー	倍長整数	カラーの値を受け取る -1=変更なし

説明

CT GET CHART FILL ATTRIBUTESコマンドは、引数<エリア>、<オブジェクト>、<タイプ>、<特定部分>で指定されたチャートオブジェクトの塗りつぶし属性を取得します。

<タイプ>と<特定部分>は、属性を取得するグラフの部分を指定します。<タイプ>と<特定部分>のコードは、付録Dに掲載されています。

引数<パターン>は、パターンパレット上で利用可能なパターンのひとつを指定する1から36までの整数です。<パターン>のコードは、付録Dに掲載されています。

引数<カラー>は、オブジェクトの色を指定する倍長整数です。**CT Index to color**関数や**CT RGB to color**関数を使用することで<カラー>の値を指定できます。これらの関数の詳細については、第9章の「ユーティリティコマンド」を参照してください。

例題

以下の例は、\$ChartIDに指定されたチャートの最初の系列の塗りつぶし属性を\$Pattern変数と\$Color変数に返します。

CT GET CHART FILL ATTRIBUTES (Area；\$ChartID；8；100；\$Pattern；\$Color)

参照

CT SET CHART FILL ATTRIBUTES

注：描画ツールや描画関数を使用してドキュメントに追加されたオブジェクトの属性を取得するには、第4章で説明している「オブジェクトコマンド」を使用してください。

CT SET CHART FILL ATTRIBUTES

CT SET CHART FILL ATTRIBUTES (エリア；オブジェクト；タイプ；特定部分；パターン；カラー)

引数	タイプ	説明
エリア	倍長整数	4D Chartエリア
オブジェクト	倍長整数	オブジェクトID
タイプ	整数	属性を取得するオブジェクトのタイプ
特定部分	倍長整数	属性を取得するオブジェクトの特定の部分
パターン	整数	パターン番号（1から36）を受け取る -1=変更なし
カラー	倍長整数	カラーの値を受け取る -1=変更なし

説明

CT SET CHART FILL ATTRIBUTESコマンドは、引数<エリア>、<オブジェクト>、<タイプ>、<特定部分>で指定されたチャートオブジェクトの塗りつぶし属性を取得します。

<タイプ>と<特定部分>は、属性を取得するグラフの部分を指定します。<タイプ>と<特定部分>のコードは、付録Dに掲載されています。

引数<パターン>は、パターンパレット上で利用可能なパターンの1つを指定する1から36までの整数です。<パターン>のコードは、付録Dに掲載されています。

引数<カラー>は、オブジェクトの色を指定する倍長整数です。CT Index to color関数やCT RGB to color関数を使用することで<カラー>の値を指定できます。これらの関数の詳細については、第9章の「ユーティリティコマンド」を参照してください。

例題

以下の例は、\$ChartIDに指定されたチャートの最初の系列の塗りつぶし属性を変更します。色は赤に、パターンは塗りつぶしに設定されます。

CT SET CHART FILL ATTRIBUTES (Area; \$ChartID; 8 ; 100 ; 3; CT Index to color(4))

参照

CT GET CHART FILL ATTRIBUTES

注：描画ツールや描画関数を使用してドキュメントに追加されたオブジェクトの属性を取得するには、第4章で説明している「オブジェクトコマンド」を使用してください。

CT GET CHART TEXT ATTRIBUTES

CT GET CHART TEXT ATTRIBUTES (エリア；オブジェクト；タイプ；特定部分；フォントID；フォントサイズ；スタイル；カラー)

引数	タイプ	説明
エリア	倍長整数	4D Chartエリア
オブジェクト	倍長整数	オブジェクトID
タイプ	整数	属性を取得するオブジェクトのタイプ
特定部分	倍長整数	属性を取得するオブジェクトの特定の部分
フォントID	整数	フォントIDを受け取る
フォントサイズ	整数	フォントサイズを受け取る
スタイル	整数	フォントスタイルを受け取る
カラー	倍長整数	カラーの値を受け取る

説明

CT GET CHART TEXT ATTRIBUTES コマンドは、引数<エリア>、<オブジェクト>、<タイプ>、<特定部分>で指定されたチャートテキストの属性を取得します。

<タイプ>と<特定部分>は、属性を取得するグラフの部分を指定します。<タイプ>と<特定部分>のコードは、付録Dに掲載されています。

引数<フォントID>は、システム内にあるフォントのIDです。フォントのID番号は**CT Font number**関数を使用することによって取得できます。これらの関数の詳細については、第9章の「ユーティリティコマンド」を参照してください。

引数<フォントサイズ>は、反転表示されたテキストやテキストオブジェクトのポイント単位のサイズです。

引数<スタイル>は、複数のスタイル番号の加算の結果を混合した番号です。以下の表はスタイル番号を示しています：

値	スタイル
0	標準
1	太字（ボールド）
2	斜体（イタリック）

- 4 下線（アンダーライン）
- 8 アウトライン
- 16 シャドウ

引数<カラー>は、オブジェクトの色を指定する倍長整数です。**CT Index to color**関数や**CT RGB to color**関数を使用することで<カラー>の値を指定できます。これらの関数の詳細については、第9章の「ユーティリティコマンド」を参照してください。

例題

以下の例は、項目軸のテキスト属性がカスタマイズされたかどうかを確認し、カスタマイズされている場合にはリセットします。

```
CT GET CHART TEXT ATTRIBUTES (Area ; $ChartID ; 8 ; 100 ; $FontID ; $FontSize  
                                  ; $Style ; $Color)  
If ((($FontSize#10) | ($FontID# CT Font number ("Osaka"))) |  
      ($Color# CT Index to color (10)))  
      CT SET CHART TEXT ATTRIBUTES (Area;$ChartID;5; 0; CT Font number ("Osaka")  
                                  ; 10 ; 1 ; CT Index to color (10))  
End if
```

参照

CT SET CHART TEXT ATTRIBUTES

注：テキストツールや**CT Draw text**関数を使用してドキュメントに追加されたオブジェクトの属性を取得するには、第4章で説明している「オブジェクトコマンド」を使用してください。

CT SET CHART TEXT ATTRIBUTES

CT SET CHART TEXT ATTRIBUTES (エリア；オブジェクト；タイプ；特定部分；フォントID；フォントサイズ；スタイル；カラー)

引数	タイプ	説明
エリア	倍長整数	4D Chartエリア
オブジェクト	倍長整数	オブジェクトID
タイプ	整数	属性を取得するオブジェクトのタイプ
特定部分	倍長整数	属性を取得するオブジェクトの特定の部分
フォントID	整数	フォントID、-1=変更なし
フォントサイズ	整数	フォントサイズ、-1=変更なし
スタイル	整数	フォントスタイル、-1=変更なし
カラー	倍長整数	カラーの値、-1=変更なし

説明

CT SET CHART TEXT ATTRIBUTES コマンドは、引数 < エリア >、< オブジェクト >、< タイプ >、< 特定部分 > で指定されたチャートテキストの属性を取得します。

< タイプ > と < 特定部分 > は、属性を取得するグラフの部分を指定します。< タイプ > と < 特定部分 > のコードは、付録Dに掲載されています。

引数 < フォントID > は、システム内にあるフォントのIDです。フォントのID番号は **CT Font number** 関数を使用することによって取得できます。これらの関数の詳細については、第9章の「ユーティリティコマンド」を参照してください。

引数 < フォントサイズ > は、反転表示されたテキストやテキストオブジェクトのポイント単位のサイズです。

引数 < スタイル > は、複数のスタイル番号の加算の結果を混合した番号です。以下の表はスタイル番号を示しています：

値	スタイル
0	標準
1	太字（ボールド）
2	斜体（イタリック）
4	下線（アンダーライン）
8	アウトライン
16	シャドウ

引数 < カラー > は、オブジェクトの色を指定する倍長整数です。**CT Index to color** 関数や **CT RGB to color** 関数を使用することで < カラー > の値を指定できます。これらの関数の詳細については、第9章の「ユーティリティコマンド」を参照してください。

例題

CT GET CHART TEXT ATTRIBUTES コマンドの例を参照してください。

参照

CT GET CHART TEXT ATTRIBUTES

注：テキストツールや **CT Draw text** 関数を使用してドキュメントに追加されたオブジェクトの属性を取得するには、第4章で説明している「オブジェクトコマンド」を使用してください。

CT GET CHART LINE ATTRIBUTES

CT GET CHART LINE ATTRIBUTES (エリア ; オブジェクト ; タイプ ; 特定部分 ; パターン ; カラー ; 線幅)

引数	タイプ	説明
エリア	倍長整数	4D Chartエリア
オブジェクト	倍長整数	オブジェクトID
タイプ	整数	属性を取得するオブジェクトのタイプ
特定部分	倍長整数	属性を取得するオブジェクトの特定の部分
パターン	整数	パターン番号 (1から36) を受け取る
カラー	倍長整数	カラーの値 (0以上) を受け取る
線幅	実数	ポイント単位で線の太さを受け取る (0以上)

説明

CT GET CHART LINE ATTRIBUTESコマンドは、引数<パターン>、<カラー>、<線幅>で指定された線の属性を返します。

属性を検索する対象の線は、引数<エリア>、<オブジェクト>、<タイプ>、<特定部分>によって指定されます。

<タイプ>と<特定部分>は、属性を取得するグラフの部分を指定します。<タイプ>と<特定部分>のコードは、付録Dに掲載されています。

引数<パターン>は、パターンパレット上で利用可能なパターンの1つを指定する1から36までの整数です。<パターン>のコードは、付録Dに掲載されています。

引数<カラー>は、オブジェクトの色を指定する倍長整数です。CT Index to color関数やCT RGB to color関数を使用することで<カラー>の値を指定できます。
引数<線幅>は、ポイント単位で計測される線の太さです。

注：線ツールやCT Draw line関数を使用してドキュメントに追加された線の属性を取得するには、第7章で説明している「オブジェクトコマンド」を使用してください

例題

以下の例は、\$ChartIDに指定されたチャートの矩形の線属性のプロットを\$Pattern、\$Color、\$Line変数に返します。

CT GET CHART LINE ATTRIBUTES (Area ; \$ChartID ; 1 ; 0 ; \$Pattern ; \$Color ; \$Line)

参照

CT SET CHART LINE ATTRIBUTES

CT SET CHART LINE ATTRIBUTES

CT SET CHART LINE ATTRIBUTES (エリア ; オブジェクト ; タイプ ; 特定部分 ; パターン ; カラー ; 線幅)

引数	タイプ	説明
エリア	倍長整数	4D Chartエリア
オブジェクト	倍長整数	オブジェクトID
タイプ	整数	属性を取得するオブジェクトのタイプ
特定部分	倍長整数	属性を取得するオブジェクトの特定の部分
パターン	整数	パターン番号 (1から36) -1=変更なし
カラー	倍長整数	カラーの値 (0以上) -1=変更なし
線幅	実数	ポイント単位で線の太さ (0以上) -1=変更なし

説明

CT SET CHART LINE ATTRIBUTESコマンドは、引数<パターン>、<カラー>、<線幅>で指定された線の属性を設定します。

属性を検索する対象の線は、引数<エリア>、<オブジェクト>、<タイプ>、<特定部分>によって指定されます。

<タイプ>と<特定部分>は、属性を取得するグラフの部分を指定します。<タイプ>と<特定部分>のコードは、付録Dに掲載されています。

引数<パターン>は、パターンパレット上で利用可能なパターンの1つを指定する1から36までの整数です。<パターン>のコードは、付録Dに掲載されています。

引数<カラー>は、オブジェクトの色を指定する倍長整数です。**CT Index to color**関数や**CT RGB to color**関数を使用することで<カラー>の値を指定できます。これらの関数の詳細については、第9章の「ユーティリティコマンド」を参照してください。

引数<線幅>は、ポイント単位で計測される線の太さです。

注：線ツールや**CT Draw line**関数を使用してドキュメントに追加された線の属性を取得するには、第4章で説明している「オブジェクトコマンド」を使用してください。

例題

以下の例は、\$ChartIDに指定されたチャートに対して、矩形の線属性のプロットを変更します。色は緑に変更され、線の幅は3ポイントに、パターンは塗りつぶしに設定されます。

CT SET CHART LINE ATTRIBUTES (Area ; \$ChartID; 1; 0; 3;**CT Index to color** (10); 3)

参照

CT GET CHART LINE ATTRIBUTES

CT SET FILL ATTRIBUTES

CT SET FILL ATTRIBUTES (エリア ; オブジェクト ; パターン ; カラー)

引数	タイプ	説明
エリア	倍長整数	4D Chartエリア
オブジェクト	倍長整数配列	オブジェクトIDの数のリスト
パターン	整数配列	パターンの数のリスト
カラー	倍長整数配列	カラーの値のリスト

説明

CT SET FILL ATTRIBUTESコマンドは、オブジェクトのリストに適用されることを除いて**CT SET CHART FILL ATTRIBUTES**コマンドと同様に実行します。引数<オブジェクト>は要求に応じた属性を設定したいオブジェクトのID数のリストで構成されている倍長整数配列を渡します。

引数<パターン>と<カラー>は対応する属性で構成された配列です。

詳しい説明は**CT SET CHART FILL ATTRIBUTES**コマンドを参照して下さい。

例題

この例は、4D Chartエリア名が「vct」で構成されているフォームを持つものです。特定の線とパターンを同時に100個四角を作成する例です。**CT SET CHART LINE ATTRIBUTES**コマンドと**CT SET CHART FILL ATTRIBUTES**コマンドを100回呼び出さずに1回の呼び出しで四角の属性を定義して配列を埋めます。

フォームのメゾットです：

If (Form event = On load)

ARRAY LONGINT(\$ids ; 100)

ARRAY INTEGER(\$pat ; 100)

ARRAY INTEGER(\$pat2 ; 100)

ARRAY LONGINT(\$color ; 100)

ARRAY LONGINT(\$color2 ; 100)

ARRAY LONGINT(\$ln ; 100) `or **ARRAY REAL** (\$ln ; 100)

CT SELECT (vct ; -1 ; 1)

CT DO COMMAND (vct ; 2006)

End if

For (\$i ; 1 ; 100)

\$ids{\$i}:=**CT Draw rectangle** (vCT ; 40+(\$i*10); 40 ; 40+(((\$i+1)*10)-2 ; 60 ; 0)

\$pat{\$i}:=1+(\$i%30)

\$pat2{\$i}:=1+(\$i%15)

\$color{\$i}:=**CT Index to color** (\$i)

\$color2{\$i}:=**CT Index to color** (100-\$i)

\$ln{\$i}:=1+\$i%4

End for

CT SET FILL ATTRIBUTES (vct ; \$ids ; \$pat ; \$color)

CT SET LINE ATTRIBUTES (vct ; \$ids ; \$pat2 ; \$color2 ; \$ln)

End if

参照

CT SET CHART FILL ATTRIBUTES、CT SET CHART LINE ATTRIBUTES、CT SET
LINE ATTRIBUTES

CT SET LINE ATTRIBUTES

CT SET LINE ATTRIBUTES (エリア ; オブジェクト ; パターン ; カラー ; 線幅)

引数	タイプ	説明
エリア	倍長整数	4D Chartエリア
オブジェクト	倍長整数配列	オブジェクトID数のリスト
パターン	整数配列	パターン数のリスト
カラー	倍長整数配列	カラーの値のリスト
線幅	実数配列	線の幅のリスト (ポイント単位)

説明

CT SET LINE ATTRIBUTESコマンドは、オブジェクトのリストが適用されることを除いて**CT SET CHART LINE ATTRIBUTES**コマンドの様に実行します。引数<オブジェクト>は、属性を設定したいオブジェクトのID数のリストで構成されている倍長整数配列を渡します。

CT SET LINE ATTRIBUTESコマンドはエリアやオブジェクトによって指定した線の属性を設定します。引数<パターン>、<カラー>、<線幅>は対応する属性で構成された配列です。

詳しい説明は**CT SET CHART LINE ATTRIBUTES**コマンドを参照してください。

例題

CT SET FILL ATTRIBUTESコマンドの例題を参照してください。

参照

CT SET CHART LINE ATTRIBUTES、CT SET FILL ATTRIBUTES

CT GET VALUE ATTRIBUTES

CT GET VALUE ATTRIBUTES (エリア ; オブジェクト ; 位置 ; 表示 ; 方向 ; フォーマット)

引数	タイプ	説明
エリア	倍長整数	4D Chartエリア
オブジェクト	倍長整数	オブジェクトID
位置	整数	位置の値を受け取る -1=変更なし 0=なし 1=外部の上 2=外部の下 3=内部の上 4=内部の中央 5=内部の下 6=軸の上 8=左の上 9=右の上 10=下
表示	整数	タイプの情報を受け取る 1=値 2=パーセンテージ 3=項目 4=値とパーセンテージ 5=項目とパーセンテージ
方向	整数	方向の値を受け取る -1=変更なし 0=標準 1=垂直 2=右の上 3=左の上
フォーマット	英数	フォーマットの値

説明

CT GET VALUE ATTRIBUTES コマンドはエリアやオブジェクトで指定したグラフの値の属性を返します。

< 位置 > は位置の値を指定した整数です。

< 表示 > は値として表示している情報のタイプを指定した整数です。

< 方向 > は方向の値を指定した整数です。

参照
なし

CT SET VALUE ATTRIBUTES

CT SET VALUE ATTRIBUTES (エリア ; オブジェクト ; 位置 ; 表示 ; 方向 ; フォーマット)

引数	タイプ	説明
エリア	倍長整数	4D Chartエリア
オブジェクト	倍長整数	オブジェクトID
位置	整数	位置の値 -1=変更なし 0=なし 1=外部の上 2=外部の下 3=内部の上 4=内部の中央 5=内部の下 6=軸の上 8=左の上 9=右の上 10=下
表示	整数	表示するタイプの情報 1=値 2=パーセンテージ 3=項目 4=値とパーセンテージ 5=項目とパーセンテージ
方向	整数	方向の値 -1=変更なし 0=標準 1=垂直 2=右の上 3=左の上
フォーマット	英数	フォーマットの値

説明

CT SET VALUE ATTRIBUTES コマンドはエリアやオブジェクトで指定したグラフの値の属性を修正します。

< 位置 > は位置の値を指定した整数です。

< 表示 > は値として表示している情報のタイプを指定した整数です。

< 方向 > は方向の値を指定した整数です。

参照

なし

CT SHOW GRID LINES

CT SHOW GRID LINES (エリア ; オブジェクト ; 軸 ; グリッド ; 表示)

引数	タイプ	説明
エリア	倍長整数	4D Chartエリア
オブジェクト	倍長整数	オブジェクトID
軸	整数	目盛線の表示 / 非表示に対する軸 0=項目、1=系列、2=数値
グリッド	整数	表示 / 非表示対象のグリッド線 0=補助、1=主
表示	整数	グリッド線の非表示 / 表示 0=非表示、1=表示

説明

CT SHOW GRID LINESコマンドは、引数<エリア>、<オブジェクト>、<軸>で指定される軸に対する主グリッド線または補助グリッド線あるいはその両方を表示または非表示にします。

引数<グリッド>によって、コマンドによってどちらのグリッド線が影響を受けるのかを指定できます。主グリッド線は主増分の間隔になり、補助グリッド線は補助増分の間隔になります。

引数<表示>によって、指定したグリッド線を見えるようにするかどうかを指定できます。

例題

以下の例は、\$ChartIDに指定されたチャート用の数値軸の補助グリッド線を表示します。

CT SHOW GRID LINES (Area ; \$ChartID ; 2 ; 0 ; 1)

参照

CT GET CHART LINE ATTRIBUTES、CT SET CHART LINE ATTRIBUTES

CT GET AXIS ATTRIBUTES

CT GET AXIS ATTRIBUTES (エリア; オブジェクト; 軸; 補助目盛; 主目盛; 位置; 反転)

引数	タイプ	説明
エリア	倍長整数	4D Chartエリア
オブジェクト	倍長整数	オブジェクトID
軸	整数	グラフ軸 0=項目、1=系列、2=数値
補助目盛	整数	補助目盛りマークの種類を受け取る 0=なし、1=内側、2=外側、3=交差
主目盛	整数	目盛線の表示 / 非表示に対する軸 0=なし、1=内側、2=外側、3=交差
位置	実数	軸の位置を受け取る (軸が配置される位置)
反転	整数	逆順を受け取る 0=反転なし、1=反転

説明

CT GET AXIS ATTRIBUTES コマンドは、引数 < 補助目盛 >、< 主目盛 >、< 位置 >、< 反転 > の変数に < エリア >、< オブジェクト >、< 軸 > で指定されたグラフ軸の属性を返します。このコマンドは、2次元グラフだけに適用されます。

< 補助目盛 > と < 主目盛 > とは、< エリア > 上の目盛りのことです。目盛りオプションは、各軸用の「軸」ダイアログボックスに設定するか、**CT SET AXIS ATTRIBUTES** コマンドを使用して設定できます。

< 位置 > とは、軸が別の軸と交差するときの数値のことです。< 軸 > が横軸の場合には、< 位置 > は縦軸の一番下からの増分数になります。< 軸 > が縦軸の場合には、< 位置 > は横軸の左側からの増分数になります。

引数 < 反転 > が1の場合には、軸上にグラフ化される項目の順序は逆になります。< 反転 > が0の場合には、項目は本来の順序のままになります。

例題

以下の例は、\$ChartIDに指定されたチャートの項目軸属性を\$MajorTick、\$MinorTick、\$Location、\$Reverse変数に返します。

```
$ChartID:= CT Get ID (Area ; 0 ; 1)
CT GET AXIS ATTRIBUTES (Area ; $ChartID ; 0 ; $MinorTick ; $MajorTick ; $Location ; $Reverse)
```

参照

CT SET AXIS ATTRIBUTES

CT SET AXIS ATTRIBUTES

CT SET AXIS ATTRIBUTES (エリア ; オブジェクト ; 軸 ; 補助目盛 ; 主目盛 ; 位置 ; 反転)

引数	タイプ	説明
エリア	倍長整数	4D Chartエリア
オブジェクト	倍長整数	オブジェクトID
軸	整数	グラフ軸 0=項目、1=系列、2=数値
補助目盛	整数	補助目盛りマークの種類を受け取る 0=なし、1=内側、2=外側、3=交差
主目盛	整数	目盛線の表示 / 非表示に対する軸 0=なし、1=内側、2=外側、3=交差
位置	実数	軸の位置を受け取る (軸が配置される位置)
反転	整数	逆順を受け取る 0=反転なし、1=反転、-1=変更なし

説明

CT SET AXIS ATTRIBUTES コマンドは、引数 < 補助目盛 >、< 主目盛 >、< 位置 >、< 反転 > の変数に < エリア >、< オブジェクト >、< 軸 > で指定されたグラフ軸の属性を設定します。このコマンドは、2次元グラフだけに適用されます。

< 補助目盛 > と < 主目盛 > とは、< エリア > 上の目盛りのことです。

< 位置 > とは、軸が別の軸と交差するときの数値のことです。< 軸 > が横軸の場合には、< 位置 > は縦軸の一番下からの増分数になります。< 軸 > が縦軸の場合には、< 位置 > は横軸の左側からの増分数になります。

引数 < 反転 > が1の場合には、軸上にグラフ化される項目の順序は逆になります。< 反転 > が0の場合には、項目は本来の順序のままになります。

例題

以下の例は、\$ChartIDに指定されたチャートの項目軸属性を変更します。

```
$ChartID:= CT Get ID (Area ; 0 ; 1)
CT SET AXIS ATTRIBUTES (Area ; $ChartID ; 0 ; 0 ; 3 ; 160 ; 1)
```

参照

CT GET AXIS ATTRIBUTES

CT GET LABEL ATTRIBUTES

CT GET LABEL ATTRIBUTES (エリア ; オブジェクト ; 軸 ; 位置 ; 方向 ; フォーマット {; 頻度})

引数	タイプ	説明
エリア	倍長整数	4D Chartエリア
オブジェクト	倍長整数	オブジェクトID
軸	整数	属性を受け取るための軸 0=項目、1=系列、2=数値
位置	整数	ラベルの位置を受け取る 0=なし、1=上、2=左、3=下、4=右
方向	整数	ラベルの方向を受け取る 0=通常、1=垂直、2=右回転、3=左回転 4=互い違い、5=ワードラップ
フォーマット	文字列	ラベルフォーマットを受け取る
頻度	整数	ラベル表示を受け取る

説明

CT GET LABEL ATTRIBUTES コマンドは、引数<エリア>、<オブジェクト>、<軸>で指定された軸ラベルの属性を<位置>、<方向>、<フォーマット>変数に返します。

引数<位置>は、グラフに相対的な軸のラベル位置です。

引数<方向>は、各ラベルの方向です。各方向オプションを示す表については、『4th Dimension ユーザリファレンス』を参照してください。

引数<フォーマット>は、ラベルテキストの表示フォーマットです。表示フォーマットが「通常」のときには<フォーマット>変数に空の文字列("") が返ります。表示フォーマットで 사용되는特殊文字に関する詳細は、『4th Dimension デザインリファレンス』を参照してください。

オプションの引数<頻度>はラベルが表示する系列や軸の項目の頻度を受け取ります。この引数はラベルが表示されたグラフのみの項目 / 系列の数を返します。デフォルトでは、この引数は1が返ります(すべてのラベルが表示されている場合)。軸が軸の値の場合は、頻度は-32000が返ります。引数<頻度>の設定の詳しい説明は**CT SET LABEL ATTRIBUTES**コマンドの記述を参照してください。

例題

以下の例は、\$ChartIDに指定されたチャートの項目軸ラベル属性を\$Position、\$Orient、\$Format変数に返します。

CT GET LABEL ATTRIBUTES (Area ; \$ChartID ; 0 ; \$Position ; \$Orient ; \$Format)

参照

CT SET LABEL ATTRIBUTES、CT GET CHART TEXT ATTRIBUTES

注：軸ラベルのテキスト属性を取得するには、**CT GET CHART TEXT ATTRIBUTES**コマンドを使用してください。

CT SET LABEL ATTRIBUTES

CT SET LABEL ATTRIBUTES (エリア；オブジェクト；軸；位置；方向；フォーマット {; 頻度})

引数	タイプ	説明
エリア	倍長整数	4D Chartエリア
オブジェクト	倍長整数	オブジェクトID
軸	整数	属性を受け取るための軸 0=項目、1=系列、2=数値
位置	整数	ラベルの位置を受け取る 0=なし、1=上、2=左、3=下、4=右
方向	整数	ラベルの方向を受け取る 0=通常、1=垂直、2=右回転、3=左回転 4=互い違い、5=ワードラップ
フォーマット	文字列	ラベルフォーマットを受け取る
頻度	整数	ラベル表示の頻度（1-255）

説明

CT SET LABEL ATTRIBUTESコマンドは、引数<エリア>、<オブジェクト>、<軸>で指定された軸ラベルの属性を<位置>、<方向>、<フォーマット>変数に設定します。

引数<位置>は、グラフに相対的な軸のラベル位置です。

引数<方向>は、各ラベルの方向です。各方向オプションを示す表については、『4th Dimension ユーザリファレンス』を参照してください。

引数<フォーマット>は、ラベルテキストの表示フォーマットです。表示フォーマットが「通常」のときには<フォーマット>変数に空の文字列（"）が返ります。表示フォーマットで使用する特殊文字に関する詳細は、『4th Dimension デザインリファレンス』を参照してください。

引数＜頻度＞に-1が設定された場合は4D Chartは自動的にグラフの次元により頻度の表示ラベルを設定します。

例題

以下の例は、\$ChartIDに指定されるチャートの項目軸ラベル属性を変更します。ラベル位置は下、フォーマットは通常、方向は右回転に設定されます。

CT SET LABEL ATTRIBUTES (Area ; \$ChartID ; 0 ; 3 ; 2 : "")

参照

CT GET LABEL ATTRIBUTES、CT SET CHART TEXT ATTRIBUTES

注：軸ラベルのテキスト属性を取得するには、**CT SET CHART TEXT ATTRIBUTES**コマンドを使用してください。

CT GET TITLE ATTRIBUTES

CT GET TITLE ATTRIBUTES (エリア ; オブジェクト ; 軸 ; 位置 ; 方向 ; タイトル)

引数	タイプ	説明
エリア	倍長整数	4D Chartエリア
オブジェクト	倍長整数	オブジェクトID
軸	整数	属性をを設定するための軸 0=項目、1=系列、2=数値
位置	整数	タイトルの位置 -1=変更なし、0=なし、1=上 2=左、3=下、4=右
方向	整数	タイトルの方向 -1=変更なし、0=通常、1=垂直 2=右回転、3=左回転、
タイトル	文字列	タイトルのテキスト

説明

CT GET TITLE ATTRIBUTES コマンドは、引数<エリア>、<オブジェクト>、<軸>で指定された軸タイトルの位置、方向、テキストを返します。

引数<位置>は、グラフに相対的なタイトルの位置です。

引数<方向>は、タイトルの方向です。

引数<タイトル>は、タイトルのテキストです。タイトルの長さは255文字以内です。

例題

以下の例は、\$Position、\$Orient、\$Title変数に項目軸タイトル属性を返します。

CT GET TITLE ATTRIBUTES (Area ; \$ChartID ; 0 ; \$Position ; \$Orient ; \$Title)

参照

CT SET TITLE ATTRIBUTES、CT GET CHART TEXT ATTRIBUTES

注：タイトルのテキスト属性を取得するには、**CT GET CHART TEXT ATTRIBUTES** コマンドを使用してください。

CT SET TITLE ATTRIBUTES

CT SET TITLE ATTRIBUTES (エリア ; オブジェクト; 軸 ; 位置 ; 方向 ; タイトル)

引数	タイプ	説明
エリア	倍長整数	4D Chartエリア
オブジェクト	倍長整数	オブジェクトID
軸	整数	属性をを設定するための軸 0=項目、1=系列、2=数値
位置	整数	タイトルの位置 -1=変更なし、0=なし、1=上 2=左、3=下、4=右
方向	整数	タイトルの方向 -1=変更なし、0=通常、1=垂直、 2=右回転、3=左回転
タイトル	文字列	タイトルのテキスト

説明

CT SET TITLE ATTRIBUTESコマンドは、引数<エリア>、<オブジェクト>、<軸>で指定された軸タイトルの位置、方向、テキストを設定します。

引数<位置>は、グラフに相対的なタイトルの位置です。

引数<方向>は、タイトルの方向です。

引数<タイトル>は、タイトルのテキストです。タイトルの長さは255文字以内です。

例題

以下の例は、数値軸タイトルのテキスト、位置、方向を設定します。

CT SET TITLE ATTRIBUTES (Area ; \$ChartID ; 2 ; 2 ; 3; "総雨量")

参照

CT GET TITLE ATTRIBUTES、CT SET CHART TEXT ATTRIBUTES

注：タイトルのテキスト属性を取得するには、**CT SET CHART TEXT ATTRIBUTES**コマンドを使用してください。

CT GET LEGEND ATTRIBUTES

CT GET LEGEND ATTRIBUTES (エリア；オブジェクト；表示；方向；逆順；反転；位置；水平オフセット；垂直オフセット)

引数	タイプ	説明
エリア	倍長整数	4D Chartエリア
オブジェクト	倍長整数	オブジェクトID
表示	整数	凡例を表示するか？ 0=表示しない、1=表示する
方向	整数	凡例内の系列の方向を受け取る 0=水平、1=垂直
逆順	整数	順番を逆にするか？ 0=逆順にしない、1=逆順にする
反転	整数	キーとテキストは逆になっているか？ 0=反転しない、1=反転する
位置	整数	位置コードを受け取る
水平オフセット	整数	プロットの左側からの水平方向の オフセットをポイント単位で受け取る
垂直オフセット	整数	プロットの上側からの垂直方向の オフセットをポイント単位で受け取る

説明

CT GET LEGEND ATTRIBUTES コマンドは、引数<表示>、<方向>、<逆順>、<反転>、<位置>、<水平オフセット>、<垂直オフセット>の変数に引数<エリア>、<オブジェクト>で指定された凡例の属性を返します。

引数<表示>は、凡例が表示されるかどうかを指定します。

引数<方向>は、系列が凡例内で縦方向に表示されるか、横方向に表示されるのかを指定します。

以下の図は、縦方向の凡例と横方向の凡例を示しています。



引数<逆順>は、凡例内の系列の順序が逆順になるかどうかを指定します。

引数<反転>は、系列の一意的なパターンと色を説明する系列ラベルとキーが逆になるかどうかを指定します。デフォルトでは、キーがラベルの左側に表示されます。

以下の表は、引数<位置>のコードを示しています：

コード	位置
-1	変更なし
0	凡例の位置は、組み込み位置オプションの1つではありません。
1	左上
2	左下
3	右上
4	右下
5	左
6	右
7	上
8	下

引数<水平オフセット>と<垂直オフセット>は、<位置>が組み込み凡例位置にはないとき(<位置>≠0)に使用されます。<水平オフセット>は、グラフの左側から凡例の左側までをポイント単位で表します。<垂直オフセット>は、グラフの上の端から凡例の上の端までをポイント単位で表します。

例題

以下の例は、\$ChartIDに指定されたチャートの凡例テキスト属性を取得します。

CT GET LEGEND ATTRIBUTES (Area ; \$ChartID ; \$Display ; \$Orient ; \$ReverseO ; \$ReverseK ; \$Location ; \$HorizOff ; \$VertOff)

参照

CT SET LEGEND ATTRIBUTES、CT Get legend text、CT SET LEGEND TEXT、CT GET CHART TEXT ATTRIBUTES

注：凡例テキストのテキスト属性を取得するには、**CT GET CHART TEXT ATTRIBUTES** コマンドを使用してください。

CT SET LEGEND ATTRIBUTES

CT SET LEGEND ATTRIBUTES (エリア；オブジェクト；表示；方向；逆順；反転；位置；水平オフセット；垂直オフセット)

引数	タイプ	説明
エリア	倍長整数	4D Chartエリア
オブジェクト	倍長整数	オブジェクトID
表示	整数	凡例を表示するか？ 0=表示しない、1=表示する
方向	整数	凡例内の系列の方向 0=水平、1=垂直
逆順	整数	順番を逆にするか？ 0=逆順にしない、1=逆順にする、-1=変更なし
反転	整数	キーとテキストは逆になっているか？ 0=反転しない、1=反転する
位置	整数	位置コード
水平オフセット	整数	位置=0のときのプロットの左側からの 水平方向のオフセットをポイント単位
垂直オフセット	整数	位置=0のときのプロットの上側からの 垂直方向のオフセットをポイント単位

説明

CT SET LEGEND ATTRIBUTES コマンドは、引数<表示>、<方向>、<逆順>、<反転>、<位置>、<水平オフセット>、<垂直オフセット>の変数に引数<エリア>、<オブジェクト>で指定された凡例の属性を設定します。

引数<表示>は、凡例が表示されるかどうかを指定します。

引数<方向>は、系列が凡例内で縦方向に表示されるか、横方向に表示されるのかを指定します。以下の図は、縦方向の凡例と横方向の凡例を示しています。



引数<逆順>は、凡例内の系列の順序が逆順になるかどうかを指定します。

引数<反転>は、系列の一意的なパターンと色を説明する系列ラベルとキーが逆になるかどうかを指定します。デフォルトでは、キーがラベルの左側に表示されます。

以下の表は、引数<位置>のコードを示しています：

コード	位置
-1	変更なし
0	凡例の位置は、組み込み位置オプションの1つではありません。
1	左上
2	左下
3	右上
4	右下
5	左
6	右
7	上
8	下

引数<水平オフセット>と<垂直オフセット>は、<位置>が組み込み凡例位置にはないとき(<位置>≠0)に使用されます。<水平オフセット>は、グラフの左側から凡例の左側までをポイント単位で表します。<垂直オフセット>は、グラフの上の端から凡例の上の端までをポイント単位で表します。

例題

以下の例は、グラフの上端中央に凡例を表示します。。

CT SET LEGEND ATTRIBUTES (Area ; \$ChartID ;1 ; 0 ; 0 ;0 ; 7 ; 0 ; 0)

参照

CT GET LEGEND ATTRIBUTES、CT Get legend text、CT SET LEGEND TEXT、CT SET CHART TEXT ATTRIBUTES

注：凡例テキストのテキスト属性を取得するには、**CT SET CHART TEXT ATTRIBUTES** コマンドを使用してください。

CT Get legend text

CT Get legend text (エリア ; オブジェクト ; 凡例項目) テキスト

引数	タイプ	説明
エリア	倍長整数	4D Chartエリア
オブジェクト	倍長整数	オブジェクトID
凡例項目	整数	凡例項目番号
戻り値	テキスト	指定された凡例項目のテキスト

説明

CT Get legend text関数は、指定された凡例項目にテキストを返します。

引数<凡例項目>は、凡例内での系列の番号（あるいは、円グラフでの項目）です。ただし、凡例が逆順になった場合には、<凡例項目>は逆順ではなく正順を反映します。

例題

以下の例は、\$ChartIDに指定されたチャート内の最初の系列の凡例テキストを返します。

\$Text:= **CT Get legend text** (Area ; \$ChartID ; 1)

参照

CT SET LEGEND TEXT、CT GET LEGEND ATTRIBUTES、CT SET LEGEND ATTRIBUTES

CT SET LEGEND TEXT

CT SET LEGEND TEXT(エリア ; オブジェクト ; 凡例項目 ; 凡例テキスト)

引数	タイプ	説明
エリア	倍長整数	4D Chartエリア
オブジェクト	倍長整数	オブジェクトID
凡例項目	整数	凡例項目番号
凡例テキスト	テキスト	凡例項目のテキスト

説明

CT SET LEGEND TEXT コマンドは、指定された凡例項目にテキストを設定します。

引数 < 凡例項目 > は、凡例内での系列の番号（あるいは、円グラフでの項目）です。ただし、凡例が逆順になった場合には、< 凡例項目 > は逆順ではなく正順を反映します。

例題

以下の例は、\$ChartIDに指定されたチャートの凡例テキストを変更します。

```
ARRAY STRING(20 ; aLegend ; 3)
```

```
aLegend{1}:="売上"
```

```
aLegend{2}:="マーケティング"
```

```
aLegend{3}:="エンジニアリング"
```

```
For ($i ; 1 ; 3)
```

```
    CT SET LEGEND TEXT (Area ; $ChartID ; $i;aLegend{$i})
```

```
End for
```

参照

CT Get legend text、CT GET LEGEND ATTRIBUTES、CT SET LEGEND ATTRIBUTES

CT GET REAL SCALE

CT GET REAL SCALE(エリア；オブジェクト；最小自動；最大自動；主増分自動；補助増分自動；最小；最大；主増分；補助増分)

引数	タイプ	説明
エリア	倍長整数	4D Chartエリア
オブジェクト	倍長整数	オブジェクトID
最小自動	整数	デフォルトの最小値を使用しているか？ 0=使用しない、1=使用する
最大自動	整数	デフォルトの最大値を使用しているか？ 0=使用しない、1=使用する
主増分自動	整数	デフォルトの主増分を使用しているか？ 0=使用しない、1=使用する
補助増分自動	整数	デフォルトの補助増分を使用しているか？ 0=使用しない、1=使用する
最小	実数	最小値を受け取る
最大	実数	最大値を受け取る
主増分	実数	主増分を受け取る
補助増分	実数	補助増分を受け取る

説明

CT GET REAL SCALEコマンドは、デフォルト値が使用されるのかどうか、数値軸目盛用に設定されている補助値が何であるのかを返します。**CT GET REAL SCALE**コマンドは、値が実数、整数、または倍長整数のときに使用されます。

引数＜最小自動＞と＜最大自動＞は、グラフがデフォルトの最小値と最大値を現在使用しているかどうかを示します。

引数＜主増分自動＞と＜補助増分自動＞は、グラフがデフォルトの主増分と補助増分を現在使用しているかどうかを示します。

引数＜最小＞と＜最大＞は、「軸」ダイアログボックスでユーザが設定するか、または設計者が**CT SET REAL SCALE**コマンドを使用するかによって設定される最小値と最大値です。

引数＜主増分＞と＜補助増分＞は、「軸」ダイアログボックスでユーザが設定するか、または設計者が**CT SET REAL SCALE**コマンドを使用するかによって設定される主増分と補助増分です。

例題

以下の例は、\$ChartIDに指定されたチャートの目盛りデータを返します。

CT GET REAL SCALE (Area ; \$ChartID ; \$MinA ; \$MaxA ; \$MajA ; \$MinA ; \$Minimum ; \$Maximum ; \$MajorInc ; \$MinorInc)

参照

CT SET REAL SCALE、CT GET DATE SCALE、CT SET DATE SCALE

CT SET REAL SCALE

CT SET REAL SCALE(エリア ; オブジェクト; 最小自動 ; 最大自動 ; 主増分自動 ; 補助増分自動 ; 最小 ; 最大 ; 主増分 ; 補助増分)

引数	タイプ	説明
エリア	倍長整数	4D Chartエリア
オブジェクト	倍長整数	オブジェクトID
最小自動	整数	デフォルトの最小値を使用しているか？ -1=変更なし、0=使用しない、1=使用する
最大自動	整数	デフォルトの最大値を使用しているか？ -1=変更なし、0=使用しない、1=使用する
主増分自動	整数	デフォルトの主増分を使用しているか？ -1=変更なし、0=使用しない、1=使用する
補助増分自動	整数	デフォルトの補助増分を使用しているか？ -1=変更なし、0=使用しない、1=使用する
最小	実数	最小値
最大	実数	最大値
主増分	実数	主増分
補助増分	実数	補助増分

説明

CT SET REAL SCALEコマンドは、デフォルト値が使用されるのかどうか、数値軸目盛りに設定されている補助値が何であるのかを設定します。**CT SET REAL SCALE**コマンドは、値が実数、整数、または倍長整数のときに使用されます。

引数<最小自動>と<最大自動>は、グラフがデフォルトの最小値と最大値を現在使用しているかどうかを示します。

引数<主増分自動>と<補助増分自動>は、グラフがデフォルトの主増分と補助増分を現在使用しているかどうかを示します。

引数<最小>と<最大>は、代替最小値と代替最大値です。

引数<主増分>と<補助増分>は、代替主増分と代替補助増分です。

例題

以下の例は、配列からチャートを生成し、目盛り値を設定します。

```
$ChartID:= CT Chart arrays (Area ; 2 ; 1 ; aCategories ; aSeries ; aValues)  
CT SET REAL SCALE (Area ; $ChartID ; 0 ; 0 ; 0 ; 0 ; -100 ; 300 ; 100 ; 20)
```

参照

CT GET REAL SCALE、CT GET DATE SCALE、CT SET DATE SCALE

CT GET X REAL SCALE

CT GET X REAL SCALE(エリア；オブジェクト；最小自動；最大自動；主増分自動；補助増分自動；最小；最大；主増分；補助増分)

引数	タイプ	説明
エリア	倍長整数	4D Chartエリア
オブジェクト	倍長整数	オブジェクトID
最小自動	整数	デフォルトの最小値を使用しているか？ 0=使用しない、1=使用する
最大自動	整数	デフォルトの最大値を使用しているか？ 0=使用しない、1=使用する
主増分自動	整数	デフォルトの主増分を使用しているか？ 0=使用しない、1=使用する
補助増分自動	整数	デフォルトの補助増分を使用しているか？ 0=使用しない、1=使用する
最小	実数	最小値を受け取る
最大	実数	最大値を受け取る
主増分	実数	主増分を受け取る
補助増分	実数	補助増分を受け取る

説明

CT GET X REAL SCALEコマンドは、デフォルト値が使用されるのか、XYチャートでX軸目盛用に設定されている補助値が何であるのかを返します。グラフタイプと同じ軸の値（Z軸）では**CT GET X REAL SCALE**コマンドは、値が実数、整数、または倍長整数のときに使用されます。

引数<最小自動>と<最大自動>は、グラフがデフォルトの最小値と最大値を現在使用しているかどうかを示します。

引数<主増分自動>と<補助増分自動>は、グラフがデフォルトの主増分と補助増分を現在使用しているかどうかを示します。

引数<最小>と<最大>は、「軸」ダイアログボックスでユーザが設定するか、または設計者が**CT SET X REAL SCALE**コマンドを使用するかによって設定される最小値と最大値です。

引数<主増分>と<補助増分>は、「軸」ダイアログボックスでユーザが設定するか、または設計者が**CT SET X REAL SCALE**コマンドを使用するかによって設定される主増分と補助増分です。

例題

以下の例は、\$ChartIDに指定されたチャートの目盛りデータを返します。

```
CT GET X REAL SCALE (Area ; $ChartID ; $MinA ; $MaxA ; $MajA ; $MinA ; $Minimum ;  
$Maximum ; $MajorInc ; $MinorInc)
```

参照

CT GET DATE SCALE、CT SET DATE SCALE、CT SET REAL SCALE

CT SET X REAL SCALE

CT SET X REAL SCAL(エリア ; オブジェクト ; 最小自動 ; 最大自動 ; 主増分自動 ; 補助増分自動 ; 最小 ; 最大 ; 主増分 ; 補助増分)

引数	タイプ	説明
エリア	倍長整数	4D Chartエリア
オブジェクト	倍長整数	オブジェクトID
最小自動	整数	デフォルトの最小値を使用しているか？ -1=変更なし、0=使用しない、1=使用する
最大自動	整数	デフォルトの最大値を使用しているか？ -1=変更なし、0=使用しない、1=使用する
主増分自動	整数	デフォルトの主増分を使用しているか？ -1=変更なし、0=使用しない、1=使用する
補助増分自動	整数	デフォルトの補助増分を使用しているか？ -1=変更なし、0=使用しない、1=使用する
最小	実数	最小値
最大	実数	最大値
主増分	実数	主増分
補助増分	実数	補助増分

説明

CT X SET REAL SCALEコマンドは、デフォルト値が使用されるのか、XYチャートでX軸目盛用に設定されている補助値が何であるのかを設定します。グラフタイプと同じ軸の値（Z軸）では**CT X SET REAL SCALE**コマンドは、値が実数、整数、または倍長整数のときに使用されます。

引数＜最小自動＞と＜最大自動＞は、グラフがデフォルトの最小値と最大値を現在使用しているかどうかを示します。

引数＜主増分自動＞と＜補助増分自動＞は、グラフがデフォルトの主増分と補助増分を現在使用しているかどうかを示します。

引数＜最小＞と＜最大＞は、代替最小値と代替最大値です。

引数＜主増分＞と＜補助増分＞は、代替主増分と代替補助増分です。

例題

以下の例は、配列からチャートを生成し、目盛り値を設定します。

```
$ChartID:=CT Chart arrays (Area ; 2 ; 1 ; aCategories ; aSeries ; aValues)
CT SET X REAL SCALE (Area ; $ChartID ; 0 ; 0 ; 0 ; 0 ; -100 ; 300 ; 100 ; 20)
```

参照

CT GET REAL SCALE、CT GET DATE SCALE、CT SET DATE SCALE

CT GET DATE SCALE

CT GET DATE SCALE(エリア；オブジェクト；最小自動；最大自動；主増分自動；補助増分自動；最小；最大；主増分タイプ；主増分；補助増分タイプ；補助増分)

引数	タイプ	説明
エリア	倍長整数	4D Chartエリア
オブジェクト	倍長整数	オブジェクトID
最小自動	整数	デフォルトの最小値を使用しているか？ 0=使用しない、1=使用する
最大自動	整数	デフォルトの最大値を使用しているか？ 0=使用しない、1=使用する
主増分自動	整数	デフォルトの主増分を使用しているか？ 0=使用しない、1=使用する
補助増分自動	整数	デフォルトの補助増分を使用しているか？ 0=使用しない、1=使用する
最小	日付	最小値を受け取る
最大	日付	最大値を受け取る
主増分タイプ	整数	主増分タイプはなにか？ 1=日、2=週、3=月、4=年
主増分	整数	主増分を受け取る
補助増分タイプ	整数	補助増分を受け取る 1=日、2=週、3=月、4=年
補助増分	整数	補助増分を受け取る

説明

CT GET DATE SCALEコマンドは、デフォルト値が使用されるのかどうか、数値軸目盛り用に設定されている補助値が何であるのかを返します。**CT GET DATE SCALE**コマンドは、値が日付のときに使われます。

引数＜最小自動＞と＜最大自動＞は、グラフがデフォルトの最小値と最大値を現在使用しているかどうかを示します。

引数＜主増分自動＞と＜補助増分自動＞は、グラフがデフォルトの主増分と補助増分を現在使用しているかどうかを示します。

引数<最小>と<最大>は、「軸」ダイアログボックスでユーザが設定するか、または設計者が**CT SET DATE SCALE**コマンドを使用するかによって設定される最小値と最大値です。

引数<主増分タイプ>と<補助増分タイプ>は、<主増分>と<補助増分>が指定される単位用のコードです。

引数<主増分>と<補助増分>は、「軸」ダイアログボックスでユーザが設定するか、または設計者が**CT SET DATE SCALE**コマンドを使用するかによって設定される主増分と補助増分です。

例題

以下の例は、\$ChartIDに指定されたチャートの目盛りデータを返します。

CT GET DATE SCALE (Area ; \$ChartID ; \$MinA ; \$MaxA ; \$MajA ; \$MinA ; \$Minimum ; \$Maximum ; \$MajType ; \$MajorInc ; \$MinType ; \$MinorInc)

参照

CT SET DATE SCALE、CT GET REAL SCALE、CT SET REAL SCALE

CT SET DATE SCALE

CT SET DATE SCALE(エリア；オブジェクト；最小自動；最大自動；主増分自動；補助増分自動；最小；最大；主増分タイプ；主増分；補助増分タイプ；補助増分)

引数	タイプ	説明
エリア	倍長整数	4D Chartエリア
オブジェクト	倍長整数	オブジェクトID
最小自動	整数	デフォルトの最小値を使用しているか？ -1=変更なし、0=使用しない、1=使用する
最大自動	整数	デフォルトの最大値を使用しているか？ -1=変更なし、0=使用しない、1=使用する
主増分自動	整数	デフォルトの主増分を使用しているか？ -1=変更なし、0=使用しない、1=使用する
補助増分自動	整数	デフォルトの補助増分を使用しているか？ 0=使用しない、1=使用する
最小	日付	最小値
最大	日付	最大値
主増分タイプ	整数	主増分タイプはなにか？ 1=日、2=週、3=月、4=年
主増分	整数	主増分
補助増分タイプ	整数	主増分 1=日、2=週、3=月、4=年
補助増分	整数	補助増分

説明

CT SET DATE SCALEコマンドは、デフォルト値を使用するかどうかの指定、数値軸目盛り用の代替値の設定に使用します。**CT SET DATE SCALE**コマンドは、値が日付のときに使われます。

引数＜最小自動＞と＜最大自動＞は、グラフがデフォルトの最小値と最大値を現在使用しているかどうかを示します。

引数＜主増分自動＞と＜補助増分自動＞は、デフォルトの最小値と最大値を使用するかどうかを示します。

引数＜最小＞と＜最大＞は、代替最小値と代替最大値です。

引数＜主増分タイプ＞と＜補助増分タイプ＞は、＜主増分＞と＜補助増分＞が指定される単位用のコードです。

引数＜主増分＞と＜補助増分＞は、代替主増分と代替補助増分です。

例題

以下の例は、データベースからチャートを作成し、目盛り値を設定します。

ARRAY INTEGER (aYFields ; 2)

aYFields{1}:=2

aYFields{2}:=3

\$ChartID:= **CT Chart selection** (Area ; 2 ; 1 ; 1 ; **Table** (->[Customer]));

Field (->[Customer]Customer Type) ; aYFields)

CT SET DATE SCALE (Area ; \$ChartID ; 0 ; 0 ; 0 ; 0 ; 0 ; !95.01.01!;!97.06.30!;4;1;3;1)

参照

CT GET DATE SCALE、CT GET REAL SCALE、CT SET REAL SCALE

CT GET X DATE SCALE

CT GET X DATE SCALE(エリア;オブジェクト;最小自動;最大自動;主増分自動;
補助増分自動;最小;最大;主増分タイプ;主増分;補助増分タイプ;補助増分)

引数	タイプ	説明
エリア	倍長整数	4D Chartエリア
オブジェクト	倍長整数	オブジェクトID
最小自動	整数	デフォルトの最小値を使用しているか？ 0=使用しない、1=使用する
最大自動	整数	デフォルトの最大値を使用しているか？ 0=使用しない、1=使用する
主増分自動	整数	デフォルトの主増分を使用しているか？ 0=使用しない、1=使用する
補助増分自動	整数	デフォルトの補助増分を使用しているか？ 0=使用しない、1=使用する
最小	日付	最小値を受け取る
最大	日付	最大値を受け取る
主増分タイプ	整数	主増分タイプはなにか？ 1=日、2=週、3=月、4=年
主増分	整数	主増分を受け取る
補助増分タイプ	整数	主増分を受け取る 1=日、2=週、3=月、4=年
補助増分	整数	補助増分を受け取る

説明

CT GET X DATE SCALEコマンドは、デフォルト値が使用されるのかどうか、XYチャートのX軸目盛り用に設定されている補助値が何であるのかを返します。同じチャートタイプの値軸（Z軸）での**CT GET X DATE SCALE**コマンドは、値が日付のときに使われます。

引数＜最小自動＞と＜最大自動＞は、グラフがデフォルトの最小値と最大値を現在使用しているかどうかを示します。

引数＜主増分自動＞と＜補助増分自動＞は、グラフがデフォルトの主増分と補助増分を現在使用しているかどうかを示します。

引数＜最小＞と＜最大＞は、「軸」ダイアログボックスでユーザが設定するか、または設計者が**CT SET X DATE SCALE**コマンドを使用するかによって設定される最小値と最大値です。

引数＜主増分タイプ＞と＜補助増分タイプ＞は、＜主増分＞と＜補助増分＞が指定される単位用のコードです。

引数<主増分>と<補助増分>は、「軸」ダイアログボックスでユーザが設定するか、または設計者が**CT SET X DATE SCALE**コマンドを使用するかによって設定される主増分と補助増分です。

参照

CT GET DATE SCALE、CT SET DATE SCALE、CT SET X DATE SCALE

CT SET X DATE SCALE

CT SET X DATE SCALE(エリア;オブジェクト;最小自動;最大自動;主増分自動;補助増分自動;最小;最大;主増分タイプ;主増分;補助増分タイプ;補助増分)

引数	タイプ	説明
エリア	倍長整数	4D Chartエリア
オブジェクト	倍長整数	オブジェクトID
最小自動	整数	デフォルトの最小値を使用しているか？ -1=変更なし、0=使用しない、1=使用する
最大自動	整数	デフォルトの最大値を使用しているか？ -1=変更なし、0=使用しない、1=使用する
主増分自動	整数	デフォルトの主増分を使用しているか？ -1=変更なし、0=使用しない、1=使用する
補助増分自動	整数	デフォルトの補助増分を使用しているか？ -1=変更なし、0=使用しない、1=使用する
最小	日付	最小値
最大	日付	最大値
主増分タイプ	整数	主増分タイプはなにか？ -1=変更なし、1=日、2=週、3=月、4=年
主増分	整数	主増分
補助増分タイプ	整数	主増分 -1=変更なし、1=日、2=週、3=月、4=年
補助増分	整数	補助増分

説明

CT SET X DATE SCALEコマンドは、デフォルト値が使用されるのかどうか、XYチャートのX軸目盛り用の代替値の設定に使用します。同じチャートタイプの値軸（Z軸）での**CT GET X DATE SCALE**コマンドは、値が日付のときに使われます。

引数<最小自動>と<最大自動>は、グラフがデフォルトの最小値と最大値を現在使用しているかどうかを示します。

引数<主増分自動>と<補助増分自動>は、デフォルトの最小値と最大値を使用するかどうかを示します。

引数<最小>と<最大>は、代替最小値と代替最大値です。

引数<主増分タイプ>と<補助増分タイプ>は、<主増分>と<補助増分>が指定される単位用のコードです。

引数<主増分>と<補助増分>は、代替主増分と代替補助増分です。

参照

CT GET DATE SCALE、CT GET REAL SCALE、CT GET X DATE SCALE、CT GET X REAL SCALE、CT SET DATE SCALE、CT SET REAL SCALE、CT SET X REAL SCALE.

CT GET DEPTH

CT GET DEPTH (エリア; オブジェクト; 水平オフセット; 垂直オフセット)

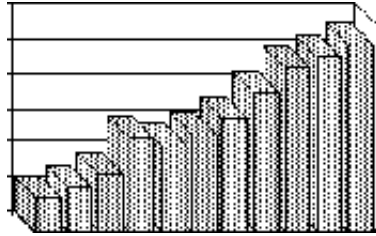
引数	タイプ	説明
エリア	倍長整数	4D Chartエリア
オブジェクト	倍長整数	オブジェクトID
水平オフセット	整数	ポイント単位で横方向のオフセットを受け取る（-32000よりも大きい必要がある）
垂直オフセット	整数	ポイント単位で縦方向のオフセットを受け取る（-32000よりも大きい必要がある）

説明

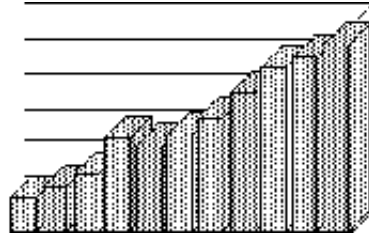
CT GET DEPTHコマンドは、引数<エリア>、<オブジェクト>で指定されたグラフの横方向と縦方向のオフセット（奥行き）を設定します。このコマンドは、2次元グラフだけで有効です。

引数<水平オフセット>は、ポイント単位で測定した横方向のオフセットです。正の値はオフセットが右方向になることを示し、負の値はオフセットが左方向になることを示します。

水平オフセット=5、垂直オフセット=5

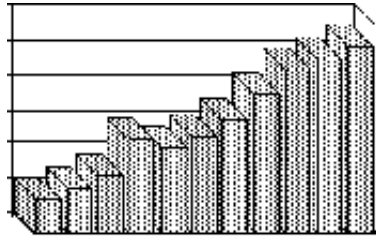


水平オフセット=5、垂直オフセット=-5

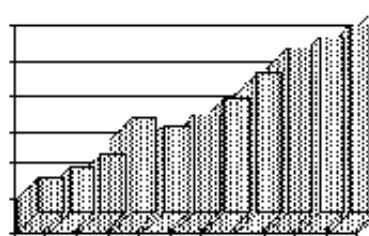


引数<垂直オフセット>は、ポイント単位で測定した縦方向のオフセットです。正の値はX軸から奥に入る距離を示し、負の値はX軸から前に入る距離を示します。

水平オフセット=5、垂直オフセット=5



水平オフセット=5、垂直オフセット=-5



水平または垂直オフセットをゼロで設定するには次元で3D効果を取り除きます。

例題

以下の例は、\$ChartIDに指定されたチャートの奥行きをチェックし、ユーザによって変更されていなかった場合には奥行きを設定します。

```
CT GET DEPTH (Area ; $ChartID ; $Horiz ; $Vert)
If ($Horiz=0) & ($Vert=0)
    CT SET DEPTH (Area ; $ChartID ; 10 ; 10)
End if
```

参照

CT SET DEPTH

CT SET DEPTH

CT SET DEPTH (エリア; オブジェクト; 水平オフセット; 垂直オフセット)

引数	タイプ	説明
エリア	倍長整数	4D Chartエリア
オブジェクト	倍長整数	オブジェクトID
水平オフセット	整数	ポイント単位で横方向のオフセットを受け取る（-32000よりも大きい必要がある）
垂直オフセット	整数	ポイント単位で縦方向のオフセットを受け取る（-32000よりも大きい必要がある）

説明

CT SET DEPTHコマンドは、引数<エリア>、<オブジェクト>で指定されたグラフの横方向と縦方向のオフセット（奥行き）を設定します。このコマンドは、2次元グラフだけで有効です。

引数<水平オフセット>は、ポイント単位で測定した横方向のオフセットです。正の値はオフセットが右方向になることを示し、負の値はオフセットが左方向になることを示します。

引数<垂直オフセット>は、ポイント単位で測定した縦方向のオフセットです。正の値はX軸から奥に入る距離を示し、負の値はX軸から前に入る距離を示します。

水平または垂直オフセットをゼロで設定するには次元で3D効果を取り除きます。

横方向と縦方向の奥行きの実例については、**CT GET DEPTH**コマンドを参照してください。

例題

CT GET DEPTHコマンドの例を参照してください。

参照

CT GET DEPTH

CT GET 3D VIEW

CT GET 3D VIEW (エリア ; オブジェクト ; 回転 ; 仰角)

引数	タイプ	説明
エリア	倍長整数	4D Chartエリア
オブジェクト	倍長整数	オブジェクトID
回転	実数	度数単位で回転を受け取る（0から90まで）
仰角	実数	度数単位で仰角を受け取る（0から90まで）

説明

CT GET 3D VIEWコマンドは、引数<エリア>と<オブジェクト>で指定されたグラフの回転と仰角を返します。このコマンドは、3次元グラフだけで有効です。

引数<回転>は、Z軸を中心としたグラフの回転です。

引数<仰角>は、X軸を中心としたグラフの回転です。

例題

以下の例は、\$ChartIDに指定されたチャートの回転と仰角を\$Rotationと\$Elevation変数に返します。

CT GET 3D VIEW (Area ; \$ChartID ; \$Rotation ; \$Elevation)

参照

CT SET 3D VIEW

CT SET 3D VIEW

CT SET 3D VIEW (エリア ; オブジェクト ; 回転 ; 仰角)

引数	タイプ	説明
エリア	倍長整数	4D Chartエリア
オブジェクト	倍長整数	オブジェクトID
回転	実数	度数単位の回転（0から90まで、 それ以外の値のは何も行わない）
仰角	実数	度数単位の仰角（0から90まで、 それ以外の値のは何も行わない）

説明

CT SET 3D VIEWコマンドは、引数<エリア>と<オブジェクト>で指定されたグラフの回転と仰角を設定します。このコマンドは、3次元グラフだけで有効です。

引数<回転>は、Z軸を中心としたグラフの回転です。

引数<仰角>は、X軸を中心としたグラフの回転です。

例題

以下の例は、\$ChartIDに指定されているチャートの回転と仰角を30度に設定します。

CT SET 3D VIEW (Area ; \$ChartID ; 30 ; 30)

参照

CT GET 3D VIEW

CT GET CHART PART

CT GET CHART PART (エリア ; オブジェクト ; タイプ ; 特定部分)

引数	タイプ	説明
エリア	倍長整数	4D Chartエリア
オブジェクト	倍長整数	オブジェクトID
タイプ	整数	エリアで選択されたオブジェクトのタイプを受け取る
工特定部分	倍長整数	選択されたオブジェクトの特定の部分を受け取る

説明

CT GET CHART PARTコマンドは、引数<エリア>と<オブジェクト>で指定されたグラフで現在選択されているチャートオブジェクトのコードを<タイプ>と<特定部分>変数に返します。

引数<タイプ>と<特定部分>は、ユーザが選択しているグラフの部分を示します。<タイプ>と<特定部分>のコードは、付録Dに掲載されています。

例題

以下の例は、選択された系列用の部分コードを取得し、その系列の塗りつぶしパターンを無地、塗りつぶしカラーを緑に設定します。

```
CT GET CHART PART (Area ; $ChartID ; $Type ; $Specifics)
If ($Type=8) `それは系列か？
    CT SET CHART FILL ATTRIBUTES (Area ; $ChartID ; $Type ; $Specifics ;3;
        CT Index to color (10))
End if
```

参照

なし

CT GET CHART OPTIONS

CT GET CHART OPTIONS (エリア ; オブジェクト ; オプション)

引数	タイプ	説明
エリア	倍長整数	4D Chartエリア
オブジェクト	倍長整数	オブジェクトID
オプション	整数配列	オプションコードを受け取るための変数を含む配列

説明

CT GET CHART OPTIONS コマンドは、選択されたグラフのオプションを返します。これらのオプションは、各チャートタイプに対して「オプション」ダイアログボックスでユーザが設定できるオプションと同じです。

各グラフタイプのコードについては、付録Dを参照してください。

例題

以下の例は、\$ChartIDに指定されたチャートのオプションをOptionsに返します。

ARRAY INTEGER (aOptions ; 0)

CT GET CHART OPTIONS (Area ; \$ChartID ; aOptions)

参照

CT SET CHART OPTIONS

CT SET CHART OPTIONS

CT SET CHART OPTIONS (エリア ; オブジェクト ; オプション)

引数	タイプ	説明
エリア	倍長整数	4D Chartエリア
オブジェクト	倍長整数	オブジェクトID
オプション	整数配列	オプションコードを含む配列

説明

CT SET CHART OPTIONSコマンドは、選択されたグラフのオプションを設定します。これらのオプションは、各チャートタイプに対して「オプション」ダイアログボックスでユーザが設定できるオプションと同じです。

各グラフタイプのコードについては、付録Dを参照してください。

例題

以下の例は、\$ChartIDで指定されたカラムチャートのチャートオプションを横方向、スタック比例、100パーセントオーバーラップ、25パーセントのギャップに設定します。

ARRAY INTEGER (aOptions ; 4)

aOptions{1}:=1

aOptions{2}:=2

aOptions{3}:=100

aOptions{4}:=25

CT SET CHART OPTIONS (Area ; \$ChartID ; aOptions)

参照

CT GET CHART OPTIONS

CT Get chart type

CT Get chart type (エリア ; オブジェクト) 整数

引数	タイプ	説明
エリア	倍長整数	4D Chartエリア
オブジェクト	倍長整数	オブジェクトID
戻り値	整数	チャートタイプ

説明

CT Get chart type関数は、引数<エリア>と<オブジェクト>で指定されたチャートのタイプを返します。

以下の表は、チャートタイプのコードです：

コード	チャートタイプ
1	2D 面
2	2D 棒
3	2D ピクチャ
4	2D 線
5	2D 散布図
6	2D 円
7	2D ボーラー
8	2DXY
100	3D 棒
101	3D 線
102	3D 面
103	3D 等高線
104	3D 三角形
105	3D ピン

例題

以下の例では、**CT Get chart type**関数は\$ChartIDに指定されているチャートのチャートタイプを取得するために使用されます。カラムチャートではない場合には、**CT SET CHART TYPE**コマンドはチャートをカラムチャートに変更します。

```
If (CT Get chart type (Area ; $ChartID)#2)
  CT SET CHART TYPE (Area ; $ChartID ; 2)
End if
```

参照

CT SET CHART TYPE

CT SET CHART TYPE

CT SET CHART TYPE (エリア ; オブジェクト ; タイプ)

引数	タイプ	説明
エリア	倍長整数	4D Chartエリア
オブジェクト	倍長整数	オブジェクトID
タイプ	整数	チャートタイプ

説明

CT SET CHART TYPEコマンドは、指定されたチャートのタイプを<タイプ>に変更します。

引数<タイプ>は、2次元グラフに対しては2Dグラフタイプ、3次元グラフに対しては3Dグラフタイプである必要があります。

以下の表は、チャートタイプのコードです：

コード	チャート	タイプ
1	2D	面
2	2D	棒
3	2D	ピクチャ
4	2D	線
5	2D	散布図
6	2D	円
7	2D	ポーラー
8	2D	XY
100	3D	棒
101	3D	線
102	3D	面
103	3D	等高線
104	3D	三角形
105	3D	ピン

例題

CT Get chart type関数の例を参照してください。

参照

CT Get chart type

CT UPDATE CHART

CT UPDATE CHART (エリア ; オブジェクト ; 警告表示)

引数	タイプ	説明
エリア	倍長整数	4D Chartエリア
オブジェクト	倍長整数	オブジェクトID
警告表示	整数	ユーザに警告を表示するか？ 0=しない、1=する

説明

CT UPDATE CHARTコマンドは、データベース内のデータから作成されたグラフを更新します。このコマンドは、「チャート」メニューの「更新」メニューコマンドと同じです。

このコマンドはデータベースのフィールドからユーザが作成したグラフ、または開発者が**CT Chart selection**関数または**CT Chart data**関数を使用して作成したグラフだけを更新します。

グラフは、グラフ化されるテーブルのカレントセクション内のレコードを使用して更新されます。

引数<警告表示>が1である場合には、ユーザに「警告」ボックスが表示されるため、アクションの受け付けがキャンセルを選択できます。<警告表示>が0の場合は、「警告」ボックスは表示されません。

例題

以下の例は、グラフ化されるテーブルのセクションを変更し、変更を表示するようにグラフを更新します。

REDUCE SELECTION ([Table] ; 350)
CT UPDATE CHART (Area ; \$ChartID ; 0)

参照

なし

CT Get chart picture

CT Get chart picture (エリア ; オブジェクト ; タイプ ; 特定部分) ピクチャ

引数	タイプ	説明
エリア	倍長整数	4D Chartエリア
オブジェクト	倍長整数	オブジェクトID
タイプ	整数	ピクチャを取得するオブジェクトのタイプ
特定部分	倍長整数	ピクチャを取得するオブジェクトの特定の部分
戻り値	ピクチャ	ピクチャチャートの指定された系列に表示されているピクチャ

説明
CT Get chart picture関数は、ピクチャチャートの指定されたシリーズに表示されているピクチャを返します。ピクチャはピクチャ変数内に返されます。

引数 < タイプ > は8である必要があり、これはチャート内の系列です。

引数 < 特定部分 > は、系列の数値に100を乗算したものと同等である必要があります。

例題
以下の例はピクチャグラフの最初の系列からピクチャをコピーし、それをクリップボードに配置します。

```
$Pict:= CT Get chart picture (Area ; $ChartID ; 8 ; 100)
CT PICTURE TO CLIPBOARD ($Pict)
```

参照
CT SET CHART PICTURE

CT SET CHART PICTURE

CT SET CHART PICTURE (エリア; オブジェクト; タイプ; 特定部分; ピクチャ)

引数	タイプ	説明
エリア	倍長整数	4D Chartエリア
オブジェクト	倍長整数	オブジェクトID
タイプ	整数	属性を取得するオブジェクトのタイプ
特定部分	倍長整数	属性を取得するオブジェクトの特定の部分
ピクチャ	ピクチャ	「ピクチャ」グラフの系列に貼り付ける ピクチャ

説明

CT SET CHART PICTUREコマンドは、指定された系列に引数<ピクチャ>を貼り付けます。

引数<オブジェクト>は、ピクチャグラフである必要があります。

引数<タイプ>は8である必要があり、これはグラフ内の系列です。

引数<特定部分>は、系列の数値に100を乗算したものと同等である必要があります。

例題

以下の例は、グラフがピクチャグラフである場合には、クリップボードから選択したグラフの最初の系列にピクチャをコピーします。

```
$ChartID:= CT Get ID (Area ; 0 ; 1)
If (CT Get chart type (Area ; $ChartID)=3)
  $Pict:= CT Clipboard to picture
  CT SET CHART PICTURE (Area ; $ChartID ; 8 ; 100 ; $Pict)
End if
```

参照

CT Get chart picture

CT EXPLODE PIE

CT EXPLODE PIE (エリア ; オブジェクト ; 項目 ; パーセンテージ)

引数	タイプ	説明
エリア	倍長整数	4D Chartエリア
オブジェクト	倍長整数	オブジェクトID
項目	整数	切り離す円グラフのパイウェッジの 項目番号 (0=すべてのパイウェッジ)
パーセンテージ	整数	半径の長さのパーセンテージ (0から1000まで)

説明

CT EXPLODE PIE コマンドは、円グラフの中心から指定されたパイウェッジを移動します。

引数 < 項目 > は、移動させるパイウェッジの項目番号です。 < 項目 > が0の場合には、すべてのパイウェッジが移動されます。

引数 < パーセンテージ > は、半径の長さのパーセンテージとして指定された、パイウェッジの移動距離です。このため、円グラフのサイズが変更されると、移動距離は新しい半径に従って変わります。

例題

以下の例は\$ChartIDに指定された円グラフの最初の3つの部分を切り離します。各パイウェッジは円の半径の5%の距離で外側に移動されます。

For (\$i;1;3)

CT EXPLODE PIE (Area ; \$ChartID ; \$i ; 5)

End for

参照

なし

CT GET TIPS ATTRIBUTES

CT GET TIPS ATTRIBUTES (エリア ; オブジェクト ; 軸 ; ツールバー ; ステータス ; 内容 ; フォーマット ; フォーマットX ; メソッド)

引数	タイプ	説明
エリア	倍長整数	4D Chartエリア
オブジェクト	倍長整数	オブジェクトID
軸	整数	選択した軸 1=項目、2=系列、4=値
ツールバー	整数	4D Chartツールバーを表示 0=表示しない、1=表示する
ステータス	整数	モードを表示 0=ヒントなし、1=常にヒントを表示、 2=要求時にのみヒントを表示
内容	整数	ヒントの内容 0=値のみ、1=パーセンテージのみ、 2=値とパーセンテージ
フォーマット	英文字	Z軸の値のフォーマットを表示
フォーマットX	英文字	X軸の値のフォーマットを表示
メソッド	英文字	実行するメソッドの名前

説明

CT GET TIPS ATTRIBUTESコマンドは引数<軸> <ツールバー> <内容> <フォーマット> <フォーマットX> <メソッド> 変数のエリアまたはオブジェクトによって指定したヒントの属性を返します。

引数<軸>はヒントが利用されている軸を示します。これは追加したいいくつかの軸の数からの結果の数で構成しています。軸の数は：

数	軸
1	項目軸
2	系列軸
4	値軸

引数<ツールバー>は4D Chartツールバーが表示されているかどうかの情報を示します。

引数<ステータス>はヒントの設定の表示を示します。ヒントは常に実行されているか、要求時に実行するか（Windows版では"Ctrl"、Macintosh版では"command"キーが押された時）または実行しないようにできます。

引数<内容>はタイプ情報を表示されているか知ることができます。情報は値、パーセンテージまたは両方できます。

引数<フォーマット>はZ軸のヒントの値のフォーマットを表示します。フォーマットが"通常"の場合は、空の文字列（""）がフォーマットに返されます。フォーマット表示に空白文字を使うことの詳細は『4th Dimension デザインリファレンス』を参照してください。

引数<フォーマットX>はX軸（XYグラフのみ）を適用した以外のフォーマットと同様です。

引数<メソッド>はヒントが表示されるのと同時に実行されているメソッドの名前です。

参照

CT SET TIPS ATTRIBUTES

CT SET TIPS ATTRIBUTES

CT SET TIPS ATTRIBUTES(エリア；オブジェクト；軸；ツールバー；ステータス；内容；フォーマット；フォーマットX；メソッド)

引数	タイプ	説明
エリア	倍長整数	4D Chartエリア
オブジェクト	倍長整数	オブジェクトID
軸	整数	選択した軸 1=項目、2=系列、4=値
ツールバー	整数	4D Chartツールバーを表示 0=表示しない、1=表示する
ステータス	整数	モードを表示 0=ヒントなし、1=常にヒントを表示、 2=要求時にのみヒントを表示
内容	整数	ヒントの内容 0=値のみ、1=パーセンテージのみ、 2=値とパーセンテージ
フォーマット	英文字	Z軸の値のフォーマットを表示
フォーマットX	英文字	X軸の値のフォーマットを表示
メソッド	英文字	実行するメソッドの名前

説明

CT GET TIPS ATTRIBUTESコマンドは引数<軸> <ツールバー> <内容> <フォーマット> <フォーマットX> <メソッド> 変数のエリアまたはオブジェクトによって指定したヒントの属性の修正ができます。

引数<軸>はヒントが利用されている軸を示します。これは追加したいいくつかの軸の数からの結果の数で構成しています。軸の数は：

数	軸
1	項目軸
2	系列軸
4	値軸

引数<ツールバー>は4D Chartツールバーが表示されているかどうかの情報を示します。

引数<ステータス>はヒントの設定の表示を示します。ヒントは常に表示されているか、要求時に表示するか（Windows版では"Ctrl"、Macintosh版では"command"キーが押された時）または実行しないようにできます。

引数<内容>はタイプ情報を表示されているか知ることができます。情報は値、パーセンテージまたは両方できます。

引数<フォーマット>はZ軸のヒントの値のフォーマットを表示します。フォーマットが"通常"の場合は、空の文字列("")がフォーマットに返されます。フォーマット表示に空白文字を使うことのより詳しい説明は『4th Dimensionデザインリファレンス』を参照してください。

引数<フォーマットX>はX軸(XYグラフのみ)を適用した以外のフォーマットと同様です。

引数<メソッド>はヒントが表示されるのと同時に実行されているメソッドの名前です。4つの引数を受け入れます。メソッドが空の文字列の場合は、ヒントが表示された時メソッドは実行されません。4D Chartがメソッドを呼び出した時、エラー処理が使用されている4つの引数(\$1,\$2,\$3 and \$4)が戻ります。

引数	説明
\$1	このメソッドが実行されている4D Chartエリアです。
\$2	グラフのIDを含んでいます。
\$3	N番目の項目の要素
\$4	N番目の系列の要素

引数<\$3>と<\$4>はカーソルがグラフ要素の上に位置されていない場合はゼロを設定できます。

その後でデータベースをコンパイルする場合は、これらの引数を以下のように定義してください。

C_LONGINT (\$1;\$2;\$3;\$4)

参照
なし

CT GET CHART COORDINATES

CT GET CHART COORDINATES (エリア ; オブジェクト ; 左 ; 上 ; 右 ; 下)

引数	タイプ	説明
エリア	倍長整数	4D Chartエリア
オブジェクト	倍長整数	オブジェクトID
左	整数	チャートの開始の水平位置（ポイント単位）
上	整数	チャートの開始の垂直位置（ポイント単位）
右	整数	チャートの終了の水平位置（ポイント単位）
下	整数	チャートの終了の垂直位置（ポイント単位）

説明

CT GET CHART COORDINATES コマンドはエリア内のオブジェクトで設計したチャートの矩形の組み合わせの左、上、右、下の値を返します。

引数 < 左 > はグラフの左隅とスクリーンの左隅との間の距離を示しています。

引数 < 上 > はグラフの頂上とスクリーンの頂上との間の距離を示しています。

引数 < 右 > はグラフの右隅とスクリーンの右隅との間の距離を示しています。

引数 < 下 > はグラフの下とスクリーンの下との間の距離を示しています。

参照

CT SET CHART COORDINATES

CT SET CHART COORDINATES

CT SET CHART COORDINATES (エリア ; オブジェクト ; 左 ; 上 ; 右 ; 下)

引数	タイプ	説明
エリア	倍長整数	4D Chartエリア
オブジェクト	倍長整数	オブジェクトID
左	整数	チャートの開始の水平位置（ポイント単位）
上	整数	チャート開始の垂直位置（ポイント単位）
右	整数	チャートの終了の水平位置（ポイント単位）
下	整数	チャートの終了の垂直位置（ポイント単位）

説明

CT SET CHART COORDINATES コマンドは4D Chart内のグラフを引数 <左>、<上>、<右>、<下> に渡した値を使用して位置を修正します。

引数 <左> はグラフの左隅とスクリーンの左隅との間の距離を示しています。

引数 <上> はグラフの頂上とスクリーンの頂上との間の距離を示しています。

引数 <右> はグラフの右隅とスクリーンの右隅との間の距離を示しています。

引数 <下> はグラフの下とスクリーンの下との間の距離を示しています。

参照

CT GET CHART COORDINATES

以下のコマンドと関数は、「ルーチン」エリアの「Hot Links」テーマ内にあります：

CT PUBLISH	CT Subscribe
CT ADD TO HOT LINK	CT UNSUBSCRIBE
CT UNPUBLISH	

これらのコマンドと関数によって、4D Chartホットリンクの発行、変更、発行解除がメソッドでできます。また、任意のプラグインからのピクチャホットリンクの引用、引用解除ができます。

CT PUBLISH

CT PUBLISH (エリア; スコープ; 名前)

引数	タイプ	説明
エリア	倍長整数	4D Chartエリア
スコープ	倍長整数	コマンドのスコープ -1=すべて、0=選択されたオブジェクト >0=オブジェクトID
名前	文字列	ホットリンクの名前

説明

CT PUBLISHコマンドは、引数<エリア>内の<スコープ>で記述されるオブジェクトを<名前>という新しいホットリンクとして発行します。

<スコープ>が-1の場合には、**CT PUBLISH**コマンドは<エリア>にある全オブジェクトを発行します。

<スコープ>が0の場合には、**CT PUBLISH**コマンドは<エリア>内で選択されたオブジェクトを発行します。

<スコープ>が0よりも大きな値の場合には、それが特定オブジェクトのIDと同じである必要があり、そのオブジェクトだけが発行されます。

引数<名前>が空の文字列("") の場合には、ユーザが名前を選択できる「ホットリンクを発行」ダイアログボックスが表示されます。

例題

以下の例は、ユーザにホットリンク名を要求し、そこで選択されたオブジェクトをホットリンクとして発行します。入力した名前がすでに存在する場合にはユーザに警告します。

```
$Name := Request ("選択したオブジェクトのホットリンク名を入力してください。")
If (OK = 1)
    CT PUBLISH (Area ; 0 ; $Name)
    If (CT Error= 37)
        ALERT ("その名前を持ったホットリンクがすでに存在します！")
    End if
End if
```

参照

CT Get ID、CT Subscribe、CT UNPUBLISH

CT ADD TO HOT LINK

CT ADD TO HOT LINK (エリア; スコープ; 名前)

引数	タイプ	説明
エリア	倍長整数	4D Chartエリア
スコープ	倍長整数	コマンドのスコープ -1=すべて、0=選択されたオブジェクト >0=オブジェクトID
名前	文字列	ホットリンクの名前

説明

CT ADD TO HOT LINKコマンドは、ホットリンク名<名前>に<スコープ>で記述された<エリア>のオブジェクトを追加します。

<スコープ>が-1の場合には、**CT ADD TO HOT LINK**コマンドはドキュメント内の全オブジェクトをホットリンクに追加します。

<スコープ>が0の場合には、**CT ADD TO HOT LINK**コマンドは現在選択されているオブジェクトをホットリンクに追加します。

<スコープ>が0よりも大きな値の場合には、それが特定オブジェクトのIDと同じである必要があり、そのオブジェクトがホットリンクに追加されます。

引数<名前>が空の文字列("") の場合には、ユーザがホットリンクを選択できる「ホットリンク選択」ダイアログボックスが表示されます。

<名前>が<エリア>のホットリンクではない場合には、**CT ADD TO HOT LINK**コマンドは何も行いません。

例題

以下の例は、ユーザにホットリンク名を要求し、そこで指定されたホットリンクに選択されたオブジェクトを追加します。ホットリンクが存在しない場合にはユーザに警告します。

```
$Name := Request ("選択したオブジェクトをどのホットリンクに追加しますか？")
If (OK = 1)
    CT ADD TO HOT LINK (Area ; 0 ; $Name)
    If (CT Error=5)
        ALERT ("その名前のホットリンクは存在しません。")
    End if
End if
```

参照

CT PUBLISH、CT Subscribe

CT UNSUBSCRIBE

CT UNSUBSCRIBE (エリア ; 名前)

引数	タイプ	説明
エリア	倍長整数	4D Chartエリア
名前	文字列	ホットリンクの名前

説明

CT UNSUBSCRIBE コマンドは、引数 < 名前 > で記述されたホットリンクへの < エリア > の引用を解除します。

< 名前 > のすべてのコピーは < エリア > から消去されます。このコマンドは、「ホットリンク引用解除」ダイアログボックスから < 名前 > を選択することと同じです。ホットリンクのひとつのインスタンスだけを消去する場合は、そのオブジェクトを削除するだけで構いません。

< 名前 > が空の文字列 ("") の場合には、ユーザがホットリンクを選択できる「ホットリンク引用解除」ダイアログボックスが表示されます。

例題

以下の例は、ユーザにホットリンク名を要求し、そこで指定されたホットリンクのすべてのインスタンスを消去します。

```
$Name := Request ("どのホットリンクを消去しますか？")
```

```
If (OK = 1)
```

```
    CT UNPUBLISH (Area ; $Name)
```

```
End if
```

参照

CT PUBLISH、CT Subscribe

CT Subscribe

CT Subscribe (エリア ; 名前) 倍長整数

引数	タイプ	説明
エリア	倍長整数	4D Chartエリア
名前	文字列	ホットリンクの名前
戻り値	倍長整数	新しいオブジェクトのオブジェクトID

説明

CT Subscribe関数は、すでに存在しているホットリンク名<名前>を引用し、新しいオブジェクトのIDを返します。

この関数は、引数<エリア>内に新しいオブジェクトを作成します。

引数<名前>が空の文字列("") の場合には、ユーザがホットリンクを選択できる「ホットリンク引用」ダイアログボックスが表示されます。

<名前>が存在しない場合には、**CT Subscribe**関数は-32000を返します。

指定されたホットリンクがピクチャタイプのホットリンクである場合には、PICTが4D Chartエリアのピクチャとして表示されます。指定されたホットリンクが値タイプのホットリンクである場合には、4D Chartが「プロパティ」ダイアログボックスで指定されたデフォルトホットリンクタイプを使用してデータからグラフを生成します。

例題

以下の例は、ユーザにホットリンク名を要求し、そこで指定されたホットリンクを引用します。引用が正常に行われた場合には、表示可能なエリアでホットリンクが中央に配置されます。

```
$Name := Request ("どのホットリンクを引用しますか?") `ホットリンクを取得する
If (OK = 1) `要求が受け付けられたら、
    $Hotlink := CT Subscribe (Area ; $Name) `そのホットリンクを引用する
    If (CT Error=0) `エラーがなければ、
        `エリアのクリップされた境界を取得する
        CT GET AREA BOUNDARY (Area ; 1 ; $left ; $top ; $right ; $bottom)
        `ホットリンクの境界を取得する
        CT GET BOUNDARY(Area ; $HotLink ; $left2 ; $top2 ; $right2 ; $bottom2)
        `ホットリンクをエリアの中央に配置する
        CT MOVE (Area ; $HotLink ; (($right-$left)-($right2-$left2)) /2 ; (($bottom-$top)-($bottom2-$top2)) /2)
    End if
End if
```

参照

CT PUBLISH、CT UNPUBLISH

CT UNPUBLISH

CT UNPUBLISH (エリア；名前)

引数	タイプ	説明
エリア	倍長整数	4D Chartエリア
名前	文字列	ホットリンクの名前

説明

CT UNPUBLISH コマンドは、引数<エリア>の<名前>というホットリンクの発行を解除します。このコマンドは、「ホットリンク解除」ダイアログボックスでホットリンクを選択することと同じです。

引数<名前>が空の文字列("")の場合には、発行を解除するホットリンクをユーザが選択できる「ホットリンク解除」ダイアログボックスが表示されます。

<名前>が存在しないか、あるいは<名前>が<エリア>から発行されたホットリンクではない場合には、**CT UNPUBLISH** コマンドは何も行いません。

例題

以下の例は、ユーザにホットリンク名を要求し、そこで指定されたホットリンクの発行を解除します。

```
$Name := Request ("発行を解除するホットリンクの名前を入力してください。")
```

```
If (OK = 1)
```

```
    CT UNPUBLISH (Area ; $Name)
```

```
    If (CT Error =5)
```

```
        ALERT ("その名前のホットリンクは存在していません。")
```

```
    End if
```

```
End if
```

参照

CT PUBLISH、CT Subscribe

以下のコマンドと関数は、「ルーチン」エリアの「Printing」テーマ内にあります：

CT PRINT

CT PRINT MERGE

これらのコマンドによって、さまざまな方法で4D Chartエリアを印刷することができます。

CT PRINT

CT PRINT (エリア；キャンセル可；{プリントダイアログ})

引数	タイプ	説明
エリア	倍長整数	4D Chartエリア
キャンセル可	整数	印刷のキャンセルを許可するか？ 0=印刷処理のキャンセルを許可しない 1=印刷処理のキャンセルを許可する
プリントダイアログ	整数	「プリント」ダイアログボックスを表示するか？ 0=ダイアログボックスを表示する 1=ダイアログボックスを表示しない

説明

CT PRINTコマンドは、引数<エリア>内のドキュメントを印刷します。**CT PRINT**コマンドをコールすることは、「プリント設定」ダイアログボックスがユーザに提示されない以外は、「ファイル」メニューから「プリント...」を選択することに類似した関数を実行します。印刷前に「プリント設定」ダイアログボックスを表示するには、**CT DO COMMAND**コマンドを使用します。

引数<キャンセル可>が1の場合には、4D Chartはユーザが「Ctrl (Macintosh版では、command) + . (ピリオド)」キーを押すことによって印刷をキャンセルできるダイアログボックスを表示します。ユーザが印刷をキャンセルした場合には、**CT Error**関数はエラー番号20を返します。<キャンセル可>が0の場合には、このダイアログボックスは表示されず、ユーザは印刷をキャンセルできません。

オプション引数の<プリントダイアログ>が0の場合は、標準の「プリント」ダイアログボックスは表示されず、印刷ジョブが即座に開始されます。<プリントダイアログ>が1である場合には、標準の「プリント」ダイアログボックスが表示されます。

参照

CT DO COMMAND

CT PRINT MERGE

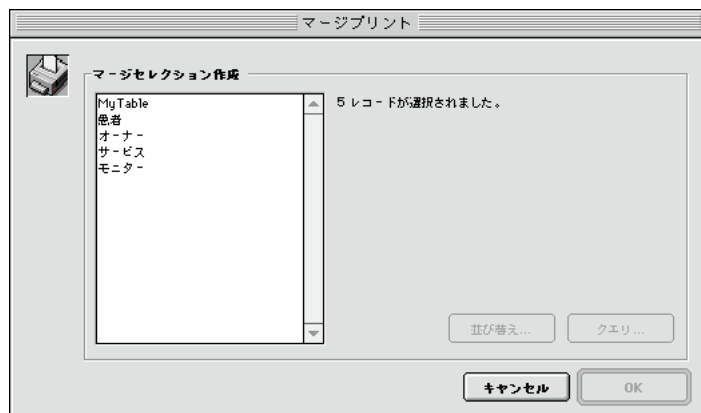
CT PRINT MERGE (エリア; テーブル番号; キャンセル可; {プリントダイアログ})

引数	タイプ	説明
エリア	倍長整数	4D Chartエリア
テーブル番号	整数	テーブル番号
キャンセル可	整数	印刷のキャンセルを許可するか? 0=印刷処理のキャンセルを許可しない 1=印刷処理のキャンセルを許可する
プリントダイアログ	整数	「プリント」ダイアログボックスを表示するか? 0=ダイアログボックスを表示する 1=ダイアログボックスを表示しない

説明

このコマンドは、引数<テーブル番号>のカレントセクション用にプリントマージを実行できます。プリントマージ用に使用されたドキュメントは、<エリア>で指定されます。

<テーブル番号>が0の場合には、「マージセクション作成」ダイアログボックスが表示されます。



引数<キャンセル可>が1の場合には、4D Chartはユーザが「Ctrl (Macintosh版では、command) +. (ピリオド)」キーを押すことによって印刷をキャンセルできるダイアログボックスを表示します。ユーザが印刷をキャンセルした場合には、**CT Error**関数はエラ

一番号20を返します。＜キャンセル可＞が0の場合には、このダイアログボックスは表示されず、ユーザは印刷をキャンセルできません。

オプション引数の＜プリントダイアログ＞が0の場合は、標準の「プリント」ダイアログボックスは表示されず、印刷ジョブが即座に開始されます。＜プリントダイアログ＞が1である場合には、標準の「プリント」ダイアログボックスが表示されます。

例題

以下の例は、4D Chartエリアが「値表示」モード用に設定され、プリントマージを実行することを確認する例です。

プリントマージ用の選択を生成する

ALL RECORDS ([MyTable])

表示モードが「値表示」に設定されていることを確認する

CT MENU STATUS (Area ; 6006 ; \$Checked ; \$Available ; \$Name)

If (\$Name="値表示")

CT DO COMMAND (Area ; 6006) 表示を「値表示」モードに設定する

End if

ユーザの操作なしにプリントマージを実行する

CT PRINT MERGE (Area ; Table (->[MyTable]) ; 0 ; 0)

参照

なし

以下のコマンドと関数は、「ルーチン」エリアの「Utilities」テーマ内にあります：

CT Font name	CT RGB to color
CT Font number	CT COLOR TO RGB
CT Clipboard to picture	CT Index to color
CT PICTURE TO CLIPBOARD	CT Color to index

このテーマのコマンドと関数によって、ユーザはフォント、カラー、クリップボードを扱うことができます。

4 D Chartコマンドでカラーを指定する

4D Chartでカラーを指定するには、以下の3種類の方法があります。

RGB：赤、緑、青のカラー（3つの倍長整数）。

インデックス： 4th Dimensionパレットの1から256までのカラーで、モニタが256色に設定されていれば、「塗りつぶしカラー」、「線カラー」、「テキストカラー」の各サブメニューで表示されます（ひとつの倍長整数）。

カラー：4D Chart内部で使用する値（ひとつの倍長整数）。

この節で説明するユーティリティコマンドは、これらの3種類の表記の間でカラーの値を変換します。第5章と第7章（「チャートコマンド」と「オブジェクトコマンド」）のコマンドは、倍長整数タイプの<カラー>を引数として想定しています。

CT RGB to color

CT RGB to color (赤 ; 緑 ; 青) 倍長整数

引数	タイプ	説明
赤	倍長整数	赤の値 (0から65535)
緑	倍長整数	緑の値 (0から65535)
青	倍長整数	青の値 (0から65535)
戻り値	倍長整数	カラーの値 (4D Chart内部)

説明

CT RGB to color関数は、引数<赤>、<緑>、<青>のコンポーネントを表す値を返します。この数値は、いくつかの4D Chartコマンドで使用されます。

引数<赤>、<緑>、<青>は、システムのカラーピッカーで使用されているものと同じです。

以下の表は、一般的に使用される3つのカラーでの<赤>、<緑>、<青>の値を示しています：

カラー	赤	緑	青
赤	56683	2242	1698
緑	0	32768	4528
青	0	0	54272

例題

以下の例は、赤用の色変数を設定します。

```
$color:= CT RGB to color (56683 ; 2242 ; 1698)
```

参照

CT COLOR TO RGB、CT color to index、CT index to color

CT COLOR TO RGB

CT COLOR TO RGB (カラー ; 赤 ; 緑 ; 青)

引数	タイプ	説明
カラー	倍長整数	カラーの値（4D Chart内部の値）
赤	倍長整数	赤の値を受け取る（0から65535）
緑	倍長整数	緑の値を受け取る（0から65535）
青	倍長整数	青の値を受け取る（0から65535）

説明

CT COLOR TO RGBコマンドは、引数<カラー>にあるカラーの値を分解して、<赤>、<緑>、<青>のコンポーネントを表す変数に値を返します。

例題

以下の例は、カラーの値用のコンポーネントRGB値を取得し、それらをいくつかのローカル変数に配置します。

```
$color:=100000
```

```
CT COLOR TO RGB ($color ; $red ; $green ; $blue)
```

参照

CT RGB to color、CT color to index、CT index to color

CT Index to color

CT Index to color (インデックス) 倍長整数

引数	タイプ	説明
インデックス	整数	パレットインデックス
戻り値	倍長整数	インデックスで記述した色

説明

CT Index to color関数は、引数<インデックス>で記述されたカラーを返します。

<インデックス>は4th Dimensionカラーパレットに特定の色を指定する整数です。
4th Dimensionパレット上のカラーは、1から256までの番号がついています。

CT Index to color関数は、個別のコンポーネントを知らなくても色を指定できる便利な方法です。

例題

以下の例は、「vColor」変数にシアンの色（パレットインデックス番号8）の色の値を配置します。

```
vColor:= CT Index to color (8)
```

参照

CT color to index、CT RGB to color、CT COLOR TO RGB

CT Color to index

CT Color to index (カラー) 整数

引数	タイプ	説明
カラー	整数	カラーの値 (4D Chart内部の値)
戻り値	整数	4Dパレットの最も近い色のインデックス

説明

CT Color to index関数は、4th Dimensionカラーパレット上に引数 <カラー> に最も近い色のインデックスを返します。

例えば、特定の青の影が指定された場合に、**CT Color to index**関数は4th Dimensionパレットに最も近い青の影を返します。4th Dimensionパレット上の色は1から256までの番号が付けられます。

例題

以下の例は、赤に最も近い色のパレットインデックスを「vColor」変数に配置します。

```
vColor:= CT Color to index (CT RGB to color (56683 ; 2242 ; 1698))
```

参照

CT index to color、CT RGB to color、CT COLOR TO RGB

CT Font name

CT Font name (フォント番号) 文字列

引数	タイプ	説明
フォント番号	整数	フォントID番号
戻り値	文字列	フォントの名前

説明

CT Font name関数は、IDが<フォント番号>であるフォントの名前を返します。

引数<フォント番号>が存在しない場合には、**CT Font name**関数は空の文字列を返します。

例題

以下の例は、IDが3のフォントの名前を返します。

vName:= **CT Font name** (3)

参照

CT Font number

CT Font number

CT Font number (フォント名) 整数

引数	タイプ	説明
フォント名	文字列	フォントの名前
戻り値	整数	フォントのID番号

説明

CT Font number関数は、名前が<フォント名>であるフォントのIDを返します。

例題

以下の例は、フォント「Osaka」の数値を返します。

vNumber:= **CT Font number** ("Osaka")

参照

CT Font name

CT Clipboard to picture

CT Clipboard to picture ピクチャ

引数	タイプ	説明
----	-----	----

この関数には、引数はありません		
-----------------	--	--

戻り値	ピクチャ	クリップボードの内容のコピー
-----	------	----------------

説明

CT Clipboard to picture関数は、クリップボードの内容のコピーである4th Dimensionピクチャを返します。

クリップボードにピクチャがない場合には、**CT Clipboard to picture**関数は空のピクチャを返します。

例題

以下の例は、クリップボードから「vPict」変数にピクチャをコピーします。

vPict:= **CT Clipboard to picture**

参照

CT PICTURE TO CLIPBOARD

CT PICTURE TO CLIPBOARD

CT PICTURE TO CLIPBOARD (ピクチャ)

引数	タイプ	説明
ピクチャ	ピクチャ	ピクチャ

説明

CT PICTURE TO CLIPBOARD コマンドは、引数<ピクチャ>をクリップボードにコピーします。

クリップボード上にコピーされると、ピクチャがペーストできる場所ならどこにでも<ピクチャ>を貼り付けることができます。

例題

以下の例は、“ [Chart]Object ” フィールドの内容をクリップボードにコピーします。

CT PICTURE TO CLIPBOARD ([Chart]Object

参照

CT Clipboard to picture

多角形の描画

操作	Windows	Macintosh
最後の頂点を削除する	Delete	delete
1番目の頂点で多角形を閉じる	Alt+Enter	option+enter
多角形を終了する	Enter	enter

テキストの入力

操作	Windows	Macintosh
カレントテーブルのフィールドを表示する	Alt+クリック	option+クリック
すべてのテーブルとフィールドを表示する	Shift+Alt+クリック	shift+option+クリック
テキスト入力モードと選択テキストオブジェクトを終了する	Enter	enter

選択オブジェクトの移動

操作	Windows	Macintosh
1ピクセル上に移動する		
1ピクセル下に移動する		
1ピクセル左に移動する		
1ピクセル右に移動する		

オブジェクトサイズの変更

操作	Windows	Macintosh
1ピクセル高さを低くする	Ctrl+	command+
1ピクセル高さを高くする	Ctrl+	command+
1ピクセル幅を狭くする	Ctrl+	command+
1ピクセル幅を広くする	Ctrl+	command+

オブジェクトの選択

選択範囲	Windows	Macintosh
1つのオブジェクト	クリック	クリック
1つのオブジェクト（または選択解除）	Shift+クリック	shift+クリック
マーカー内の全オブジェクト	クリック+ドラッグ	クリック+ドラッグ
マーカー内部およびマーカーで交差された全オブジェクト	Ctrl+クリック+ドラッグ	command+クリック+ドラッグ

メニューコマンドのショートカット

メニューコマンド	Windows	Macintosh
新規	Ctrl+Shift+n	command+shift+n
開く...	Ctrl+Shift+o	command+shift+o
保存...	Ctrl+Shift+s	command+shift+s
プリント	Ctrl+Shift+p	command+shift+p
フルウインドウ / フォームに戻る	Ctrl+Shift+q	command+shift+q
すべてを選択	Ctrl+Shift+a	command+shift+a
コピー	Ctrl+Shift+c	command+shift+c
貼り付け（ペースト）	Ctrl+Shift+v	command+shift+v
切り取り（カット）	Ctrl+Shift+x	command+shift+x
複製	Ctrl+Shift+d	command+shift+d
取り消し（クリア）	Ctrl+Shift+z	command+shift+z
メニューバー表示	Ctrl+Shift+m	command+shift+m
オブジェクトツール表示	Ctrl+Shift+t	command+shift+t
スクロールバー表示	Ctrl+Shift+b	command+shift+b
グループ化	Ctrl+Shift+g	command+shift+g
グループ解除	Ctrl+Shift+u	command+shift+u
オブジェクト整列	Ctrl+Shift+l	command+shift+l
最前面へ	Ctrl+Shift+]	command+shift+]
最背面へ	Ctrl+Shift+[command+shift+[
前面へ	Ctrl+Shift+'	command+shift+'
背面へ	Ctrl+Shift+;	command+shift+;

次の表は、引数<コマンド>用のコードです：

コマンド番号	メニュー	メニューコマンド
1	ツールパレット	ポインタ
2	ツールパレット	テキスト
3	ツールパレット	線
4	ツールパレット	矩形
5	ツールパレット	角の丸い
6	ツールパレット	楕円
7	ツールパレット	多角形
1001	ファイル	新規...
1002	ファイル	開く...
1003	ファイル	保存
1004	ファイル	新規保存...
1006	ファイル	テンプレートとして保存...
1008	ファイル	用紙設定...
1009	ファイル	プリント...
1010	ファイル	プリントマージ...
1012	ファイル	フルウインドウ / フォームに戻る
1013	ファイル	データ読み込み
1014	ファイル	セレクションデータを書き出し
1015	ファイル	書き出し
2001	編集	取り消し
2003	編集	切り取り (カット)
2004	編集	コピー
2005	編集	貼り付け (ペースト)
2006	編集	消去 (クリア)
2007	編集	複製
2009	編集	すべてを選択
2011	編集	プロパティ
4016	編集	表示メニュー

コマンド番号	メニュー	メニューコマンド
3001	テキスト	フォントメニュー
3002	テキスト	サイズメニュー
3003	テキスト	書体メニュー
3004	テキスト	カラーメニュー
3005	テキスト	文字揃えメニュー
4002	チャート	新規チャート
4003	チャート	軸メニュー
4004	チャート	目盛線メニュー
4005	チャート	タイトルメニュー
4007	チャート	凡例
4009	チャート	数値
4010	チャート	オプション
4012	チャート	ビュー
4014	チャート	更新
5001	オブジェクト	塗りつぶしパターンメニュー
5002	オブジェクト	塗りつぶしカラーメニュー
5004	オブジェクト	線パターンメニュー
5005	オブジェクト	線カラーメニュー
5007	オブジェクト	線幅メニュー
5008	オブジェクト	矢印形態メニュー
5010	オブジェクト	角丸めメニュー
5012	オブジェクト	調整メニュー
6001	データベース	フィールド貼り付け...
6002	データベース	フォーマット...
6003	データベース	データ参照
6004	データベース	データ参照解除
6006	データベース	値表示 / 参照表示...
6008	データベース	ホットリンク引用...
6009	データベース	ホットリンク発行...
6010	データベース	ホットリンク引用解除...

コマンド番号	メニュー	メニューコマンド
6011	データベース	ホットリンク発行解除...
6012	データベース	ホットリンクへ追加...
7001 7999	フォント	個々のフォント名
8001 8009	サイズ	個々のフォントサイズ
8010	サイズ	その他のサイズ
9001	書体	標準
9002	書体	太字 (ボールド)
9003	書体	斜体 (イタリアック)
9004	書体	下線 (アンダーライン)
9005	書体	アウトライン
9006	書体	シャドウ
10001 10999	カラー	個々のカラー
11001	文字揃え	左
11002	文字揃え	中央
11003	文字揃え	右
12001	新規2Dチャート	2D 面
12002	新規2Dチャート	2D 棒
12003	新規2Dチャート	2D 線
12005	新規2Dチャート	2D 円
12006	新規2Dチャート	2D ピクチャ
12007	新規2Dチャート	2D ポーラー
12008	新規2Dチャート	2D XY
13001	新規3Dチャート	3D 棒
13002	新規3Dチャート	3D 線
13003	新規3Dチャート	3D 面
13004	新規3Dチャート	3D 等高線
13005	新規3Dチャート	3D 三角形
13006	新規3Dチャート	3D ピン
14001	軸	項目軸 (X 軸)
14002	軸	数値軸 (Z 軸) (2D グラフ) 系列軸 (Y 軸) (3D グラフ)
14003	軸	数値軸 (Z 軸) (3D グラフ)

コマンド番号	メニュー	メニューコマンド
15001	目盛線	項目軸 (X 軸)
15002	目盛線	数値軸 (Z 軸)(2Dグラフ) 系列軸 (Y 軸)(3Dグラフ)
15003	目盛線	数値軸 (Z 軸)(3Dグラフ)
16001	タイトル	項目軸 (X 軸)
16002	タイトル	数値軸 (Z 軸)(2Dグラフ) 系列軸 (Y 軸)(3Dグラフ)
16003	タイトル	数値軸 (Z 軸)(3Dグラフ)
17001	表示	メニューバー
17002	表示	オブジェクトツール
17003	表示	チャートツール
17004	表示	スクロールバー
17005	表示	ルーラ
18001 18036	塗りつぶしパターン	個々の塗りつぶしパターン
19001 19256	塗りつぶしカラー	個々の塗りつぶしカラー
20001 20036	線パターン	個々の線パターン
21001 21256	線カラー	個々の線カラー
22001	線幅	極細線 (0.25ポイント)
22002	線幅	1ポイント
22003	線幅	2ポイント
22004	線幅	4ポイント
22005	線幅	6ポイント
22006	線幅	その他の線幅
23001	矢印形態	なし
23001	矢印形態	始点
23001	矢印形態	終点
23001	矢印形態	両端
24001	調整	最前面へ
24002	調整	最背面へ
24003	調整	前面へ
24004	調整	背面へ
24005	調整	オブジェクトの整列...
24006	調整	グループ化
24007	調整	グループ解除

次の表は、4D Chartエラーメッセージのコードです：

コード メッセージ

- 1 4D Chartのエリア参照が正しくありません。
- 2 セグメントをロードすることができません。
- 3 コマンド番号が正しくありません。
- 4 メニューコマンドを使用できません。
- 5 ホットリンクが見つかりません。
- 6 4Dテーブル番号が正しくありません。
- 7 4Dフィールド番号が正しくありません。
- 8 ピクチャを作成できませんでした。
- 9 **CT AREA TO AREA**コマンドのスコープが正しくありません。
- 10 送信元と送信先エリアは異ならなければなりません。
- 11 スコープが正しくありません。
- 12 オブジェクトIDが正しくありません。
- 13 この操作はこのオブジェクトタイプで実行することはできません。
- 14 オブジェクトインデックスが正しくありません。
- 15 選択されたオブジェクトがありません。
- 16 このドキュメント内にオブジェクトがありません。
- 17 ファイルタイプが正しくありません。
- 18 この4D Chartドキュメントのバージョンでは、サポートされていません。
- 19 この4D Chartドキュメントは最新バージョンで作成されています。
- 20 ユーザがダイアログボックスをキャンセルしました。
- 21 ホットリンクのタイプが正しくありません。
- 22 このホットリンクへの追加はホットリンク連鎖で反復して生成されます。
- 23 この操作はオブジェクトをドキュメント外に移動しました。
- 24 4Dテーブルがありません。
- 25 ビットマップイメージが大きすぎます。
- 26 この操作はオブジェクトの最大番号を越えました。
- 27 チャートを作成するための項目数が十分ではありません。

コード メッセージ

28 チャートを作成するには項目数が多すぎます。
29 チャートを作成するための系列数が十分ではありません。
30 チャートを作成するには系列数が多すぎます。
31 チャートタイプが正しくありません。
32 チャートサイズが正しくありません。
33 項目軸に設定するフィールドタイプが正しくありません。
34 数値軸に設定するフィールドタイプが正しくありません。
35 配列タイプが正しくありません。
36 値が複数あります。
37 そのホットリンク名またはホットリンクタイプはすでに存在します。
38 少なくとも1文字必要です。
39 オブジェクト境界が正しくありません。
40 角の丸みが正しくありません。
41 RGB値が正しくありません。
42 カラー値が正しくありません。
43 カラーインデックスが正しくありません。
44 クリップボードにピクチャがありません。
45 すべての値が範囲外です。
46 テキスト編集モードではありません。
47 軸インデックスが正しくありません。
48 目盛線インデックスが正しくありません。
49 多角形の頂点数が正しくありません。
50 座標が正しくありません。
51 オブジェクトサイズが正しくありません。
52 指定されたオブジェクトにはこの属性はありません。
53 フルパス名が255バイトを越えました。
54 フィールドタイプが正しくありません。
55 この種のチャートには適用できません。
56 クリップボードからの値が正しくありません。
57 クリップボードからの次元数が正しくありません。
58 セレクション値が正しくありません。
59 プリンタリソースを初期化できませんでした。
60 オフスクリーンエリアへのメモリ割り当てが十分ではありません。
61 カラーリソースで使用するメモリが十分ではありません。
62 表示項目番号が正しくありません。
63 テキストオブジェクトをコピーするメモリが十分ではありません。
64 フォントが正しくありません。

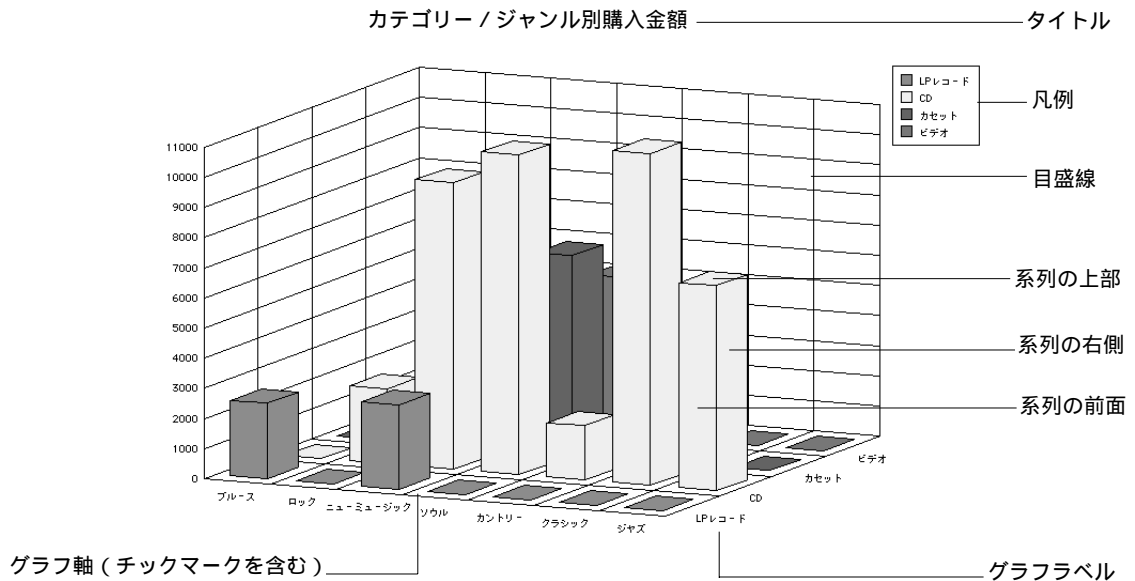
- 65 選択されたレコードがありません。
- 66 チャートのタイプの値が正しくありません。

この付録には、引数<タイプ>と<特定部分>、<パターン>、<オプション>用のコードが含まれています。

引数<タイプ>と<特定部分>のコード

グラフ軸のひとつまたは凡例などのグラフの一部をプログラムで修正する場合、引数<タイプ>と<特定部分>を使って、修正するグラフの一部を指定します。

グラフの主要部分を次の図に示します：



下記は、引数<タイプ>用のコードです；

コード	グラフ要素
1	プロット矩形
2	凡例
3	軸
4	ラベル
5	タイトル
6	主目盛線
7	補助目盛線
8	系列
9	系列のラベル

下記は、引数<特定部分>用のコードです；

グラフ要素	特定部分コード
プロット矩形	2Dグラフ：0=矩形全体 3Dグラフ：1=背面、2=側面、3=下
凡例	0=凡例矩形
軸	0=項目、1=系列、2=数値
ラベル	0=項目、1=系列、2=数値
タイトル	0=項目、1=系列、2=数値
主目盛線	0=項目、1=系列、2=数値
補助目盛線	0=項目、1=系列、2=数値
系列 / 系列のラベル	(系列番号*100) + (側面番号)
側面番号 (系列側面用)	0=すべての側面 (すべての2Dグラフに使用)、1=前面 2=左、3=右、4=上、5=下

注：2Dグラフの系列は、ひとつの側面（前面）を持っています。

：3Dグラフでは、一度に3つの側面を表示することができます。

パターンコード

次の図は、塗りつぶしパターンで使用するものです。図の右側にある数字は左の図の各パターンに対応するパターンコードを示しています。例えば、左上隅（なし）はパターンコード1です。そこから右方向に順番にプラス1していき、右下隅がパターンコード36になります。引数<パターン>は、1から36までのパターンコード指定します：

なし						1	2	3	4	5	6
						7	8	9	10	11	12
						13	14	15	16	17	18
						19	20	21	22	23	24
						25	26	27	28	29	30
						31	32	33	34	35	36

グラフタイプのオプションコード

下記は、CT GET CHART OPTIONコマンドとCT SET CHART OPTIONコマンドで使用される引数<オプション>用のコードです。

グラフタイプ	要素番号	コード
2D 面	1	方向：0=垂直、1=水平
	2	積み重ね?0=通常、1=積み重ね、2=比率
2D 棒	1	方向：0=垂直、1=水平
	2	積み重ね?0=通常、1=積み重ね、2=比率
	3	重ねる比率（0から100%）
	4	間隔比率（0から100%）
2D 線	1	方向：0=垂直、1=水平
	2	積み重ね?0=通常、1=積み重ね、2=比率 3区画の表示コントロール：0=非表示、1=表示
2D 散布図		方向：0=垂直、1=水平
	2	積み重ね? 0=通常、1=積み重ね、2=比率
2D 円	1	
	1	開始角度（0から360度）

グラフタイプ	要素番号	コード
2D ピクチャ	1	方向：0=垂直、1=水平
	2	積み重ね?0=通常、1=積み重ね、2=比率
	3	重ねる比率（0から100%）
	4	間隔比率（0から100%）
	5	水平整列 0=左、1=中央、2=右
	6	垂直整列 0=上、1=中央、2=下
	7	水平方向表示 0=切り捨て、1=拡大縮小、2=積み重ね
	8	垂直方向表示 0=切り捨て、1=拡大縮小、2=積み重ね
2D ポーラー		なし
XYチャート	1	ポイントフォーム：0=ポイント表示なし、1=円、2=四角、3=星型
	2	線のタイプ：0=線なし、1=直線、2=矢印線
	3	戻り線の表示：0=なし、1=あり
3D 棒	1	項目軸(X)を比率で指定：0=幅、1=間隔
	2	系列軸(Y)を比率で指定：0=幅、1=間隔
	3	項目軸(X)比率（0から100%）
	4	系列軸(Y)比率（0から100%）
	5	表示範囲：0=すべて、1=上部のみ
3D 線	1	系列軸(Y)を比率で指定：0=幅、1=間隔
	2	系列軸(Y)比率（0から100%）
3D 面	1	系列軸(Y)を比率で指定：0=幅、1=間隔
	2	系列軸(Y)比率（0から100%）
3D 等高線	1	表示範囲：0=すべて、1=上部のみ
3D 三角形	1	上下反転：0=なし、1=あり
	2	数値0も描画する：0=なし、1=あり
	3	系列軸(Y)を比率で指定：0=幅、1=間隔
	4	系列軸(Y)比率（0から100%）
3D ピン	1	ピン先頭の形：0=楕円形、1=四角形

A

CT ADD TO HOT LINK (エリア; スコープ; 名前)	178
CT ALIGN (エリア; スコープ; 水平; 垂直)	88
CT AREA TO AREA (ソース; コピー先; コピーコード)	98
CT AREA TO FIELD (エリア; スコープ; テーブル; フィールド; {保存方法})	99
CT Area to picture (エリア; スコープ) ピクチャ	101
CT Array to polygon (エリア; 水平配列; 垂直配列) 倍長整数	70

C

CT Chart arrays (エリア; タイプ; サイズ; 項目配列; 系列配列; 数値配列) 数値	111
CT Chart data (エリア; タイプ; サイズ; グループ項目; グループ系列; テーブル番号 ; 項目フィールド; 系列フィールド; 数値フィールド) 倍長整数	116
CT Chart selection (エリア; タイプ; サイズ; グループ項目; テーブル番号; 項目フィールド; 系列 / 数値フィールド) 倍長整数	114
CT Clipboard to picture ピクチャ	193
CT Color to index (カラー) 整数	191
CT COLOR TO RGB (カラー; 赤; 緑; 青)	189
CT Count (エリア; スコープ) 整数	87

D

CT DELETE OFFSCREEN AREA (エリア)	107
CT DO COMMAND (エリア; コマンド)	44
CT Draw line (エリア; 左; 上; 右; 下; 矢印形態) 倍長整数	67
CT Draw oval (エリア; 左; 上; 右; 下) 倍長整数	69
CT Draw rectangle (エリア; 左; 上; 右; 下; 角の丸み) 倍長整数	68
CT Draw text (エリア; 左; 上; 右; 下; テキスト) 倍長整数	66

E

CT Error (メッセージ) 整数	50
CT EVENT FILTER (エリア; フィルタ)	51

CT EXPERT COMMAND (エリア ; コマンド ; ステータス)	52
CT EXPERT MODE (エリア ; モード)	53
CT EXPLODE PIE (エリア ; オブジェクト ; 項目 ; パーセンテージ)	169

F

CT FIELD TO AREA (エリア ; テーブル ; フィールド)	100
CT Font name (フォント番号) 文字列	192
CT Font number (フォント名) 整数	192

G

CT GET 3D VIEW (エリア ; オブジェクト ; 回転 ; 仰角)	159
CT GET AREA BOUNDARY (エリア ; 境界コード ; 左 ; 上 ; 右 ; 下)	108
CT GET AXIS ATTRIBUTES (エリア ; オブジェクト ; 軸 ; 補助目盛 ; 主目盛 ; 位置 ; 反転)	132
CT GET BOUNDARY (エリア ; スコープ ; 左 ; 上 ; 右 ; 下)	76
CT GET CHART COORDINATES (エリア ; オブジェクト ; 左 ; 上 ; 右 ; 下)	174
CT GET CHART FILL ATTRIBUTES (エリア ; オブジェクト ; タイプ ; 特定部分 ; パターン ; カラー)	118
CT GET CHART LINE ATTRIBUTES (エリア ; オブジェクト ; タイプ ; 特定部分 ; パターン ; カラー ; 線幅)	123
CT GET CHART OPTIONS (エリア ; オブジェクト ; オプション)	162
CT GET CHART PART (エリア ; オブジェクト ; タイプ ; 特定部分)	161
CT Get chart picture (エリア ; オブジェクト ; タイプ ; 特定部分) ピクチャ	167
CT GET CHART TEXT ATTRIBUTES (エリア ; オブジェクト ; タイプ ; 特定部分 ; フォントID ; フォントサイズ ; スタイル ; カラー)	120
CT Get chart type (エリア ; オブジェクト) 整数	164
CT GET DATE SCALE (エリア ; オブジェクト ; 最小自動 ; 最大自動 ; 主増分自動 ; 補助増分自動 ; 最小 ; 最大 ; 主増分タイプ ; 主増分 ; 補助増分タイプ ; 補助増分)	150
CT GET DEPTH (エリア ; オブジェクト ; 水平オフセット ; 垂直オフセット)	156
CT Get display (エリア ; 項目) 整数	56
CT GET DOCUMENT SIZE (エリア ; 幅 ; 高さ)	58
CT GET FILL ATTRIBUTES (エリア ; スコープ ; パターン ; カラー)	82
CT GET HIGHLIGHT (エリア ; 先頭 ; 最終)	90
CT Get ID (エリア ; スコープ ; インデックス) 倍長整数	72
CT GET LABEL ATTRIBUTES (エリア ; オブジェクト ; 軸 ; 位置 ; 方向フォーマット { ; 頻度 })	134

CT GET LEGEND ATTRIBUTES (エリア; オブジェクト; 表示; 方向; 逆順; 反転; 位置; 水平オフセット; 垂直オフセット)	139
CT Get legend text (エリア; オブジェクト; 凡例項目) テキスト	143
CT GET LINE ATTRIBUTES (エリア; スコープ; パターン; カラー; 線幅)	80
CT Get object type (エリア; スコープ) 倍長整数	73
CT GET PROPERTIES (エリア; プリント順; 変更メッセージ; ホットリンクタイプ; 保存メッセージ)	60
CT GET REAL SCALE(エリア; オブジェクト; 最小自動; 最大自動; 主増分自動; 補助増分自動; 最小; 最大; 主増分; 補助増分)	145
CT Get refnum (エリア; スコープ) 倍長整数	74
CT GET TEXT ATTRIBUTES (エリア; スコープ; フォントID; フォントサイズ; スタイル; カラー; 位置揃え)	77
CT GET TIPS ATTRIBUTES (エリア; オブジェクト; 軸; ツールバー; ステータス; 内容; フォーマット; フォーマットX; メソッド)	170
CT GET TITLE ATTRIBUTES (エリア; オブジェクト; 軸; 位置; 方向; タイトル)	137
CT GET VALUE ATTRIBUTES (エリア; オブジェクト; 位置; 表示; 方向; フォーマット)	128
CT GET X REAL SCALE(エリア; オブジェクト; 最小自動; 最大自動; 主増分自動; 補助増分自動; 最小; 最大; 主増分; 補助増分)	147
CT GET X DATE SCALE(エリア; オブジェクト; 最小自動; 最大自動; 主増分自動; 補助増分自動; 最小; 最大; 主増分タイプ; 主増分; 補助増分タイプ; 補助増分)	154

I

CT Index to color (インデックス) 倍長整数	190
CT INSERT EXPRESSION (エリア; スコープ; 先頭; 最終; 式; {フォーマット})	95
CT INSERT FIELD (エリア; スコープ; 先頭; 最終; テーブル; フィールド; {フォーマット})	93

L

CT Last event(エリア) 倍長整数	54
-----------------------------------	----

M

CT MENU STATUS (エリア; コマンド; チェック; 使用可; 名前)	45
CT MOVE(エリア; スコープ; 左; 上)	85

N

CT NEW DOCUMENT (エリア)	103
---------------------------------	-----

CT New offscreen area	倍長整数	106
O		
CT ON ERROR (メソッド)		46
CT ON EVENT (メソッド)		47
CT ON MENU (エリア; メソッド)		48
CT OPEN DOCUMENT (エリア; ドキュメント; {モード})		104
P		
CT PICTURE TO AREA (エリア; ピクチャ)		102
CT PICTURE TO CLIPBOARD (ピクチャ)		194
CT Place picture (エリア; ピクチャ; 左; 上)	倍長整数	71
CT PRINT (エリア; キャンセル可; {プリントダイアログ})		183
CT PRINT MERGE (エリア; テーブル番号; キャンセル可; {プリントダイアログ})		184
CT PUBLISH (エリア; スコープ; 名前)		177
R		
CT RGB to color (赤; 緑; 青)	倍長整数	188
S		
CT SAVE DOCUMENT (エリア; ドキュメント; タイプ; {スコープ})		105
CT SELECT (エリア; スコープ; 動作)		84
CT SET 3D VIEW (エリア; オブジェクト; 回転; 仰角)		160
CT SET AXIS ATTRIBUTES (エリア; オブジェクト; 軸; 補助目盛; 主目盛; 位置; 反転)		133
CT SET CHART COORDINATES (エリア; オブジェクト; 左; 上; 右; 下)		175
CT SET CHART FILL ATTRIBUTES (エリア; オブジェクト; タイプ; 特定部分; パターン; カラー)		119
CT SET CHART LINE ATTRIBUTES (エリア; オブジェクト; タイプ; 特定部分; パターン; カラー; 線幅)		124
CT SET CHART OPTIONS (エリア; オブジェクト; オプション)		163
CT SET CHART PICTURE (エリア; オブジェクト; タイプ; 特定部分; ピクチャ)		168
CT SET CHART TEXT ATTRIBUTES (エリア; オブジェクト; タイプ; 特定部分; フォントID; フォントサイズ; スタイル; カラー)		121
CT SET CHART TYPE (エリア; オブジェクト; タイプ)		165
CT SET DATE SCALE (エリア; オブジェクト; 最小自動; 最大自動; 主増分自動; 補助 増分自動; 最小; 最大; 主増分タイプ; 主増分; 補助増分タイプ; 補助増分)		152
CT SET DEPTH (エリア; オブジェクト; 水平オフセット; 垂直オフセット)		158

CT SET DISPLAY (エリア ; 項目 ; 表示コード)	57
CT SET DOCUMENT SIZE (エリア ; 幅 ; 高さ)	59
CT SET ENTERABLE (エリア;モード{; ボタンモード})	55
CT SET FILL ATTRIBUTES (エリア; スコープ ; パターン ; カラー)	83
CT SET FILL ATTRIBUTES(エリア;オブジェクト;パターン;カラー)	125
CT SET HIGHLIGHT (エリア; スコープ ; 先頭 ; 最終)	91
CT SET LABEL ATTRIBUTES (エリア; オブジェクト ; 軸 ; 位置 ; 方向 ; ...フォーマット {; 頻度})	135
CT SET LEGEND ATTRIBUTES (エリア; オブジェクト; 表示 ; 方向 ; 逆順 ; 反転 ; 位置 ; 水平オフセット ; 垂直オフセット)	141
CT SET LEGEND TEXT(エリア; オブジェクト; 凡例項目 ; 凡例テキスト)	144
CT SET LINE ATTRIBUTES (エリア; スコープ ; パターン ; カラー ; 線幅)	81
CT SET LINE ATTRIBUTES(エリア;オブジェクト;パターン;カラー;線幅)	127
CT SET PROPERTIES (エリア ; プリント順 ; 変更メッセージ ; ホットリンクタイプ ; 保存メッセージ)	62
CT SET REAL SCALE(エリア; オブジェクト; 最小自動 ; 最大自動 ; 主増分自動 ; 補助増分自動 ; 最小 ; 最大 ; 主増分 ; 補助増分)	146
CT SET REFNUM (エリア ; スコープ ; 参照番号)	75
CT SET TEXT ATTRIBUTES (エリア; スコープ; フォントID ; フォントサイズ ; スタイル ; カラー ; 位置揃え)	78
CT SET TIPS ATTRIBUTES (エリア;オブジェクト ; 軸 ; ツールバー ; ステータス ; 内容 ; フォーマット;フォーマットX;メソッド)	172
CT SET TITLE ATTRIBUTES (エリア; オブジェクト; 軸 ; 位置 ; 方向 ; タイトル)	138
CT SET VALUE ATTRIBUTES (エリア ; オブジェクト ; 位置 ; 表示 ; 方向 ; フォーマット)	129
CT SET X DATE SCALE(エリア ; オブジェクト ; 最小自動 ; 最大自動 ; 主増分自動 ; 補助増分自動 ; 最小 ; 最大 ; 主増分タイプ ; 主増分 ; 補助増分タイプ ; 補助増分)	155
CT SET X REAL SCALESCALE(エリア ; オブジェクト ; 最小自動 ; 最大自動 ; 主増分自動 ; 補助増分自動 ; 最小 ; 最大 ; 主増分 ; 補助増分)	149
CT SHOW GRID LINES (エリア; オブジェクト; 軸 ; グリッド ; 表示)	131
CT SIZE(エリア; スコープ ; 幅 ; 高さ)	86
CT Subscribe (エリア ; 名前) 倍長整数	181

U

CT UNPUBLISH (エリア ; 名前)	182
CT UNSUBSCRIBE (エリア ; 名前)	180
CT UPDATE CHART (エリア; オブジェクト ; 警告表示)	166

